Japan Foundation for
Regional Art-Activities

平成25年度
公共ホール音楽活性化事業
報　告　書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国18の団体との共催により実施された平成25年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いに存じます。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、平成25年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

第１部　平成25年度公共ホール音楽活性化事業の概要
実施概要…… 2
登録アーティスト／コーディネーター…… 3
実施団体…… 4
全体研修会概要…… 5

第２部　平成25年度公共ホール音楽活性化事業　事例紹介・アシスタントレポート
大空町　(北海道)…… 8
一戸町　(岩手県)…… 13
栄町　(千葉県)…… 18
中野区　(東京都)…… 23
福井市　(福井県)…… 27
上田市　(長野県)…… 34
大垣市　(岐阜県)…… 38
尾張旭市　(愛知県)…… 44
亀山市　(三重県)…… 48
多可町　(兵庫県)…… 52
橋本市　(和歌山県)…… 56
紀の川市　(和歌山県)…… 60
倉敷市　(岡山県)…… 64
大崎上島町　(広島県)…… 69
今治市　(愛媛県)…… 72
小林市　(宮崎県)…… 77
龍郷町　(鹿児島県)…… 83
沖縄市　(沖縄県)…… 88

第３部　平成25年度公共ホール音楽活性化事業　コーディネーターレポート
小澤　櫻作　(チーフコーディネーター)…… 94
丹羽　徹　(コーディネーター)…… 97
花田　和加子　(コーディネーター)…… 99
山本　若子　(コーディネーター)…… 101
赤木　舞　(コーディネーター)…… 102
田澤　拓朗　(コーディネーター)…… 104

第４部　平成24-25年度公共ホール音楽活性化事業政令指定都市モデル事業
実施概要…… 106
全体研修会…… 109
登録アーティストオーディション…… 114
アーティスト研修会第１部…… 115
アーティスト研修会第２部…… 121

アーティスト研修会第３部…… 123
事例紹介・サブコーディネーターレポート
　グループＡ［薫風之音（尺八・箏)］…… 124
　グループＢ［中林　恭子（フルート)］…… 127
　グループＣ［加藤　礼子（ヴァイオリン）…… 129
総括公演…… 133
事業担当者レポート
　寺田　尚弘…… 134
コーディネーター・アドバイザーレポート
　田村　緑（グループＣコーディネーター）…… 135
　能祖　將夫（グループＡコーディネーター）…… 136
　児玉　真（アドバイザー／グループＢコーディネーター）…… 137

第１部
平成25年度公共ホール音楽活性化事業の概要

平成25年度公共ホール音楽活性化事業　実施概要

１　事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

２　実施内容

（１）実施団体　全国18団体

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

（２）研修事業　①全体研修会

平成25年４月15日（月）～ 17日（水）／㈶地域創造、津田ホール

開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階（公演２、３カ月前）に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

（３）公演事業　公演事業の実施（全国18地域）　平成25年９月～平成26年２月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。

①コンサート　　身近で、親しみのあるクラシック演奏会

②アクティビティ　　出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

３　費用負担

財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

（１）財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

（演奏家の出演料、交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料（演奏家）、演奏家派遣に関するマネジメント料）

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担

（２）開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）

４　主催・共催等

主　　催：開催地の地方公共団体等

共　　催：財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

助　　成：財団法人全国市町村振興協会

平成25年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1　平成24年度・25年度登録アーティスト

新居　由佳梨	（ピアノ）	プロアルテ　ムジケ
泊　真美子	（ピアノ）	東京コンサーツ
北島　佳奈	（ヴァイオリン）	ミリオンコンサート協会
松本　蘭	（ヴァイオリン）	ジェイ・ツー
奥田　なな子	（チェロ）	ミリオンコンサート協会
松尾　俊介	（ギター）	オカムラ＆カンパニー
デュオ・レゾネ	（クラリネット＆ピアノ）	オカムラ＆カンパニー

2　コーディネーター

小澤　櫻作	（上田市制作局 交流・文化施設 開設準備室 プロデューサー）
丹羽　徹	（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 理事・事務局長）
花田　和加子	（keynote代表、ヴァイオリニスト）
山本　若子	（有限会社N.A.T取締役）
赤木　舞	（昭和音楽大学専任講師）
田澤　拓朗	（一般財団法人青森市文化スポーツ振興公社）

3　サブコーディネーター

柿塚　拓真	（公益財団法人日本センチュリー交響楽団 総務経理部マネージャー）

4　アシスタントスタッフ

菊地　俊孝	（公益財団法人東松山文化まちづくり公社）
丹羽　梓	（横浜市鶴見区民文化センター　サルビアホール）
高井　はるか	（公益財団法人せたがや文化財団　音楽事業部）
田辺　沙保里	（お茶の水女子大学大学院　比較社会文化学専攻）
西村　聡美	（武蔵野音楽大学別科　声楽選考）

5　アドバイザー

能祖　將夫	（北九州芸術劇場プロデューサー、桜美林大学准教授）
楠瀬　寿賀子	（津田ホールプロデューサー、公益財団法人せたがや文化財団音楽事業部プロデューサー）
吉本　光宏	（ニッセイ基礎研究所 主席研究員・芸術文化プロジェクト室長）

6　実施団体

No.	都道府	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	派遣アーティスト	担当コーディネーター
1	北海道	大空町	一般財団法人 大空町青少年育成協会	大空町教育文化会館	9/12～14	北島　佳奈	花田　和加子 田辺　沙保里
2	岩手県	一戸町	一戸町	一戸町コミュニティセンター	12/12～14	北島　佳奈 奥田　なな子	山本　若子 西村　聡美
3	千葉県	栄町	栄町	ふれあいプラザさかえ	11/28～30	デュオ・レゾネ	小澤　櫻作 高井　はるか
4	東京都	中野区	JTBコミュニケーションズ・野村ビルマネジメント指定管理者共同事業体	なかのZERO	11/28～30	北島　佳奈	花田　和加子 丹羽　梓
5	福井県	福井市	公益財団法人 福井市ふれあい公社	福井市文化会館	11/21～23	新居　由佳梨	田澤　拓朗 高井　はるか
6	長野県	上田市	上田市	上田文化会館	12/5～7	北島　佳奈	山本　若子 田辺　沙保里
7	岐阜県	大垣市	公益財団法人 大垣市文化事業団	大垣市スイトピアセンター	1/30～2/1	泊　真美子	丹羽　徹 柿塚　拓真
8	愛知県	尾張旭市	愛知県舞台運営事業協同組合	尾張旭市文化会館	9/19～21	新居　由佳梨	山本　若子 西村　聡美
9	三重県	亀山市	公益財団法人 亀山市地域社会振興会	亀山市文化会館	1/16～17,26	新居　由佳梨	山本　若子 菊地　俊孝
10	兵庫県	多可町	多可町	多可町文化会館 ベルディーホール	1/24～26	デュオ・レゾネ	花田　和加子 田辺　沙保里
11	和歌山県	橋本市	公益財団法人 橋本市文化スポーツ振興公社	橋本市産業文化会館 アザレア	1/23～25	北島　佳奈	赤木　舞 西村　聡美
12	和歌山県	紀の川市	紀の川市	紀の川市粉河ふるさとセンター	10/17～19	デュオ・レゾネ	小澤　櫻作 菊地　俊孝
13	岡山県	倉敷市	児島商工会議所・クラレテクノ共同事業体	児島市民交流センター ジーンズホール	11/7～9	新居　由佳梨 松本　蘭	小澤　櫻作 柿塚　拓真
14	広島県	大崎上島町	大崎上島町	大崎上島文化センター ホール神峰	9/19～21	奥田　なな子	小澤　櫻作 丹羽　梓
15	愛媛県	今治市	今治市	今治市中央公民館	1/16～18	奥田　なな子	田澤　拓朗 丹羽　梓
16	宮崎県	小林市	小林市	小林市文化会館	10/17～19	北島　佳奈	赤木　舞 柿塚　拓真
17	鹿児島県	龍郷町	社会福祉法人竜泉会	龍郷町体育文化センター りゅうゆう館	10/31～11/2	デュオ・レゾネ	丹羽　徹 菊地　俊孝
18	沖縄県	沖縄市	沖縄市	沖縄市民小劇場あしびなー	10/24～26	泊　真美子	田澤　拓朗 高井　はるか

平成25年度公共ホール音楽活性化事業　全体研修会実施概要

１　概要

平成25年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。二日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに別れて企画検討会議及び発表を行った。

２　参加者

平成25年度事業実施団体　担当者

３　日　程

平成25年４月15日（月）～ 17日（水）（３日間）

４　会　場

４月15日（月）・17日（水）：財団法人地域創造　会議室
４月16日（火）　　：津田ホール

５　実施団体研修スケジュール

４月15日（月）

時　間	会場：地域創造　会議室
13：00 ～ 13：10	オリエンテーション
13：10 ～ 13：40 (30分)	おんかつを知る　Vol.1 ～基礎編～
	小澤　櫻作（チーフコーディネーター）
13：40 ～ 14：10 (30分)	おんかつを知る　Vol.2 ～実務編～
	地域創造
休憩（15分）	
14：25 ～ 16：25 (120分)	ワークショップ
	絹川　友梨（インプロバイザー、俳優、演出家、インプロワークス㈱代表取締役）、小澤　櫻作
休憩（15分）	
16：40 ～ 19：00 (140分)	おんかつを知る Vol.3 ～事例紹介編～
	Ⅰ部：H23行田市事例（45分） 山本　若子（コーディネーター）、多田　敦（事業担当者） Ⅱ部：H23鈴鹿市事例（45分） 花田　和加子（コーディネーター）、乗松恵美（H22､23登録アーティスト） ＜休憩（５分）＞ Ⅲ部：事業担当者の役割とは（45分） 田澤　拓朗（コーディネーター）

４月16日（火）

時　間	会場：津田ホール（渋谷区千駄ヶ谷）
10：00 ～ 11：30 (90分)	おんかつから始まるホールと地域の未来
	吉本　光宏（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12：30 ～ 14：00 (90分)	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～
	コーディネーター全員
14：00 ～ 14：10 (10分)	プレゼンテーションの聴き方
	コーディネーター全員
休憩・移動（20分）	
14：30 ～ 18：05	平成24・25年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 松本　蘭（ヴァイオリン） デュオ・レゾネ（クラリネット＆ピアノ） 泊　真美子（ピアノ） ＜休憩（20分）＞ 奥田　なな子（チェロ） 松尾　俊介（ギター） ＜休憩（20分）＞ 北島　佳奈（ヴァイオリン） 新居　由佳梨（ピアノ）
休憩・移動（25分）	
18：30 ～ 20：30	交流会
	参加者、H24･25登録アーティスト、コーディネーター

４月17日（水）

時　間	会場：地域創造　会議室
10：00 ～ 12：00 (120分)	グループ別企画検討
	コーディネーター全員
昼食休憩（60分）	
13：00 ～ 15：00 (120分)	企画発表
	コーディネーター全員
15：00 ～ 15：15 (15分)	事務連絡、閉講式

第２部
平成25年度公共ホール音楽活性化事業事例紹介・アシスタントレポート

実施団体：一般財団法人大空町青少年育成協会
実施時期：平成25年９月12日（木）～平成25年９月14日（土）
出演アーティスト：北島　佳奈（ヴァイオリン）　加地　美秀子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：
期　　日：平成25年９月12日（木）　10：35～11：20
会　　場：女満別小学校３年１組　音楽室
参 加 者：24人、　学校関係者３名

学校には事前に子どもたちや保護者に周知してもらうことと、北島さんからのビデオレターを見せることをお願いしていたため、何が行われるのかは十分に理解していたようで、楽しみにしていたという声も聞こえてきた。本番が始まると、子どもたちは真剣な眼差しで演奏を見つめていたが、時に笑顔を見せる子もおり、演奏の素晴らしさに思わず笑顔が出てしまったのか？と担当者としては受け取ってしまった。中盤におこなった短歌作りでは、いざ発表となると恥ずかしがる子供もいたが、楽しく短歌を作ることができていたように思われる。最初のアクティビティということで、お互いに緊張感があったが、全体として賑やかで楽しい演奏会であった。

タイトル：
期　　日：平成25年９月12日（木）　14：10～14：55
会　　場：東藻琴小学校　音楽室
参 加 者：３・４年生　44名、学校関係者８名

東藻琴小学校では３・４年生合同で実施したため、人数が多めとなり、音楽室いっぱいに椅子を並べて実施した。女満別小学校以上に担当教諭が子どもたちに情報を伝えておいてくれたため、開始前には他学年の児童からも、一緒に聞かせて欲しいという声が聞こえた。

本番が始まると、子どもたちが言葉を発さず息を呑むように見つめていたのが印象的だった。１回目から若干修正を加えてスムーズな進行となり、内容はより良いものとなったように思う。先生方もたくさん会場に来ており、この事業に関心持ってくれているということが伝わってきたアクティビティだった。

タイトル：
期　　日：平成25年９月13日（金）　10：15～11：00
会　　場：豊住小学校　多目的ホール
参 加 者：全校児童28名、学校関係者６名

大空町女満別地区にある小さな小学校で全校児童を対象に実施した。多目的ホールを利用したため、他のアクティビティとは内容を変えて、音楽に合せて体を動かしたり、子どもたち一人ひとりに鈴などの楽器をもたせて一緒に演奏するなど、会場の広さを生かした取組みとなった。また見本用バイオリンをひとりずつ触れられるコーナーも設け、子どもたちが見よう見まねで嬉しそうにヴァイオリンを構える姿が微笑ましく印象的だった。

全体的にまとまりがあり、子どもたちが全身で音楽を楽しむことが出来ていたように感じられる内容だった。

タイトル：
期　　日：平成25年９月13日（金）　13：10～13：55
会　　場：女満別小学校３年２組　音楽室
参 加 者：24人、学校関係者２名

アクティビティ①と同じ女満別小学校３年生が対象。学級が違うと雰囲気も異なっており、会場に入るところから大人しい印象で、アーティストの話をしっかり聞こうとする姿勢が感じられた。最後に合唱する「ふるさと」を、しっかりと練習してから望んでくれたようで、北島さんとの素晴らしい共演ができた。

コンサート

タイトル：こころ踊る♪クラシックVol.1　北島佳奈ヴァイオリン・リサイタル
期　　日：平成25年９月14日（土）　14：00開演
会　　場：大空町教育文化会館　教育ホール（定員：520人）
入場者数：155人

クラシック・コンサートにあまり馴染みのない人をターゲットとし、ポピュラーなプログラム構成と照明による演出やスクリーンを用いた映像演出などを行い、親しみあるクラシックコンサートづくりを目指した。（映像には町の風景とともに、アクティビティ先での子供たちや町民に記入してもらった「夢アンケート」を映しだした。）

周知段階では、「中途半端なクラシックコンサート」といった否定的な意見もあり、チケット販売の不調からも不安を感じることがあったが、公演後のアンケートや来場者の直接の声では、プログラムのバランスや各種演出、そしてアーティストの演奏に対して、大変多くの好評を得ることができ、いろいろな形のクラシックコンサートがあってもいいということを再確認することができた。

ホール担当者の意見・評価
一般財団法人大空町青少年育成協会　三村　淳良

①　応募の動機・事業のねらい

財政的な負担が少なく、良質なクラシック音楽の鑑賞機会を地域住民に提供できる事業だと思い応募した。また、アクティビティに強く魅力を感じ、これからの地域を担っていく子どもたちに、なかなか間近でみることはできない生の音楽の迫力や楽しさを知ってもらい、音楽に親しむきっかけを提供したいと考えた。

②　企画のポイント

ヴァイオリンという楽器を知識として知っていても、間近で演奏を鑑賞する機会を得るのは、地方ということもあり、なかなか難しい。そうした状況の中で、クラシックにさほど馴染みのない地域住民に、クラシックコンサートが楽しいものだというイメージを持ってもらえるよう、全体として親しみのあるコンサート作りに努めた。タイトルには、地域にクラシックファンの裾野を広げていくことの第一歩、そして今後このような事業を継続していきたいという思いを込めて「Vol. 1」を付けた。

アクティビティは小学生を対象とし、その子どもたちや保護者がコンサートに来場することを想定した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

１、クラシックコンサートでは常に集客に苦労しているが、今回は通常以上で、２週間前になってもチケットがほとんど動かないという状況だった。

２、他の事業と開催時期がかぶってしまったことで自分自身に全く余裕がなかったことと、ホール職員の人手不足。

④　上記③をどのようにクリアしたか

１、人事を尽くして・・・ということで、考えられる全ての周知方法を行った。これまでにないほど、様々な場所に足を運び、人に声をかけ、また多くの関係者に協力を仰ぎ、得られた結果が150名という入場者数だった。決して多いとは言えないが、目標値には達することができ、納得のいく数字ではあった。

２、クリアには至っていないが、今年度苦労したことで、自分自身のスキルアップに繋がったと考えている。またホール職員の人出不足については、今後のより良いホール運営のために、職場全体で共有していく課題となった。

⑤　事業を実施しての成果

担当者としては、初めて企画段階から事業を手がけたため、アクティビティ先の学校との調整やホールコンサートの企画や券売などで苦労する点が多々あったのだが、４でも記述したとおり、その事が自分のスキルアップに繋がり、今後の事業運営に大変役立つと感じている。

また、ホールコンサートでのアンケートでは、「素晴らしい企画だった」「今後も継続してほしい」というような良い感想を多数得ることができ、入場者は少なかったものの、クラシック音楽に少しでも興味関心を持つきっかけを提供することができたという点で、成功だったと考えている。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

アクティビティ、ホールコンサートともに、自分自身の考えた企画内容を具体的に提示することができず、コーディネーターとアーティストに依存するところが大きくなってしまった。自分が今回のおん

かつを通して、どのようなメッセージを発信し、それをどのような方法・演出で伝えたいのかという具体的なプランを持っていなかったことが、今回の最大の反省点だった。漠然とした想いだけではなく、それを企画に生かせる力を身につけたいと強く思った。

また、ホールの事業運営体制について、職員全員がこの事業を成功させるという意識が乏しく、協力体制が整えられなかった。ミーティング等で担当者の想いを伝え、意識の共有を図る必要があった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

クラシックは集客が大変だと改めて感じたが、「良いもの」を提供すれば素直に「良い」という反応が返ってきたことから、逆にこの地域にクラシックファンあるいは文化芸術ファンを開拓する余地がまだまだあるということも感じた。

そのために主催者としては漫然と事業を実施するのではなく、開催時期・対象・周知方法などに工夫を加えながら、最良の結果が出せる条件を探っていくことに、最大限努力していかなければならないということを改めて考えさせられた。

そうした努力を続けていくことで、地域住民にとっての「良いもの」が、著名人が出演しているかどうかということではなく、公演の内容そのもので判断され、多くの町民が文化事業に足を運んでくれるようになることを目指していきたい。

アシスタントレポート
田辺　沙保里

大空町は、北海道ならではの広大な土地とその先に広がる澄み切った空が印象的な町である。自然豊かなこの町は、季節ごとに水芭蕉や芝桜など多くの花々の見頃を迎える。９月は、ヴァイオリニストの北島佳奈さんも大好きだというヒマワリが、ちょうど満開の時節であった。ホール担当の三村さんに連れて行っていただいた朝日ヶ丘公園は、青い空と黄色いヒマワリとのコントラストが見事であり、北島さんも嬉しそうにカメラのシャッターを切っていた。このヒマワリは、最終日のコンサートを様々な形で彩ることになった。

アクティビティ先は、女満別小学校、東藻琴小学校、豊住小学校の３校。ここで北島さんは、３・４年生を対象とした初めての試みとして「短歌」と音楽とのコラボレーションを構想した。これは、短歌の朗読とともに雰囲気の異なる３つの音楽を聴くと、その言葉も曲に合わせて違った表情をみせることを聴き手も読み手も体感できる、という狙いの企画である。「音楽の力で子どもたちから‘希望’を聞き出したい。自分たちの言葉と音楽との交わりによって、より心に響くものにしたい」という北島さんの思いから、今回は、朗読する短歌の一部を子どもたちに創作してもらった。子どもたちが限られた時間内で短歌をつくることは果たして可能なのかという懸念もあり、前日準備の際には、効果的に行なう方法について北島さんを中心に一同で検討が為された。しかしいざアクティビティで実践されると、我々の心配をよそに、子どもたちからは次々とアイディアが発言された。彼らは、自分たちで作った短歌を朗読し、より親近感を持って言葉と音楽とのコラボレーションを楽しめたのではないか。一方で、短歌をつくることのみが主眼ではなく、あくまでそれを通して音楽に関心をもってもらうという効果のためにどの程度有効であったかは検討の余地があり、その展開方法にも課題が残された。

大空町教育文化会館では、定期的に行なわれていた公演活動もあったが、何れも集客減のため打ち切りになっており、特にクラシック音楽の演奏会は敬遠しがちという状況が続いていたという。三村さんは、今回の音楽活性化事業をきっかけに、町の未来や夢をともに語れる場所として会館が機能することを目指すと意気込み、他事業で多忙な折にも関わらず心をくだいて奮闘されていた。公演タイトルの「こころ踊る♪クラシック‘Vol.1’」には、親しみやすいコンサートを継続的に実施してクラシック音楽を根付かせたいという、彼の思いが込められている。前売りチケットの売れ行きが伸びず、コンサート当日まで不安を抱えていた三村さんだったが、町の至る所にポスターを貼る等の尽力が功を奏して、予想を上回る多くのお客さんが会場に足を運んで下さった。

コンサートの内容は親しみやすさが重視され、特に後半は、大空町の風景の投影による町の魅力の再発見と「夢」というメッセージを意識した演出となった。曲ごとに色を変えるなど、照明効果もふんだんに駆使された。中でも照明委託先の粋な計らいにより、ステージ背景全面にヒマワリ畑の写真が投影される運びとなったことには北島さんも感激していた。この背景は葉加瀬太郎の「ひまわり」に合わせて使用されたが、曲が終わりに近づくとともに照明が暗くなり、ヒマワリの映像が徐々に浮かび上がってくるという演出効果も相まって、客席からは、ほーっというため息と同時に拍手が沸き起こった。また、「‘夢’を共有しよう」という北島さんの呼びかけとともにアクティビティ先で実施された「夢アンケート」がメンデルスゾーン作曲「歌の翼に」にのせて映し出された。更に、町内にボックスを設置することにより、大人の方々の夢も記入していただいていたため、子どもたちの生き生きとした夢の数々に、「孫が優しい子に育って・・」等の包容力のある夢も加わり、会場全体に温かい一体感が生まれたように感じられた。アンケートからは、前半の最後に演奏されたメンデルスゾーンのヴァイオリンソナタへの反響も多くみられ、演出に頼らずとも伝わる音楽の魅力についても再確認させられた。

人員不足など、抱える問題は容易には解決できないことばかりであるが、今回の活動を皮切りとして今後もVol.２、３と公演が続いていき、地域住民の方々が大空町の夢を語り合う場所として会館が機能していくことに期待したい。

実施団体：一戸町教育委員会　特定非営利活動法人いちのへ文化・芸術NPO
実施時期：平成25年12月12日（木）～平成25年12月14日（土）
出演アーティスト：北島　佳奈(ヴァイオリン)　奥田　なな子(チェロ)　加地美　秀子(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：ヴァイオリン・チェロ出前コンサート
期　　日：平成25年12月12日　11：25～12：10
会　　場：奥中山小学校　視聴覚室
参 加 者：４年生（21人）５年生（16人）　計37人

当初の予定を変更し、建物の構造上底冷えすることから音楽室の隣の視聴覚室で開催。ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる「愛の挨拶」の演奏から始まり、楽器の説明へ。北島さんの惹きつける話し方ですぐに子どもたちは音楽を聴くモードに切り替わっていた。最後に打楽器、手拍子で「プリンク・プランク・プランク」の共演を行った。打楽器から思いのほか大きい音が出るなど、子どもたちと一緒に楽しめる、音楽の楽しみを伝えるには最適なプログラムであると感じた。

タイトル：ヴァイオリン・チェロクリスマスコンサート
期　　日：平成25年12月12日　14：30～15：15
会　　場：結カフェ
参 加 者：結カフェスタッフ（利用者さんも）お店の常連さん

会場は障がい者の方の働ける場所として設立されたカフェ。ホールに足を運ぶことが困難な人たちにコンサートを届ける目的で実施。小学校のプログラムにも組み込まれた誰でも聞き覚えのある曲+クリスマスの曲メドレーといった内容。利用者の方たちからは、真剣に演奏を見る目やうんうんとうなづきながら聴いている姿など、それぞれの楽しみ方で音楽を聴いているようだった。

演奏終了後には、会場の皆さんと交流会も開催。

タイトル：ヴァイオリン・チェロ出前コンサート
期　　日：平成25年12月13日　11：00～11：45
会　　場：一戸小学校
参 加 者：５年生（31人）

内容は、奥中山小学校と同じプログラムに加えて、「花は咲く」の合唱をおこなった。「プリンク・プランク・プランク」の共演はやらない予定であったが、前日の子どもたちの反応が良かったこともあり、当日になり組み込むことに変更。アーティスト自ら楽器をピックアップした。急なお願いにもかかわらず、先生方も１階から３階まで大太鼓を運んでくださるなど協力的であった。

タイトル：ヴァイオリン・チェロ出前コンサート
期　　日：平成25年12月13日　14：50～15：35
会　　場：鳥越小学校
参 加 者：１～６年生（25人）

全校で25人と小規模校での開催。プログラムの内容は小学校向けの内容で実施。アーティストから質問を投げかけると１年生の２人が競い合うように手を挙げていた。全校ということもあり、高学年

は下の学年の子達を意識して少し緊張していたようだった。特に男子は、その傾向が強く見られたが、演奏となると集中して聴いている様子が見られた。

コンサート

タイトル：北島佳奈・奥田なな子　ヴァイオリン・チェロコンサート
　　～心に届ける音のぬくもり～
期　　日：平成25年12月14日（土）　14：00開演
会　　場：一戸町コミュニティセンター　地域住民ホール（定員150人）
入場者数：135人

アウトリーチを体験した小学生の兄弟にも一緒に来てもらい聴いてほしかったこともあり、年齢制限をせず開催した。

アウトリーチ先の学校でとった「ひとこと夢アンケート」を「星に願いを」に合わせスライド上映した。地元企業の跡取りの夢「○○産業」に会場は沸いた。コンサートのフィナーレには、「御所野縄文公園讃歌」を地元合唱団の合唱との共演で幕を閉じた。

ホール担当者の意見・評価
いちのへ文化・芸術NPO　鈴木　智彦

①　応募の動機・事業のねらい

ホール活性化のためのアウトリーチという手段はとり入れたいところではあったが、スタッフの能力や技術面において不安があった。「おんかつ」では実践を通しスタッフの能力向上が見込めること。サポートを受けつつ、アウトリーチ先の開拓ができることに魅力を感じた。

今回は、子どもたちに音楽の楽しさを知ってもらう、今までホールが届けられなかったところへ音楽を届ける、これから継続していくアウトリーチのための基盤を作ることを目的とした。

②　企画のポイント

学校以外の場所の選定は、今後の事業につなげられるかと実施できる環境（公民館の応援を頼みやすい）などから選定。クラシックに親しみを感じてもらう時間とクラシックに聴き入ってもらう時間をつくる。

アーティストの要望を可能な限りとり入れ、演奏がより伝わるものとする。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

開催期間は天候が悪く、移動時間が予定以上にかかってしまった。

アーティスト会議後（11月）にイベント等それに付属する業務により担当者が動きづらい状況となっていた。スタッフ間での打ち合わせ時間が十分にとることができなかった。担当がかかえすぎてしまう状況に。

町車両を使用したが、配車等でトラブルが発生した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

配車トラブルについては、前もってスタッフを配置するなどで対処した。

担当がかかえすぎる状況については、今回事業を進めていく中で少しずつ改善されていった。

⑤　事業を実施しての成果

アウトリーチを体験した児童の親から「もっとこういうものをやってほしい」との声を頂いた。

子どもたちを通してホールの事業について知ってもらう機会となった。

結カフェでの開催により、地域とのつながりができたこと、スタッフが障がい者の方への理解を深める機会とできたこと。

今回応募しなかった学校からの反応も良く、今後事業を継続するうえで協力を頂きやすくなった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回なんとか形にできたのは、アーティストの能力の高さと地域創造より派遣されたスタッフの力によるもので、ホールスタッフの能力不足、ホール運営体制の弱さが浮き彫りとなった。担当者がいない状況でも事業を遂行できる体制づくり、スタッフの育成が不可欠である。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

町内で行われるイベントにいまひとつ活気が足りないと感じていたが、おんかつを実施してみてやり方次第だということを痛感した。活気あるイベントに一番足りていない部分は多くの人を巻き込むことだと感じた。ホールの外へ出て、ひと対ひとで話をすることでホールに興味を持ってもらえるイベントを企画していきたい。

今まで使いづらいホールだと感じていたが、客席が固定でなかったことも調整がきくという面では今回はうまく使えていたと思う。演出についても、できることは少なくても自由度が高く、ホールの魅力についても教わったような気がする。

アシスタントレポート
西村　聡美

一戸町おんかつで行われたアクティビティは小学校でのアウトリーチが３回とカフェでのミニコンサートである。アーティストは北島佳奈さんと奥田なな子さんのお二人。ヴァイオリンとチェロのお二人ということで、共演曲もソロ曲も聴くことの出来るとても贅沢なプログラムとなった。

小学校でのアクティビティプログラムは、「愛の挨拶」（エルガー作曲）で始まり、奥田さんソロの「プレリュード」（バッハ作曲）、北島さんによる「スケルツォ」（クライスラー）、打楽器で子どもたちと「プリンク・プランク・プランク」（アンダーソン作曲）を共演し、チェロ・ヴァイオリン・ピアノのハーモニーを「白鳥」（サン＝サーンス作曲）で感じてもらいつつ、「花のワルツ」（チャイコフスキー）で最後を締めくくる、といった形となっている。

３回ともすべて違う小学校でのアウトリーチとなった。どの小学校も子どもたちの数がひと学年１クラス程度であり、鳥越小学校に関しては学校全体で25名となっている。そのためか、どこの子どもたちもとても素朴でかわいらしく、学年どうしの距離も近いようで、仲がよさそうな様子が伝わってきた。

一戸町は町全体で小学校が６校しかなく、そのうちの３校を今回のおんかつでお伺いすることができたのだが、計４回行われるアクティビティのうち１回は、小学校ではなく、結カフェという名のカフェで行った。ここは一戸町にある障がい者のための事業所のひとつであり、一戸町でも奥中山と呼ばれる高原の中に位置する場所にあるが、様々な場所から利用者（障がい者スタッフ）が集まる場所でもある。ここでは、普段、クラシックのコンサートを聴くことができない利用者や、運営をサポートしてくれる老人会のみなさんに音楽を楽しんでもらうため、ミニコンサートを行うこととした。

12月に行われるということも踏まえてミニコンサートではクリスマスをテーマとし、こちらのアクティビティでは上記のプログラムに加えて、クリスマスソングの演奏も行った。おんかつが行われていた間、一戸町ではずっと雪が降っていたのだが、このときは窓の外から見える雪景色と相まって、とても雰囲気のあるコンサートとなった。終演後は利用者やスタッフのみなさんとカフェお手製のシュトーレンを頂きつつ交流を行った。利用者のみなさんはとてもユニークな方ばかりで、笑いの絶えない交流会であった。

決して広くないカフェの店内だからこそ観客と演奏者の距離がとても近くて、温かいアクティビティだった。

コンサートはふたつのテーマの中で行われた。ひとつ目は「妖精」。12月の雪の様子や、アーティスト二人のイメージからこの言葉があがった。

もうひとつは「御所野縄文公演讃歌」である。

この一戸町には、御所野縄文遺跡という名の縄文遺跡があり、東北北部や北海道南部にある他の縄文遺跡とともに世界遺産登録を目指しているとのこと。まちをあげてこの世界遺産登録に向けた活動に取り組んでおり、上記の「御所野縄文公園讃歌」もそのひとつとして作られた曲である。

おんかつを担当された鈴木さんの希望として、この御所野遺跡を盛り上げたいとのことであり、そのためにこの歌を演奏してもらいたいということだった。

共演には、地元で活動されている一戸混声合唱団コーラスまべちのみなさんに参加していただいた。プログラムの最後に合唱団のみなさまに舞台の上へあがってもらい、北島さん・奥田さんとともに演奏した。合唱団だけでなく、観客の中にもこの曲を歌える人がかなりいらっしゃるようで、とても驚いた。まちをあげて熱心に御所野遺跡を盛り上げている様子が伝わってくるようだった。

今回のおんかつでは、丁寧に黙々と仕事をされていた担当の鈴木さんの様子がとても印象的だった。加えて、ホール職員のみなさんや、併設されている図書館スタッフのみなさんも一丸となっておんかつに取り組んでいて、とても温かい雰囲気の中で行われたおんかつだったように感じる。今回、アクティ

ビティを受けた子どもたちにはコンサートのチケットを無料で配ったのだが、配る際にも、ひとりひとりのチケットをかわいい封筒に入れるなどのとても細やかな気遣いをされていた。そしてそれらが積み重なりコンサートのたくさんの動員につながったのだと思う。

実施団体：千葉県印旛郡栄町教育委員会
実施時期：平成25年11月28日（木）～平成25年11月30日（土）
出演アーティスト：デュオ・レゾネ　亀井　良信　鈴木　慎崇

アクティビティ

タイトル：お楽しみコンサート①
期　　日：平成25年11月28日（木）　10：40～11：40
会　　場：ふれあいプラザさかえ文化ホール舞台
参 加 者：安食小学校４年生２クラス　61名（児童58名　教員３名）

舞台上から客席に移動しての、一風変ったコンサート体験を行いました。また、子供達から１名を指揮者に任命してのエーデルワイスのデュオ・レゾネとの合奏は、少し緊張した感じではありましたが、美しいハーモニーの合奏になりました。

タイトル：お楽しみコンサート②
期　　日：平成25年11月28日（木）　13：10～13：55
会　　場：布鎌小学校音楽室
参 加 者：布鎌小学校４年生、５年生　37名（児童32名　教員５名）

楽器を分解しての説明に児童たちは興味津々。最後にデュオ・レゾネの伴奏で校歌を歌った後、子供達から「もう終わりなの？アンコールは？」と時間を忘れるほど集中していました。控室まで子供たちがサインを求めに来るなどとても反応の良いアクティビティとなりました。

タイトル：お楽しみコンサート③
期　　日：平成25年11月29日（金）　10：40～11：40
会　　場：ふれあいプラザさかえ文化ホール舞台
参 加 者：安食台小学校、酒直小学校、北辺田小学校　４年生　38名（児童32名　教員６名）

来年度に廃校になる３校の合同開催。地元のケーブルテレビの取材が入るなどしたためか、子供達の間に独特な緊張感は見られたがクラリネットの分解やピアノの下で音を聴くなどの場面では笑いや歓声が上がりました。

タイトル：お楽しみコンサート④
期　　日：平成25年11月29日（金）　14：45～15：30
会　　場：竜角寺台小学校音楽室
参 加 者：竜角寺台小学校４年生　33名（児童30名　教員３名）

子供達が音楽の授業で一番好きな「もののけ姫」をリコーダーで一緒に合奏。先生が指揮者として飛び入りで参加する場面も。演奏終了後は子供達からアーティストへの質問コーナーが自発的に始まるなど。積極的な子供達がたくさんおりました。

コンサート

タイトル：～響き合う二つの個性～　デュオ・レゾネコンサート
期　　日：平成25年11月30日（土）　15：00開演
会　　場：ふれあいプラザさかえ文化ホール（定員：1,086人）
入場者数：227人（一般201人、学生26人）

アクティビティを行った小学校の児童たちの寄せ書き風の感想文掲示。自分たちの学校のシンボルツリーの絵の展示。音楽と自分を題材にした絵の展示。アクティビティの様子の写真の掲示を行った。今回ホールに来られたお客様は熱心なクラシックファンが多い為か演奏は静かに聴き入り、演奏後とトークには熱い拍手が演奏家に送られました。また、ゲストとしてアンコールで共演した栄町ゆかりの音大生にも熱い拍手が送られ、盛況のうちに終わりました。

ホール担当者の意見・評価
栄町教育委員会　野口　雅士

①　応募の動機・事業のねらい

当ホールは町の予算削減を受け、本格的な自主事業を７年間行っていませんでした。このため、自主事業の運営方法が喪失しており、再度運営方法を学ぶ事の出来るこの事業に応募しました。また、日頃熱心に練習をしている吹奏楽部の生徒達に一流の演奏を身近に聴いてもらいたいと願いました。

②　企画のポイント

当地域は中高生の吹奏楽活動が盛んであるため、吹奏楽部に入部するであろう子供たちに早いうちに一流の演奏を聴いてもらい、演奏家とふれあう事で音楽に対して高い目標を持ってもらいたい。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

地域創造からの事業決定通知が年度初めの４月に来るため、学校を対象とする場合５月の校長会で議題に挙げる必要があります。当町では事前に開催を打診している学校以外からも希望が有りました。学校は年間行事が前年度に決定している為に全ての希望校とホールとの開催日の調整が非常に困難になりました。

また、教員との打ち合わせも授業終了後しかなく、特に夏休み期間中は全く連絡が取れなくなりました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

校長先生を始め、音楽の担任や学年担任へ何度も通い日程等の調整を行いました。また、演奏会の趣旨として「来てくださいやってくださいでは有りません。学校の個性を尊重します。楽しいと思えば何でも出来ます。学校がやりたいと思う事は全力でサポートします。」と伝え、開催の調整以外にも演奏家と何をするかについて何度も学校に通いました。

皆さんが書くこの報告書を、担当になった時に赤線を引いて何度も読みました。とても参考になりました。可能であれば過去５年分を取り寄せれて熟読すれば失敗は無いと思います。

⑤　事業を実施しての成果

自分で営業する時は、「財団から演奏者の出演料を補助金で貰ってるからこの金額で出来るんです。演奏者は日本クラシック事業協会から厳選されたかたです。本来ならこの金額では出来ません。」と説明しました。

しかし一番公演に来てほしかった学生へ営業しても、「自分と楽器が違うから」などと言われ、学生に上手く説明が出来なかった為に来場が殆ど無かった事が悔やまれます。

事業の実施にあってはイベント業務が初めての自分でご迷惑をおかけしましたが、地域創造、コーディネーター、アシスタント、マネジメント、アーティストの皆様のおかげで良い勉強をさせて頂きました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

企業へ協力を依頼する場合は会社での会議に必要になる為、コンサートの契約書とチラシの提出を要求されます。チラシは公演の３ケ月前から作成に入れば良いと思っていましたが、企業へ協力を依頼する場合は、５月に派遣アーティストが決定した時点で作成を開始した方が良いです。契約書も同様です。

アーティスト打ち合わせは、この事業に携わる方は可能な限り出席するべきだと思います。この機会に出席しないとアクティビティ開始までアーティストと直接話が出来る機会が一切ありません。

アーティストの考え方を知る事により営業への熱意が湧くと思います。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

財政難。人口に反した巨大なホール。これに対する更新や維持。ホールの大きさに見合わない運営体制。当町には問題がたくさんあります。

音大や美大に進んだ友人全てが「才能じゃなくて環境だよ。」と言った言葉を20年ぶりに思い出します。子供は師を選べません。大人が導かなければならない。音楽に対し正しい目標を持ち、多くの子供たちを導く為にもこの事業の理念は必要であると強く感じました。

アシスタントレポート
髙井　はるか

栄町は千葉県の北部、利根川流域に位置し、東は成田市、南は印旛沼、西は印西市、北は利根川をはさんで茨城県に接している。東西に細長く、東部は一帯に高台で、山林や畑が多く南部及び西北部は平坦で豊かな水田地帯が広がる。そんな栄町の田園風景に懐かしさを覚え、心惹かれた。個別研修時に、はじめて栄町を訪れアクティビティ先の学校に伺った際に、担当の先生が「本当に栄町はいいところ、ここの子どもたちは本当に素直でいい子だ」とおっしゃったことが印象に残っている。

今回のアクティビティでは、栄町にあるすべての小学校を対象に２回のアウトリーチ、２回の呼び込み型のホールアクティビティを行った。

１日目は、ホールからほど近い距離にある安食台（あじきだい）小学校の４年生。ステージ上に椅子を並べて行ったため、少々緊張した面持ちだったがデュオ・レゾネの演奏がはじまるとすぐに演奏に引き込まれたようであった。各々の楽器の紹介や演奏、児童たちに発言させる場面もあり、共演コーナーもあるという最後まで盛りだくさんな内容であった。また、児童たちがホール客席内の好きな席を選び、そこで演奏を聴くということも行った。担当者が強く希望していたことでもあり、ホールの良さを味わってもらえるとてもよい試みであったと思う。午後は、布鎌小学校に移動し、上記のプログラムを軸として、最後は校歌を共演した。

２日目は、安食小学校、酒直小学校、北辺田（きたべた）小学校の合同ホールアクティビティから始まった。この３校は、将来的に合併する予定であり普段から行事などは合同で行うことが多いという。しかしアクティビティ中、人数の少ない学校の児童が萎縮してしまう様子もみられ、環境づくりという点で課題が残った。午後の竜角寺台小学校では、デュオ・レゾネと児童たちの姿勢が相まって、児童たちは終盤に向けてどんどんと引き込まれていった。特に最後のプーランクを聴く集中力はすばらしいものであった。お二人の音楽への真摯な気持ちが十分に伝わったように思う。２日間、回数を経るたびに担当者の野口さんやホールスタッフの方々が、振り返りをし今回はこうだった、こうしたほうがよい、などお話される姿をみて、みなさんそれぞれに気付きがあったようで嬉しく思った。

コンサートでは、亀井さんが得意とするフランスの作品をはじめ、ドイツロマン派のものや現代曲まで時代や国を超えた様々な曲が選ばれた。それぞれのソロもあり、最後まで聴き応えのあるプログラムであった。また、今回はアンコールに特別ゲストとして、栄町にゆかりのある亀井さんの教え子が登場した。今回デュオ・レゾネが栄町でコンサートを行うことを知り、ぜひ「ふれあいプラザさかえ」で演奏させてほしいと自らいってくださったそう。このような若い地元アーティストはこれからの公共ホールでは欠かせない重要な存在になっていくであろう。

集客の面では、準備段階でかなり気を揉み、いろいろと知恵を出し合い広報手段を考え実施したが、伸び悩んでいた。コンサートが近くになるにつれて徐々に追い上げることが出来、結果的には200名ほどのお客様にご来場いただけた。また、お客様がとても集中して演奏を聴いていたことや会場の雰囲気から栄町での本格的なクラシックコンサートを望まれていたのではないかと感じた。

今回、ほとんど自主事業のご経験がないということからプロセスには大変苦労されたように思う。しかし、学校へ何度も足を運んでくださったり、近隣の町へアウトリーチの見学へ行かれたりと、前向きに取り組んでくださったおかげで今回の成功がある。栄町は、ホールの質も高く、ホールスタッフのみなさんにも熱意がある。さらには、今回のような地元アーティストもこれから続々と出てくるかもしれない、聴衆も開拓できるかもしれない、個人的には大変可能性を秘めた町のように感じる。

それぞれ地域の事情から、今回のようなかたちでの継続が難しい場合もあるかと思うが、ぜひ独自のやりかたを探し、事業を継続してほしいと切に願う。

実施団体：中野区文化施設指定管理者（JTBコミュニケーションズ・野村ビルマネジメント指定管理者共同事業体）
実施時期：平成25年11月28日（木）～平成25年11月30日（土）
出演アーティスト：北島　佳奈（ヴァイオリン）　加地　美秀子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：北島佳奈　音楽室コンサート
期　　日：平成25年11月28日（木）　10：45～11：30
会　　場：向台小学校　音楽室
参 加 者：４年生　37人

楽器説明や参加型プログラムなどを組み込んで実施。子どもたちが読む詩と演奏とのコラボレーションでは、演奏される音楽のタイプによって言葉の感じ方が全く違ってくることが分かりやすく伝わり、子どもたちは熱心に参加していた。後半は、子どもたちの夢を“夢アンケート”に記入してもらい、30日のコンサートでみんなの夢を観客に届けることを約束して終了した。

タイトル：北島佳奈　音楽室コンサート
期　　日：平成25年11月28日（木）　13：45～14：30
会　　場：谷戸小学校　音楽室
参 加 者：４年生　53人

向台小学校とほぼ同じ内容で実施。演奏を落ち着いて聴くことができない子どもたちが目立った学校だったが、バッハ「ラルゴ」の演奏時には、非常に穏やかに落ち着いて聴き入っていたことが、非常に印象的であった。人数も多かったため、参加型のプログラムや夢アンケートの記載に時間を要し、急遽最後の演奏曲目を変更して実施した。

タイトル：北島佳奈　音楽室コンサート
期　　日：平成25年11月29日（金）　９：40～10：25
会　　場：武蔵台小学校　ランチルーム
参 加 者：４年生　37人

子どもたちにとって特別なスペースだという“ランチルーム”にて実施。特別なスペースでコンサートを聴く特別感を演出するため、アーティストもドレスアップしての登場となった。この回では、演奏途中にヴァイオリンの弦が切れるというハプニングが発生。子どもたちにとってとても貴重な体験になったのではないかと思う。“夢アンケート”を記入してもらい、最後は「エーデルワイス」を子どもたちのリコーダーと共演して、締めくくった。

タイトル：北島佳奈　音楽室コンサート
期　　日：平成25年11月29日（金）　11：35～12：20
会　　場：武蔵台小学校　ランチルーム
参 加 者：４年生　38人

前のクラスと同じ内容で実施。弓の接触部の素材を知らなかった子どもが多く、“馬の尻尾”との回答に大きな盛り上がりを見せたのが、とても印象的であった。「エーデルワイス」の共演では、リコーダーだけではなく、習っている楽器を持ってきた男子児童がヴァイオリンで参加。前の回とは一味異なる共演となった。

コンサート

タイトル：北島佳奈　ヴァイオリン・リサイタル
期　　日：平成25年11月30日（土）　14：00開演
会　　場：なかのZERO　小ホール（定員：550人）
入場者数：193人

クラシック初心者にも分かりやすい名曲を集め、解説付きのコンサートとして実施。後半に演奏した「ユーモレスク」では、各学校で子どもたちに書いてもらった夢を、演奏と共にスクリーンに投影し、子どもたちの夢を観客に届けた。ロビーには、アクティビティ時の写真や子どもたちの全ての夢を展示し、観客が微笑みながら見入る姿が多く見受けられた。

ホール担当者の意見・評価
事業課　野崎　祥子

①　応募の動機・事業のねらい

これまで当館は、地域の文化芸術の振興、そして公共ホールと区民との繋がりを強化するひとつの手段として、区内の子どもたちに向けたアウトリーチを実現させ、そして定着させたいと考えてきた。そのためには学校等との繋がりを作り、またアウトリーチを継続していくためのノウハウを身に付ける必要があると考え、本事業に応募した。

②　企画のポイント

音楽に対する固定的な考え方ではなく、音楽の新しい一面を知ってほしいと考えた。アクティビティでは、ホールでは味わえない距離感で演奏を聴き、また音楽を「聴く」「演奏する」以外の音楽体験を組み込み、子どもたちとアーティストとのコミュニケーションを重視して実施した。ホール公演では、子どもたちだけではなく、子どもたちの家族やクラシック初心者にも音楽の魅力が分かりやすく伝えられるよう、解説付きのコンサート形式とした。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティの実施校を決める際、直接学校側に説明する機会が持てず、書面だけでの情報提供となった。そのため、実施校決定後、当方の希望と学校側の要望を調整することに時間を要した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

各校とも、より多くの子どもたちにプロの演奏を聴かせたいという想いで、全校生徒を対象とした実施を希望し、ひとつの学年では不公平が生じるなどの話が上がっていた。アーティストが、一人一人の生徒の表情を見て、そしてコミュニケーションを取り、生の音をより近くで体感できる距離感での体験は、子どもたちにより感動を与えることができることを説明した。

⑤　事業を実施しての成果

本事業を通して、初めて学校の先生たちの文化芸術に対する想いや要望などを聞くことができた。また、事業の運営については、改めて気づかされることが多く、また初めて小学校でのアクティビティを実施することができ、全てが良い経験になったと同時に、ノウハウについても細かく学ぶことができ、今後の事業展開についての不安を払拭させることができた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

アクティビティの実施校を決める際、今回よりも詳細な情報を提供する必要があった。直接口頭で説明する機会が得られないとしても、もう少し具体的に内容を記載すべきであった。また目標集客数を達成することができず、また予測していたほど実施校の子どもたちにホールに来てもらうことができなかった。公演の楽しさや魅力を地域の人々に伝える方法を引き続き考えていかなければならないと感じている。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

小学生にとっては、「学校行事を実施する場所」＝なかのZEROであり、自主事業の魅力の発信が不足していることを実感した。様々なイベントが溢れている東京では特に、有料でもホールに足を運んでもらえるような魅力を伝えていくことが必要であり、また子どもたちを育成していくこともひとつの使命であると改めて実感した。これらはすぐに実現できるものではないため、持続性のある計画を立て、進めていきたいと考えている。

アシスタントレポート
丹羽　梓

「ホールの認知度向上」「観客の育成」というホールの課題に対し、どのように取り組んでいくか。全ての公共ホールの課題ともいえるこれらのテーマに、ホール担当者もアーティストも改めて正面から向き合った中野区おんかつだった。

東京都中野区の中心地に位置する「なかのZERO」。新宿から電車で５分という好立地であるため関東全域から人が訪れるが、好立地であるが故に都心部のホールにも気軽に行くことができるため、中野区民になかのZEROの認知度が低いというのがホールの課題であった。

このようなホールの課題を解消するため、北島さんとのアーティストミーティングでは、数ある公演の中からお客さんに選んでいただき、足を運んでいただくための方法が話し合われた。ホールの数が多い関東圏では、チラシを配架してもチラシの種類が多すぎて埋もれてしまうことも多い。今回は特に広報活動について重点的に力を入れていくことになった。

ホール会員へのダイレクトメール、北島さんの公演についてのコメントを広報誌に掲載、メディアへのリリース、ポスターを区内掲示板に掲示、ホール併設のカフェで北島さんの演奏CDをBGMとして流す、北島さんが書いた曲解説を館内掲示するなど、ホール担当者の野崎さんの努力、そして北島さんの積極的な協力のおかげで、公演前に公演について興味をもっていただくための様々な仕掛けを行うことができた。

アクティビティは区内の小学校３校で行った。先生方がとても協力的で、学校に到着すると既にほとんどの準備が終わっている学校もあった。野崎さんが事前に先生方と密に連絡を取り合い、コミュニケーションを取っていた結果だと感じた。３校とも４年生へのアクティビティで、北島さんの子どもたちへの温かい思いがつまったヴァイオリンの音色とお話が子どもたちに伝わり、じっと北島さんの演奏に耳を傾けている子どもたちの様子が印象的であった。

北島さんが今回のおんかつで子どもたちに行った「ゆめアンケート」。子どもたちの夢を紙に書いてもらい、ホール公演の際に演奏と一緒に舞台にその夢を投影するというものであった。アクティビティ先の子どもたちの協力で、たくさんの素敵な夢が集まった。

いよいよホール公演。クラシックの楽しさを知ってもらうため、「いろいろな聴き方をお客さんに提示しながら、クラシックに慣れていない人も楽しめるコンサート」ということで、聞き馴染みのある曲から、無伴奏曲、夢アンケートの投影、そしてプロコフィエフのヴァイオリンソナタ第２番では、北島さんオリジナルのお話を演奏前に話してから演奏するというバラエティー豊かなプログラムとなった。配布したプログラムには北島さんが書いた全ての曲解説が掲載され、北島さんの愛情が随所に感じられる公演となった。

公演の集客は約200名となりホールを満席にすることはできなかったが、公演に足を運んでくださった方にはホール担当者野崎さんの公演に対する思い、北島さんの愛情溢れる演奏が心に残ったと思う。

それぞれの公演を１回限りの単発公演として捉えるのではなく、中長期的な視点から「クラシックファンを育てる」「なかのZEROファンを育てる」という意味で、今回のおんかつはとても意味のあるものになったと思う。今回のようなホール担当者、アーティストの思いが見える公演は、他の数あるホールの公演と差別化を図ることができ、継続して取り組んでいくことで「ホールの認知度向上」「観客の育成」につながっていくのではないかと感じた。

実施団体：公益財団法人　福井市ふれあい公社
実施時期：平成25年11月21日（木）～平成25年11月23日（土）
出演アーティスト：新居　由佳梨（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：音楽お届け隊♪『みんなに届けたい！音とのふれあい』
期　　日：平成25年11月21日（木）　10：45～11：30
会　　場：福井市本郷小学校　音楽室
参 加 者：３～６年生　31人

山間部に位置し、幼稚園を併設した複式学級の小学校であり、３～６年生という年齢層に幅があったため、当初は皆緊張した様子であったが､新居さんが鍵盤ハーモニカで「くるみ割り人形の行進曲」を弾きながら登場すると、生徒の緊張もとけ、一様に笑顔が広がった。

また、この小学校では自然に囲まれた立地であることから、風や水といった「自然」をテーマとした選曲がなされ、新居さんが児童から様々な意見を引き出してくれたことにより、大変盛り上がったアクティビティーとなったほか、新居さんの「音楽に正解はない。色々な感じ方があって全部正解です。」とのお話に児童たちも納得した様子であった。

プロの演奏を身近で聴くことができ、ピアノの仕組みや音の響きを、オルゴールの実験や響板に向かって「わ」と叫んだりしたことにより、児童たちが実体験として経験することができた今回のアクティビティーは非常に中身の濃いものとなった。

タイトル：音楽お届け隊♪『みんなに届けたい！音とのふれあい』
期　　日：平成25年11月21日（木）　14：35～15：20
会　　場：福井市宝永小学校　音楽室
参 加 者：４年生　41人

本郷小学校とは､内容を変更し､テーマを自然から「強弱･リズム･ハーモニー」として実施した。こちらの小学校でも当初は皆緊張した様子であったが、新居さんが鍵盤ハーモニカを演奏しながら入場すると一気に生徒とアーティストの距離が縮まった様子であった。

また、この学校ではピアノの内部をより見やすくするための工夫として、ピアノの天板を外しピアノを覗き込んだり、ピアノの下に順番に潜って響板の響きを体験するなど、小学生へのアプローチ方法を改善した。

特に生徒たちが関心を持ったのは、新居さんが小学生に馴染みのある「きらきら星」を、強弱やリズムやハーモニーを変えるだけで全く違った印象の曲になることを演奏を交えて説明したときであった。

プロのピアニストの演奏を音楽室という身近な空間で、しかも対話を交えて聴くことができた今回の経験は小学生にとっては貴重な経験となったようで、最後に新居さんに質問をするコーナーでは、質問をする生徒が途切れることはなく予定の終了時間をオーバーするほどであった。

タイトル：音楽お届け隊♪『みんなに届けたい！音とのふれあい』
期　　日：平成25年11月22日（金）　10：20～11：05
会　　場：福井市西藤島小学校　音楽室
参 加 者：３年生　39人

基本的には、宝永小学校と同じ内容で、テーマを「強弱･リズム･ハーモニー」として実施した。これまでの小学校と同じで皆緊張した様子であったが、新居さんの鍵盤ハーモニカでの演奏をしながらの入場で緊張はとけ一気に笑顔とプロの演奏に引き込まれたようであった。

こちらの小学校でもピアノの天板を外す仕掛けを施し、生徒の興味を引き付けることができたが、３年生ということもあり途中で集中力が途切れた生徒もいたようであった。

しかし、「ラ・カンパネラ」の演奏でプロの演奏と技術に一気に集中力が高まり、最後まで大盛り上がりのアクティビティーとなった。

宝永小学校と同様に最後の新居さんに対する質問コーナーでは、質問が途切れることはなく、こちらでも予定時間をオーバーするほどの盛況ぶりであった。

タイトル：小学校音楽主任教員を対象としたワークショップ
期　　日：平成25年11月22日（金）　15：30～17：00
会　　場：福井市文化会館ホール　舞台上
参 加 者：福井市小学校音楽主任教員　21人

来年度以降につながる取り組みとして、小学校音楽主任教員を対象としたワークショップとして、１部はアーティストが実際に全国の小学校で実施しているアクティビティーを体験してもらうこととした。この体験により先生方にアウトリーチのすばらしさを実感してもらうとともに、今後の音楽指導へ向けての新たなアプローチ手法を生み出すきっかけとなることを願って実施した。

やはり、大人しかも音楽担当の先生であることから、最初は皆表情が硬かったが、新居さんからの小学生になったつもりで体験しましょうとの呼びかけにより、場の空気もなごみ一様に笑顔が広がった。小学生と同じように響板の仕組みをオルゴールで実験したり、全員で響板に向かって「わ」と叫んで響きを体験した時には、笑顔や驚きの表情が多数あり、熱心にメモをとる先生方も多数いた。

２部では、１部での体験を経て「心と耳がひらいた」状態でミニコンサートを鑑賞し､プロのアーティストの演奏を身近で体験した。

先生方からはとても良い経験となったとの回答が多数あり、来年度以降のおんかつ支援実施に向けて手応えを感じることができた。

コンサート

タイトル：スタインウェイ・アーティスト　新居由佳梨　ピアノリサイタル
期　　日：平成25年11月23日（土）　14：00開演
会　　場：福井市文化会館会館　ホール（定員：1,162人）
入場者数：588人

途中に休憩時間を挟んだ２部構成のコンサートとして実施した。誰もが知る名曲や、アーティストが聞いて欲しいあまり聞き馴染みはないが素敵な曲などを、トークを交えて演奏した。

特に２部の１曲目では、「仔犬のワルツ」を福井市文化会館が誇る２台の新旧スタインウェイピアノを使用して、弾き比べを実施したが、観客にとってはインパクトがあったようで終了後の反響も大きかった。

アウトリーチを実施した小学校の生徒や保護者の来場もあった他､福井市内の音楽愛好者のクチコミ等により多数の来場者があり、大変盛り上がったコンサートとなった。

ホール担当者の意見・評価
福井市文化会館　小川　隆一

①　応募の動機・事業のねらい

私たちの財団は、これまで施設の管理運営等の貸館業務を中心に運営してまいりました。

しかし、指定管理者として自主事業の実施を福井市から求められている他、公益財団法人として、文化芸術普及促進事業を実施する必要があり、事業実施のノウハウや専門的知識を有する職員もいない中で、何かきっかけとなる事業はないかと考えていたところ、専門家のコーディネーターが事業の企画から実施までをサポートしてくれる「公共ホール音楽活性化事業」は最適であると思い、応募することにいたしました。

また、福井市は中学･高校･大学における吹奏楽等の音楽活動が盛んですそ野は広いものの、クラシック音楽など本物の音楽に触れる機会が極端に少ないのが現状であることから、クラシック音楽を通じた事業の実施は、ホールとクラシック音楽愛好者とのネットワークを再構築し、今後ホールに足を運んでもらえるような新たな層を掘り起こすことができるとの思いから事業実施にいたりました。

②　企画のポイント

福井市民にアーティストによる生の音楽を届けたい、そして何か感じてもらいたい、また、子供たちには創造力を育み、純粋に音楽を楽しむきっかけづくりにしたいとの思いから、以下の３つを企画の柱とした。

①音楽によるアクティビティーやコンサートを通じた、福井市民とアーティストとの交流による新たな出会いの創出。

②次世代を担う子供たちに本物の音楽に触れる機会を提供することで、これまでに感じたことのない気付きを与え、創造力・表現力を育む。

③音楽の力による感動を提供することにより、音楽の楽しみ方を知るキッカケづくりを行う。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

クラシックのアウトリーチが定着していない福井市内の小学校に事業の内容や意図を理解してもらうのに時間がかかった他､音楽室で少人数を対象に実施することへの理解を得るのに思いのほか苦労した。

また、アウトリーチを授業の一環として捉えている先生方が多かったため、音楽を楽しもうということよりも外部からゲストティーチャーが来るとの認識の先生方が多く、こちらの考え方をどう伝えたらよいかかなり迷いがあった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

福井市内全小学校の音楽主任教員の集まりである、福井市小学校音楽科研究部会の会長先生に事業の趣旨等の説明を行い協力を依頼した。

これにより､アウトリーチ先の選定や相手方の先生の理解が得られ､良好な関係を築くことができた。

また、来年度以降の小学校でのアウトリーチ実施に向けて、小学校音楽主任教員対象のワークショップも実施することができ、アウトリーチとはどのようなものかを先生方に実体験として経験してもらうことができたのが大きな成果であった。

⑤　事業を実施しての成果

なにもかもが初めての経験であったため苦労したことも多かったが、アウトリーチ実施においては、実施のノウハウや新たに音楽担当の小学校の先生方とのネットワークを築けたことが貴重な財産となっ

た。また、ホールコンサートにおいても地道な営業活動等により、福井市内の音楽愛好者やピアノ教室・楽器店・調律師等と新たなネットワークを構築できた他、私たち公社がクラシック音楽を通じた新たな取り組みを実施していることが広く周知できたことは、大きな成果であった。

アウトリーチでの小学生の驚きや感動に満ちた表情を見て、また、ホールコンサートでの来場者の素晴らしかった等の感想を聞くことができ、来年度以降の事業実施に手応えを感じることができた

⑥　事業を実施しての反省点・課題

ホールコンサートのチケット発売が予定より少し遅くなったこともあり、当初はチケットの販売が伸び悩み大変苦労した。地元新聞の情報欄やFMによるCM告知・その他媒体を通じた広報宣伝も実施したが、思うような成果を上げることはできなかったと思う。

アウトリーチに参加した小学生をホールコンサートに呼び込むための工夫や保護者への働きかけが不十分であり、もっと高校生以下の入場者数を増やすことが来年度以降の課題となった。

また、アウトリーチの実施が初めてであったこともあり、具体的な内容については、コーディネーターやアーティストにお任せしてしまい、学校側に対するアウトリーチの内容説明が不足していたことも、今回の反省点であった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回のおんかつ実施を通して、アウトリーチでの先生方や子供たちの笑顔や、ホールコンサートの来場者が喜ぶ表情に触れ、クラシック音楽のすばらしさを再発見したばかりでなく、継続しておんかつを実施していけば、まだまだホールに関心のない方々にアプローチできると実感した。

また、福井市内で最も伝統があり、市民なら１度は訪れたことのある福井市文化会館での事業の実施は、市民にとってもインパクトがあり、今後の展開次第ではまだまだ新たな無関心層へも働きかけができる事業であると感じた。

福井市おんかつの成功の秘訣はホールの皆さんの熱意であろう。
担当者の小川さん、小林さんは福井市の音楽環境について「吹奏楽等の音楽活動のすそ野は広いものの、クラシック音楽など本物の音楽に触れる機会が極端に少ない」との課題を持っていた。そのことから下記を３つの柱として進めていくこととなった。

①音楽によるアクティビティやコンサートを通じた、福井市民とアーティストとの交流による新たな出会いの創出。
②次世代を担う子供たちに本物の音楽に触れる機会を提供することで、これまでに感じたことのない気付きを与え、想像力・表現力を育む。
③音楽の力による感動を提供することにより、音楽の楽しみ方を知るキッカケづくりを行う。

福井市民に生の音楽を届けたい、そして何かを感じとってもらいたい、という担当者の熱心な思いとタッグをくむことになったのがピアニストの新居由佳梨さん。

今回のおんかつで実現したいことやそのビジョンを明確に持つ担当者の主導により福井市おんかつはスタートした。

アクティビティは小学校を対象としたアウトリーチを３回、ホールワークショップを１回実施することとなった。小学校アウトリーチでは、山間部などのホールに来る機会が極端に少ない中小規模校や比較的市街の学校など様々な環境下の学校がセレクトされた。小学校でのアクティビティでは、「イメージすること」をキーワードにそれぞれに合わせたプログラムが行なわれた。主な流れは鍵盤ハーモニカを演奏しながら新居さんが登場、ピアノの構造についてのお話・体験、それからトークの中にヒントを交えながら、徐々に想像することを促していくという構成であったが、最後の曲を聴く児童の集中力については目を見張るものがあった。ある小学校においては、各校、それぞれ差はあるが 45 分間の中で見事に児童の感性を拓かせ、想像力を刺激出来たように思う。

続いて、福井市文化会館のステージ上で実施したホールワークショップだが、特筆すべきことはその対象者が小学校音楽教諭ということ。担当者は先生方に改めてホールの魅力を再認識してほしい、そして、先生方の発見と感動を届け、その素晴らしさを子どもたちにも伝えてほしいとの願いも持っていたことから、子どもたちに行なうアウトリーチをほぼそのまま体験してもらうこととなった。福井市文化会館の宝でもある２台のスタインウェイピアノをステージにならべ聴き比べを行なうなど大変有意義なアクティビティとなった。なお、先生方が参加しやすい環境にするため教育委員会にかけあい、研修扱いとして実施したことには担当者の熱意を感じた。そのような環境づくりや働きかけも事業を継続していくには大変重要なことだと考える。

コンサートは、親しみやすいロマン派の作品やフランスの風を感じる作品など新居さんらしい曲目で構成され、担当者と舞台スタッフが渾身の力をこめて練り上げた照明プランなども効果的で、創造性豊かなプログラムとなった。

２部のはじめでは、前述の教員向けワークショップでも行なった２台のスタインウェイで、ショパン作曲「仔犬のワルツ」弾き比べをし、新居さんが「どちらがお好みですか？」と観客に問いかける場面もあった。最後のラヴェル作曲「ラ・ヴァルス」はホールに響き渡り、圧巻であった。

600 名近い集客数は担当者、ホールスタッフの皆さんの努力の賜物である。集客目標を予め設定し、そこに向けてチラシ配布、各箇所へのポスター貼り（私たちが行く先々にコンサートのポスターが貼られていた。）はもちろん、新聞やタウン誌、ラジオなどのメディアへの働きかけも積極的に行なった。新聞やラジオについては、一度ではなくタイミングを見て更に情報を出していくなどの工夫もあり、その努力が結ばれ大変多くのお客様にお越しいただくことができた。

「新居さんの演奏を一人でも多くの方に聴いてもらいたい、福井市文化会館に足を運んでほしい」という気持ちを強く感じたが、この情熱を、アーティストに対する想いをぜひとも忘れないでいてほしい。

今後の事業につなげるという面でもしっかりとビジョンを持って行なわれた今回のおんかつで、福井市文化会館は多くのファンを獲得したであろう。歴史のあるホールでありながら、新しいホールにばかり客足が向いてしまうという厳しい現実もあるかと思われるが、他のホールとは異なったキャラクターを確立し、市民に近い親しみのある「福井市文化会館」として今後もぬくもりのある事業を展開していってほしいと願う。

実施団体：長野県上田市
実施時期：平成25年12月５日（木）～平成25年12月７日（土）
出演アーティスト：北島　佳奈（ヴァイオリン）　加地　美秀子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：芸術家ふれあい事業
期　　日：平成25年12月５日（木）　10：45～11：30
会　　場：清明小学校　音楽室
参 加 者：５年２組　32人

ストラヴィンスキーのイタリア組曲序曲で始まり、ヴァイオリンの構造説明に続いてバッハの無伴奏曲を演奏。このほか児童によるリコーダー演奏や詩の朗読との共演を行い、プロコフィエフのヴァイオリンとピアノのためのソナタ第２番第４楽章の熱演で終了。盛り沢山の内容であったが、アーティストの暖かいトークと巧みな進行により、「夢や創造力」、「音楽の魅力」などのテーマに沿った、ストーリー性のあるプログラムとなった。

タイトル：芸術家ふれあい事業
期　　日：平成25年12月５日（木）　13：50～14：35
会　　場：清明小学校　音楽室
参 加 者：５年１組　32人

リコーダーとの共演部分で若干の改良を加えたものの、基本的には５年２組と同じ内容で実施。児童からは、「音楽によって話し方や言葉の印象が変わる」、「ヴァイオリンの構造が分かって良かった」などのほか、「最後の曲（プロコフィエフ）が良かった」との意見もあり、聞き慣れない曲が、アーティストの渾身の演奏により児童の心に響いたことで、クラシック音楽への親近感を持つというねらいに対して、一定の成果を得る結果となった。

タイトル：芸術家ふれあい事業
期　　日：平成25年12月６日（金）　10：45～11：30
会　　場：長小学校　音楽室
参 加 者：４年生　23人

ストラヴィンスキーのイタリア組曲序曲で始まり、ヴァイオリンの構造説明に続いてバッハの無伴奏曲を演奏。対象が４年生であったことから、音楽と言葉（詩の朗読）の共演ではなく、曲のイメージを身体で表現するなど、音楽の楽しさを体感し、創造力を直接刺激するプログラムを実施。最後は、緩急のあるモンティのチャルダッシュで快活に終了。「音楽よりも運動が好き」と言っていた児童も最後まで集中していた姿が印象的であった。

タイトル：芸術家ふれあい事業
期　　日：平成25年12月６日（金）　13：45～14：30
会　　場：長小学校　音楽室
参 加 者：５・６年生　36人

清明小学校でのプログラムを基本としつつも、リコーダーとの共演がなかったため、音楽と言葉の共演部分を厚くして実施。演奏後、児童による合唱でアーティストへの感謝の意が表され、感動的な空

気の中で全アクティビティの幕が下りた。児童からは「今まで適当に過ごしていたが、今後は真剣に夢を追いかけて生きたい」、「忘れられない時間だった」などの感想が出され、児童の心に与えたインパクトの大きさが伺えた。

コンサート

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンコンサート　～音の魔法にかかる午後～
期　　日：平成25年12月７日（土）　14：00開演（13：30開場）
会　　場：上田文化会館　ホール（定員：502人）
入場者数：220人

前半は、誰もが楽しめる名曲（愛のあいさつ、タイスの瞑想曲等）で構成し、また生のヴァイオリンの響きを体感できるよう、客席内（５か所）での演奏を実施。後半は、アクティビティで児童から出された夢アンケートを投影しての演奏や、アーティストによるオリジナルストーリーを紹介しつつソナタ曲が全編演奏された。アンコールでは来場者の合唱による「ふるさと」との共演が行われ、温かな雰囲気の中でコンサートが終了した。

ホール担当者の意見・評価
上田市交流文化芸術センター　徳田　佳彦

①　応募の動機・事業のねらい

現在、当市では「文化の薫るまちづくりの拠点施設」として「育成」を基本理念に位置づける劇場を建設している。事業展開においては、子どもたちの感性や創造力などを育むため、学校等でのアウトリーチのほか、身近で親しみのあるコンサートを計画しており、この「公共ホール音楽活性化事業」のプログラムは当施設の事業方針と趣旨やねらいを一にする内容であるとともに、施設の理念実現と、理念に基づく事業を展開するにはスタッフの企画・制作能力の向上が必須であることから応募に至った。

②　企画のポイント

事業全体のねらいは、子ども・鑑賞者・職員の「育成」であり、アクティビティにおいては、子どもたちの「創造力」やクラシック音楽への「親近感」を育むこと、コンサートにおいては、誰もが楽しめるような工夫を施し、「感動」を倍増させるとともに音楽や劇場の「可能性」を感じてもらうことを目的として位置づけた。ただし、具体的な手法についてはアーティストの意向を最大限尊重し、アーティストの魅力が引き出され、遺憾なく発揮されるよう心掛けた。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

事業全体のテーマを「育成」と位置づけていたものの、アクティビティとコンサートがそれぞれ別個の事業に見えてしまい、関連性を持った形で外部にPRできる魅力的なストーリーが思い描けなかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

アーティストから「音楽を通して人々の夢を応援したい」という強い思いをお聞きし、アクティビティで出された夢アンケートをコンサートのプログラムや会場で紹介することとなった。アーティストからのこのご提案により、アクティビティとコンサートが一本の線でつながった。

⑤　事業を実施しての成果

最大の成果は、アーティストが素晴らしいアウトリーチとコンサートを実施されたため、今後の事業拡大に向けて良い「弾み」になった事。次に、事業全体を通じてコンサートやアウトリーチの企画制作に関する職員のノウハウの蓄積が行えた事。最後に、当市のクラシック音楽に対する関心の低さ（実情）を改めて認識できた事。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回のアクティビティ実施校は事業に協力的であったが、今後、事業を拡大する中で、そうでない状況も想定されるため、十分な事例研究を行っておく必要がある。コンサートに関しては、会場にアクティビティ参加児童の姿が少なかったため、今後は会場への移動手段の確保や保護者へのアプローチ策を検討する。また、潜在的な聴衆の発掘を図りワンコインコンサートとしたが既存の層が目立ったため、広報宣伝策を再検討する。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

当市は、建設中の劇場での事業を通して「文化の薫るまちづくり」を目指している。この指標の一つとして、市民や子どもたちがクラシック音楽を身近に感じている事が挙げられるが、今回の事業を通じて、若年層の関心、また、市の直営でありながら職員の関心が低いことが明確になり、高校生や大学生へのアプローチや職員へのインリーチなども必要と感じられた。今回、優れた公演等をされたアーティストが私達に残していった新たな文化の苗を、ホール職員がしっかりと育て、実を結ぶよう努力していきたい。

アシスタントレポート
田辺　沙保里

上田市は長野県東部に位置する人口16万の中核都市。市内の新たな文化芸術の拠点として2014年10月に開館する「上田市交流文化芸術センター・上田市立美術館」の準備が進められている。開館前のプレイベントとして位置づけられた今回のおんかつは、ヴァイオリニストの北島佳奈氏を迎えて行われた。今後、「育成」をテーマに多くの市民に豊かな文化的環境を提供していく上で、クラシック音楽のファン層も開拓するため一石投じたいという狙いがある。

上田市といえば、真田氏ゆかりの地、信州の鎌倉、数多くの温泉や広大な自然など、観光資源も豊富である。そういった中で、クラシック音楽を町の文化の新しいコンテンツの一つとしてどのように根付かせていくかが今回の課題となった。個別研修において、上田市の地域資源を音楽とコラボレーションさせるのはどうかという検討も行われた。しかし、担当職員の考えとしては、例えばコンサートでの風景写真と音楽の連動等には消極的で、ややとってつけたような感じが出てしまうのでは？という共通疑念があった。今回は、町の魅力を再発見するというコンセプトに寄らず、あくまで純粋にクラシック音楽のコンサートをしたい、という考えに一致していた点は興味深い。音楽それ自体を、今後の上田の文化の一つとして根付かせようという発想は、新しい拠点をつくる只中にあり、この地域の未来を創造していく過程ならではの考え方かもしれない。

このような「先を見据えた」取り組みは、具体的な実施面においても様々なシーンで発揮された。例えば、チケットは前売りせず当日券のみという手法が、今後ワンコインコンサートのフォームとして定着させるために試みられた。また、通常コーディネーターとアーティスト間で行われる打ち合わせに、今回はホール側から担当の徳田さんと舞台の関澤さんも同席し、現地入り前の段階でアーティストと直接やりとりをする場が設けられた。これも今後の事業展開への一つの布石であろう。

この打ち合わせでは、例えばアクティビティで使用する詩の選定から朗読の実践方法に至るまで、詳細に意見の擦り合わせが行われた。コンサートは定期的な集客のため、敢えて少し物足りないと感じる分量のプログラム構成が検討された。しかし将来的には２時間のコンサートを毎月聴きにくるような観客を育成したいとの長期的な見通しの下、曲目には耳慣れたものばかりでなく、少し骨太なものも入れたいという希望があった。北島さんはその意向を受け、プロコフィエフ作曲『ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第２番 ニ長調Op.94a』を提案した。ただし、ただ演奏するだけだとどうしても難解というイメージが先行してしまうため、北島さん自身の創作物語を楽章ごとに挿入し、トークとともに進行することになった。また、聴衆に間近で生の音の素晴らしさを感じてもらうため、ステージから客席におりて演奏するシーンも用意すること等が話し合われた。

12月、いよいよ事業実施の時期を迎えた。アクティビティは、真田地域の長小学校４・５・６年生と上田地域の清明小学校5年生を対象に実施された。５・６年生には谷川俊太郎の詩「生きる」、４年生にはルーマニア舞曲による身体表現等を通して音楽が届けられた。清明小学校では、先生方から希望のあったリコーダーとヴァイオリンの共演も実現した。今後、上田市内すべての学校を網羅すべく継続してアウトリーチを行う方針であると徳田さんは語る。コンサートは、上田文化会館において行われ、当日200人以上の動員があった。地域住民の寄せる新施設への期待もますます膨らんだのではないかと考えられる。

期間中､職員の方々と行動を共にさせていただく過程で「一丸」という言葉が事あるごとに浮かんだ。新施設開館に向けて組まれたスタッフ体制は盤石で、主担当の徳田さんを含め常に４人以上の職員が同行し、アーティストケアも万全であった。関澤さんは、各アクティビティにも細かなセットリストを作成して北島さんを驚かせ、照明・音響チームもコンサートで夢アンケートを投影するためのスライドづくりに尽力する等、職員全員が一丸となって事業を支えていた。終始、大変賑やかな現場であるとともに、今後もこの結束力を活かして地域の文化振興の中心的な担い手となっていく気概が感じられ、そういった、良い意味でとても男臭い活気に溢れたおんかつであった。

実施団体：公益財団法人大垣市文化事業団
実施時期：平成26年１月30日（木）～平成26年２月１日（土）
出演アーティスト：泊　真美子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：“きらめき”ピアノコンサート with コール ペアーレ
期　　日：2014年１月30日（木）　10：45～11：30
会　　場：音楽堂　舞台上
参 加 者：コール ペアーレ（女性合唱団）

地元で活動する女声合唱団だけに送るスペシャルトークコンサート。今回は舞台上で大屋根をはずしたピアノを取囲むように客席を設定し、アーティストの息づかいが感じられる距離で鑑賞した。前半は曲目解説等のトークを交えながら、誰もが聴いたことのある曲の演奏を楽しみ、後半は一部共演する合唱曲で交流を図った。参加者の中には、アーティストのすばらしい演奏力と人柄に魅了され感動して涙ぐまれる場面もあった。

タイトル：“きらめき”ピアノコンサート with 綾里小学校
期　　日：2014年１月30日（木）　14：30～15：15
会　　場：綾里小学校　音楽室
参 加 者：５年生・６年生

音楽室にあるピアノをステージから下ろし、大屋根を取りはずして教室の中央に設置して、ピアノ演奏の鑑賞と内部奏法を体験するプログラムで実施した。最初は緊張していた児童が、心地よく響く音色を耳で感じ、力強い上にものすごいスピードで動く指に目を奪われ、プロの演奏のすばらしさに感動していた。また、アーティストは曲の解説等のトークを交えながら、後半では、内部奏法（直接、弦をたたいたり弾いたりする演奏）を披露したが児童は、普段では味わうことのできない演奏に興味深々であった。さらに、アフタートークでは、「芸術大学に行くには、どんな曲を演奏すればよいのか。」などの質問が出るなど、児童に夢を抱かせる上で貴重な経験となったコンサートでした。翌日には、参加した児童全員の感想を綴った文集が学校から届き、感動をありがとうとの声が多く寄せられた。

タイトル：“きらめき”ピアノコンサート with 荒崎小学校
期　　日：2014年1月31日（金）　９：30～10：15
会　　場：荒崎小学校　音楽室
参 加 者：６年１組・２組

音楽室にあるピアノをステージから下ろし、大屋根を取りはずして教室の中央に設置してピアノ演奏の鑑賞と内部奏法（直接、弦をたたいたり弾いたりする演奏）を体験するプログラムを実施した。普段使用している教室で、曲目の解説等のトークを交え,迫力のあるプロの演奏を至近距離で鑑賞するという貴重な機会となった。また、初めて聴くクラシック音楽でも内部奏法（直接、弦をたたいたり弾いたりする演奏）を披露したことで、ピアノの仕組を知ることができ、最後の演奏曲ではピアノに全員が近づき、児童は皆目を輝かせていたことがとても印象的であった。最後は、アーティストと

児童全員で記念写真を撮るなど思い出深いコンサートとなった。

タイトル：“春よ来い”きらめきピアノコンサート
期　　日：2014年１月31日（金）　13：15～14：00
会　　場：特養パサーダ　地域交流スペース
参 加 者：入所者＆みそぎ保育園児

普段コンサートホールに来られない方のためのコンサートとして、特別養護老人ホームに出向き入所者と、近隣にある園児を招き、幅広い世代を対象に実施した。コンサート前には、入所者と園児による手遊び（肩たたき･ずいずいずっころばし他）での交流を図り、その後にピアノ演奏を共に鑑賞した。特に世代が幅広いこともあり、曲目についてはクラシック音楽と童謡を取り入れるよう工夫した。なかでも、園児との共演においては歌での交流を設定したため、園児の元気あふれる歌声と、かわいらしい振り付けが加わり、アーティストをはじめ、入所者と関係者の表情が明るくなり、会場全体が温かい雰囲気に包まれた。さらに、ピアノ演奏による童謡を鑑賞する場面では、歌詞カードを用意していないにも関わらず、自然に歌を口ずさんだり、目を潤ませて聴く入所者がいた。最後に、節分が近いということで、園児からアーティストと入所者へお礼として、手作りのお面をかぶり「豆まき」を歌うというでサプライズがあった。ホームからは豆まきの豆をご用意していただき、入所者の方で豆まきを行った。ここでの出会いは、異なる関係の人が一緒に音楽を鑑賞できたことで優しさと温もりのあふれるコンサートとなった。

コンサート

タイトル：「泊　真美子　ハピネスコンサート」
期　　日：平成26年２月１日（土）　14：00開演
会　　場：大垣市スイトピアセンター　音楽堂（定員：300人）
入場者数：203人

第１部はピアノソロコンサート。第２部はアクティビティで交流した合唱団との共演と、懐かしい日本の歌曲等の演奏があった。このコンサートでは、生きたピアノが持つ奥の深さと、迫力を体感し，さらにアーティストと合唱団および会場が一体となって新たな感動を体感してもらえるよう組み立てた。また、アーティストから今回のアクティビティについて感じたことや、思いを語ってもらったり、ホワイエにアクティビティの様子を展示したりして深まりをもたせるようにした。

コンサートではアクティビティで出会った方にも足を運んでもらい、アーティストが奏でる音色が心に響き、またふれあいの場となった。

ホール担当者の意見・評価
事業課事業係　高橋　博子

①　応募の動機・事業のねらい

音楽の持つ魅力で、地域・学校と公共ホールがつながることを目的に応募した。

特に、アクティビティにおける様々な手法を学び、将来的には地元でのホール登録アーティストを募集して、地域交流プログラムを実施し、一人でも多くの地域住民にホールのファンになってもらえることを目指した。

②　企画のポイント

音楽の持つ力をとおして、人と人との出会い、触合う機会の場を持つことで、新たな価値観が生まれることを柱に企画した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

「アクティビティについて」

・音楽に力を入れている合唱部を対象に検討したが、本公演の翌日に合唱コンクールの大会が組まれているなど調整に苦労した。
・市内の病院＆企業には、グランドピアノを所有している施設がなく、企画を実現できる会場が限定された。

④　上記③をどのようにクリアしたか

・小規模の小学校に焦点をあて、児童数ならびに会場の規模を確認しながら、好意的に協力して頂ける学校へ話を持ちかけ、何回か協議を重ねて解決した。
・「グランドピアノ」を所有している施設を調べ、さらにその中でも、施設側の取組み（運営理念）等をリサーチした上で実現した。

⑤　事業を実施しての成果

幼少期のころから、質の高い演奏を生で鑑賞する機会が減ってきている時代なので、ホールを出て届けることは本当に大切なことだと実感した。

特に、将来音楽家を夢見ている児童には、意欲を喚起する機会となり、また、今まで漠然としたイメージでクラシック音楽を捉えていた児童には、新しい価値観を抱ける機会となった。さらに、高齢者養護施設の入所者には、保育園児と共に体験・鑑賞していただいたことで、心と身体に温もりを感じてもらえたと思う。この経験を、今後の事業に活かしたいと考える。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

・事業の内定及び、日程の確定時期について、計画までに十分な時間を確保することが出来ず今後の課題だと感じた。
・年度初めのラインナップに告知出来ず、また、教育現場等にも事前に当該事業の趣旨を伝えることが出来なかったことが残念であった。
・コーディネーターに相談する前に、事前に担当者で調整してしまい再調整がしづらい事態となり迷惑をかけた。
・アーティストには、本公演を含め三世代交流を目指したプログラムを組んでもらうことになり、大変苦労をかけた。

また、アーティストとは直接お話することが出来ない分、サポートしていただいた皆さまにお礼申し上げます。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

この事業を通し、地域に出掛けたことで今まで出会わなかった方々と知り合うことができ、改めてホールの役割、今後の事業に対する取り組み方について再認識した。

特に、アクティビティでは三世代交流を目指したこともあり、本当に多くの方の理解と協力のもと「おんかつ事業」は成り立つと感じた。

また、質の高い文化・芸術に触れ感動する機会に出会うと、まち全体が心豊かになれると感じた。

アシスタントレポート
柿塚　拓真

・概要

岐阜県大垣市でのおんかつはアクティビティにおいて小学校高学年、アマチュアの女声合唱団、保育園児、高齢者と４つの異なる層を対象にすることになり現地担当者、コーディネーターは慎重な調整が必要で、アーティストにとっても柔軟性や対応力が求められるものであった。しかし、担当者のアイデアやそのアイデア実現のための粘り強さ、意思の強さ、周辺を巻き込む能力が功を奏し、どの対象者にとっても一定の水準のアクティビティが提供できていた。また担当者のみで実施するのではなく他のスタッフ、上司の方との業務分担、賛同、協力のバランスがとれており財団全体でおんかつに取り組んでいる印象を受けた。

・アクティビティ

最初のアクティビティは大垣市で熱心に活動している女声合唱団が対象。コンサートで共演することが前提だったのでピアニストのリサイタルの趣旨を保ちながら合唱も満足できる曲を事前に決定するまでに調整が必要だった。担当者がそのことを理解し情熱を持って、かつ柔軟に調整することが大事な部分で今回は最終的にある程度、良い方向で選曲ができた。当日はホールのステージ上にピアノを取り囲むように客席を設置。共演する団体でもあるのでアーティストの本格的な演奏を楽しんでもらうことに併せ、お話しの際に表情が見えたり、それぞれに語りかけるように努め、お互いの距離を近づけることも意識した。アーティストはこの一回のアクティビティのためだけに準備した曲もあるほどで白熱の演奏。真剣な演奏は何よりも心を掴むもので、プロ、アマチュアの垣根を超えて舞台に立つ者同士、まさに音楽を通じたアイスブレイクだった。なお別途、２日目のアクティビティ終了後、１時間程度の合同リハーサルを行った。

１日目の午後と２日目の午前は小学校高学年を対象にしたアクティビティ。基本的に２校とも同じ構成でリスト、ショパンの名曲からオーケストラのアレンジ作品まで幅広く演奏。途中で代表の児童とともにピアノの内部奏法を体験する場面を挟み45分間の構成に動きを持たせる。アクティビティや名曲コンサートでは知っている作品を演奏する傾向にあるが「初めて聞く音」（この場合は内部奏法の音）、「初めて聞く音楽」を提供することも大事な任務だし、私自身わくわくする時間でもある。先入観のない子供にこそ、いろいろな音楽を提供してみるべきで、今後大垣市でアクティビティをする際も積極的にアーティストに是非要求して欲しい。「トランペットは唇だけで音が変えられます。」とか「コントラバスは縁の下の力持ちです。」という解説をするより、ずっと音楽的に意味がある時間になる。１日目の後には反省会を開き、その反省を踏まえ曲目や話す内容を細かく修正した。

最後のアクティビティは特別養護老人ホームへ近所の保育園児が訪問し、施設の高齢者と一緒に音楽を楽しむという企画。当然話す内容も演奏しやすい音楽も対照的なだけに構成に気を使った。アクティビティの機会を通じて、世代間交流を楽しむという趣旨も大きいのでアクティビティの前には保育園の保育士さんの主導で手遊び、お遊戯をして場の雰囲気を温めてからアクティビティをスタート。アーティストと園児の歌の共演と、アクティビティ後の園児からの「豆まき」のお遊戯もあり触れ合いを大切にした。どうしても演奏時間の長い曲や園児の知らない童謡では集中力が途切れる場面もあったが、子供たちと触れ合う高齢者の笑顔を見たり、園児にとっても自分の家族以外の大人と触れ合う機会を提供できたことでもあるので、準備をしっかり行い、協力してもらえる人がいれば、この様な趣旨のアクティビティがあっても悪くないなと個人的には感じた。

・コンサート

多様な対象者でのアクティビティの準備がありアーティストの負担は大きかったと思うが、それを感じさせないような真剣勝負のプログラム。リサイタルでアーティストの音楽をしっかり聞いて欲しいという構成。アーティストのゆっくりとした話し方と演奏のギャップがお客さんには新鮮に感じられたのではないか。私はステージ下手で聞いていたが後半になるにつれ演奏が熱を帯びてきてレベルの高いリサイタルだった。終演後はアーティストのCDを買いサインを求める列もできており、その数もお客さんの満足を表していると思う。

・最後に

今回のおんかつで感じたのは担当者の周りを巻き込む力。そして周りの協力。全てのアクティビティに財団事務局長他、上司の方が視察に来られていた。非常に大事なことで、担当者としては調整が大変かもしれないが、財団全体でアーティストや演奏、作品を見ているというのはその後の事業の展開の仕方がより良く変わっていくしアーティストの成長にもつながる。また担当者間での協力的な雰囲気、役割分担ができており、現地で大変スムーズに業務に専念できた。次の週にも自主公演を予定している中で大変ご苦労されたと思うが、それを感じさせないようなチームでの仕事の成果だと思う。

実施団体：尾張旭市文化会館指定管理者代表愛知県舞台運営事業協同組合
実施時期：平成25年９月19日（木）～平成　25年９月21日（土）
出演アーティスト：新居　由佳梨（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：ふれあいのミニコンサート
期　　日：平成25年９月19日（木）　10：45～11：30
会　　場：三郷小学校　音楽室
参 加 者：４年生　38人

アクティビティでは、音楽をライブ演奏で聴くこと＝直接音楽とつながる体験を、ということを主軸にしたかったので、触れるぐらい身近でということが最大のポイントであった。

演奏以外の小学生への交流アプローチは、ピアノという楽器の響く構造の説明と、小学校でいつも教えている音楽講師との共演というシンプルなものになる。三郷小学校の音楽の講師は元々声楽を専攻されていた方だったので、シューベルトの「ます」を共演した。

演出は、新居さんの考案で、鍵盤ハーモニカでくるみ割り人形行進曲を演奏しながら登場し、曲の最後をピアノでさっと弾いて、トークに移る、という工夫で小学生の興味を引く。この登場の演出は今回のアクティビティ４回ともかなりのインパクトがあった。ここからその感情の動きを音楽そのものへの興味へつなぐため新居さんのトークが始まる。鍵盤ハーモニカとピアノの鍵盤を使った演奏では同じ鍵盤を使っても鳴り方が違う。これを話の端緒にして音楽の響きの伝わり方について、まずピアノの響きを作る構造の説明（オルゴールを小道具として使用し、ピアノの弦部分の見学含む）、音を生み出す振動が人間の喉で出来ること、このつながりで音楽講師との共演へ。講師の方から提案があり１部をドイツ語で歌い、２部、３部を日本語で共演。講師先生も気持ちよく参加していただいた。その後、小学生と曲の印象などの短い問いかけで人としての親近感を作りつつ、三曲演奏した。演奏中の小学生の反応は、長いパッセージになると集中を切らしかける子もいたが、パッセージの趣が変わると集中していた。

タイトル：ふれあいのミニコンサート
期　　日：平成25年９月19日（木）　13：40～114：25
会　　場：三郷小学校　音楽室
参 加 者：４年生　39人

同じ小学校の二つ目の４年生のクラス。内容は同様。午前中のクラスと比べると最初の内、少しざわざわした雰囲気を感じていたが、演奏の最後では皆熱心に聴いていた。

タイトル：ふれあいのミニコンサート
期　　日：平成25年９月20日（金）　10：50～11：35
会　　場：渋川小学校　音楽室
参 加 者：６年生　40人

全体の内容は三郷小学校と同じだがこの小学校では音楽講師との共演の部分に生徒さんとの合唱共演が入る。しかし、音楽講師との共演と違って、中途に喉の響きの意味合いで合唱共演を入れると生

徒さんが全員参加してしまい、そこで終わってしまう気分になるし、最後にアンコールとして入れるとそれまでの流れから唐突な感じがする。前日の三郷小学校での反応を見て、アンコールの形で行うことになり、担任の先生に、アンコールへの導入を簡単にお願いすることになる。この小学校は担任の先生含め音楽教育に熱心で、生徒さんとのコミュニケーションが日頃から良く取れているので、皆柔軟で、６年生ということもあり熱心に聴いていた。

タイトル：ふれあいのミニコンサート
期　　日：平成25年９月20日（金）　13：50～14：35
会　　場：渋川小学校　音楽室
参 加 者：６年生　40人

アクティビティ３と同様。合唱共演後、午前中も行った担任先生、生徒さんと新居さんの全体記念撮影があり、その時の生徒さんの笑顔が輝いていたのが印象的。

コンサート

タイトル：新居由佳梨ピアノコンサート
期　　日：平成25年９月21日（土）　14：00開演
会　　場：尾張旭市文化会館　大ホール（定員：1000人）
入場者数：246人

２部構成。一部は前日までのアクティビティでの演奏曲を多く含みアクティビティの大人版の形。反響板を曲によって色付けして照明効果も出す。

二部は一曲目のみピアノへのスポット残しで照明効果は出すが、色付けはなく、生明かりで行う。新居さんの演奏曲に対するイメージのトークを毎曲挟んで演奏。アンコール１曲あり。公演時間は1時間45分。

ホール担当者の意見・評価
尾張旭市文化会館　鈴木　清隆

①　応募の動機・事業のねらい

これまで、会館に招いてのインリーチでのワークショップ事業は行っているが、完全なアウトリーチ活動は行っていないため、地域に入っていく活動が必要。また、昨年は耐震工事を大ホールで行い６ヶ月休館していて、自主事業の数は半分以下。６ヶ月殺風景な工事現場と化すと、地域住民の意識の中で存在感が少なくなることがあって自主事業の集客率が全体的に落ちてきていた。その回復を図る意味でも会館の再顕示化が必要であった。この点を打破するきっかけとしたかった

②　企画のポイント

全体研修でも、ミニコンサートの形態の場合、身近で、少人数でということを強調されていたが、この基本的なラインで十分で、言葉を経由することなくダイレクトに、音楽の音を伝えるということを主眼としたかった。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

企画のポイントについてぶれはなかったが、この方針だと生徒さんとのコミュニケーション方法が限られてくるし、ただの押し付けのミニコンサートとなる危険性がある。どこまでの言葉の介入が適当かの判断がつきにくいポイントとなったこと。私としてはピアノがどのように鳴るかの構造説明を入れるという案しか持っていなかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターさんたちとの相談を繰り返してだんだんクリアしていった。私は対象小学校の先生達と話して、先生達の思っていることや場の雰囲気を出来るだけ正確にチェックシートなどで知らせるようにした。この情報などを含め、適度のコミュニケーションの方法を作ることができた。

⑤　事業を実施しての成果

小学校とのつながりが芽生えたこと。また、観客全員が音楽を教養としてではなく心から楽しんでいるようであった。直前の小学校アクティビティに参加してくれた生徒さんやその知り合いもコンサートに来ていて、ライブというものの力を再認識したこと。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

反省点は、全体研修から事業実施までが短すぎたこと。対象小学校に対してはもう少し実施の内容項目がハッキリしていないと納得されない。概要はお話できるが、実際の細かな点でもカリキュラムの様になっていないと伝わりにくい。従って、もう少し時間が必要であると感じていた。

課題は、集客について1,000人収容のホールなので、700～800人ぐらい入らないとまだ成功とはいえない。もっと、聴きたい、聴いてみたいという人口をどのように増やしていくか、ということを感じている。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

名古屋市のすぐ隣の市であり、文化的なものを鑑賞するのは名古屋で済ます傾向があり、交通機関も地域によっては文化会館に来るよりも名古屋に出るほうが便利が良いところもある。この様な立地の会館であるのでより細かな工夫が必要だと考えた。

アシスタントレポート
西村　聡美

愛知県尾張旭市は名古屋市の東に位置する人口８万人の市である。本来は農業のまちであるが、電車で40分程度で名古屋に行けるということもあって、日中の活動拠点が名古屋であるという市民も多いという。

名古屋へ近いということもあって、尾張旭市内のクラシック音楽のファンは名古屋に行ってしまうようだ。

尾張旭市文化会館では地元出身のピアニストによる演奏会を開くこともあったそうだが、鈴木さんによれば、このおんかつを通して、まちの人々がクラシックに対してどんな興味を持っているのか探りたいとのことだった。加えて、今回のおんかつを新居さんにお願いした理由として、比較的身近な楽器であるピアノをプロの演奏家に弾いてもらうことで、普段クラシックに触れない人たちがクラシックに興味を持つきっかけにしたいから、とのお話をされていた。

アクティビティは２ヶ所の小学校で２回ずつ行った。今回の新居さんのアクティビティプログラムは、「自然」や「色彩」といったキーワードのもとで構成されている。

１日目に伺った三郷小学校では、担当の佐久間先生は声楽のご経験があるとのことから、新居さんと佐久間先生による「ます」（シューベルト）の共演が行われた。この小学校の子どもたちはとても明るく元気で、今回アクティビティを受けられない学年の生徒たちが音楽室をのぞきにきたり、アクティビティ終了後、控え室にいる新居さんと話したがる子どもたちがたくさんいたのがとても印象的だった。

２日目には渋川小学校でアクティビティを行った。アクティビティプログラムの中にはピアノの仕組みを理解してもらうための仕掛けがあったのだが、それを体験する前と後で、子どもたちのピアノに向かう目が違っていた。音そのものだけでなく、楽器やイメージなどの音楽に関する様々な側面を提示することで、子どもたちが自分なりの音楽への向き合い方を見つけていくところを見ることができ、とてもよい経験をさせてもらえた。

参加していただいた両校とも先生方の理解がとても厚く、鈴木さんのきめ細やかなフォローのおかげもあって現地研修・本番ともにとてもスムーズに行うことができた。アクティビティ中もずっと校長先生が立ち会ってくださり、とても恵まれた環境でアクティビティを行うことができたように感じる。

コンサートでは、アクティビティでのプログラムを取り入れつつ、技巧的な曲もいくつか演奏された。照明も効果的に取り入れつつ、観客の想像力を刺激するような構成であった。本当は、コンサートの終盤で尾張旭市に昔から伝わる「瀬戸囃子」と共演したいとの話があったのだが、演奏団体への打診の際、本番まで時間が短いということで念願かなわなかった。

コンサート終了後にアンケートを見ると、印象に残った曲としてラヴェルのラ・ヴァルスのようなマニアックな曲をあげてくださる方が多く、クラシック音楽に対して抵抗が少ない方は多いのでは、という印象を受けた。だが一方で、次回の公演希望の欄ではクラシック以外の商業的な公演を希望する人が多かったことが少し残念である。今回のようなコンサートを足がかりにして、名古屋ではなく“尾張旭”でクラシックを聴く人たちがもっと増えればいいなと思うが、それには市民への根気強いアプローチが今以上に必要なのかも知れない。

今回の事業は、鈴木さんやホール職員のみなさんだけではなく、アクティビティ先の先生や調律師さんなど、ホールの外の人々にもとても恵まれたものだったと思う。おんかつを行っていく上で、ホールだけではなく外部の様々な立場の人たちも巻き込んでいくことがいかに大切であるかということを、身をもって体験することが出来た。

実施団体：公益財団法人亀山市地域社会振興会
実施時期：平成26年１月16日（木）～平成26年１月26日（日）
出演アーティスト：新居　由佳梨（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：新居由佳梨ピアノコンサート　音楽のたから箱
期　　日：2014年１月16日　10：40～11：25
会　　場：神辺小学校　音楽室
参 加 者：５～６年生年生　46人

クラシック曲を演奏するとともにピアノの仕組みを子ども達に伝える。アクティビティ中盤から音楽からイメージを連想することを練習させる。そして最後に1曲（サン＝サーンス・動物の謝肉祭より「水族館」）曲名を伝えずに演奏し、そのイメージで絵を描いてもらうようにする。絵を描く時間は後に学校側に図工の時間を設定してもらいました。出来上がった絵はホールコンサートに展示されました。

タイトル：新居由佳梨ピアノコンサート　音楽のたから箱
期　　日：2014年１月16日　14：20～15：15
会　　場：白川小学校　音楽室
参 加 者：４～６年生年生　29人

クラシック曲を演奏するとともにピアノの仕組みを子ども達に伝える。アクティビティ中盤から音楽からイメージを連想することを練習させる。そして最後に1曲（サン＝サーンス・動物の謝肉祭より「水族館」）曲名を伝えずに演奏し、そのイメージで絵を描いてもらうようにする。絵を描く時間は後に学校側に図工の時間を設定してもらいました。出来上がった絵はホールコンサートに展示されました。

タイトル：新居由佳梨ピアノコンサート　音楽のたから箱
期　　日：2014年１月17日　10：40～11：25
会　　場：亀山南小学校　音楽室
参 加 者：５～６年生年生　49人

クラシック曲を演奏するとともにピアノの仕組みを子ども達に伝える。そして事前に（サン＝サーンス･動物の謝肉祭より「水族館」）曲名を伝えずに絵を描いてもらってその絵について子ども達と話し合い、答え合わせとしてその曲名を伝え、みんなの前で演奏する。その絵はホールコンサートに展示されました。

タイトル：新居由佳梨ピアノコンサート　音楽のたから箱
期　　日：2014年１月17日　13：45～14：30
会　　場：昼生小学校　音楽室
参 加 者：５～６年生年生　50人

クラシック曲を演奏するとともにピアノの仕組みを子ども達に伝える。アクティビティ中盤から音楽からイメージを連想することを練習させる。そして最後に1曲（サン＝サーンス・動物の謝肉祭より「水族館」曲名を伝えずに演奏し、そのイメージで絵を描いてもらうようにする。絵を描く時間は後に学校側に図工の時間を設定し

てもらいました。出来上がった絵はホールコンサートに展示されました。

コンサート

タイトル：新居由佳梨ピアノコンサート　音楽のたから箱
期　　日：2014年　1月26日（日）　14：00開演
会　　場：亀山市文化会館　大ホール（定員：935人）
入場者数：338人

クラシック音楽に興味を持つ人を増やすための曲の解説を付けたピアノコンサート。来場者には、このコンサート用に編集した、クラシック音楽をモット楽しむミニノートを配布した。事前に新居さんのピアノで曲名を伝えずに聴いてもらった曲のイメージ画を客席をギャラリーにして180作品展示した。コンサート後にはアフタートークを実施

ホール担当者の意見・評価
業務課　野間　秀一

①　応募の動機・事業のねらい

全国的にクラシック音楽のコンサートに足を運ぶ客は少なく、ファンは人口の１％と言われています。人気のあるソリストを招聘して一時的に客が入ってもそれは一過性のものです。また、クオリティの高い演奏会を低廉な価格で聴けるようにすることでファンを広範囲から集めるという方法もあります。今回当ホールでは、地域の文化を長い目で見てクラシック音楽を好きな人を集めるのではなく育てるという切り口からこの事業を企画しました。

②　企画のポイント

実施したポイント：１）クラシックをモット楽しむミニノートの編集　２）音楽を聴いてイメージ画を描くことを一般公募及びアクティビティ先の児童に描いてもらいコンサートを彩る仕込みを行った。３）アフタートークを行い、お客様へ今回の企画の趣旨をお伝えしたり、アーティストとお客様の交流を図った。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

１）クラシックをモット楽しむミニノートを作成する際、情報収集をする仕組みをつくることに苦労した。また編集作業も初めてのことであった。２）アクティビティ時の演奏を基に子どもたちにイメージ画を描いてもらう企画があったが、その実現には調整すべきことが多かった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

１）ミニノートについては情報募集の要項を作成し一般公募を行うと同時に、当会館で活躍されているプロの音楽家などへの直接取材などで情報を収集した。また、編集についてはボランティアにお願いした。２)イメージ画については、アクティビティからホールコンサートまで10日ほど日程を空けたこと、初期段階からの教育委員会との打ち合わせを行い、絵を描く時間を授業に組み入れてもらうなど、教育委員会との協働作業で事業を行った。また、絵の展示や、舞台に投影する絵の選択については地元の絵の先生にチームに加わっていただきました。

⑤　事業を実施しての成果

目的は、音楽を好きな人を増やす仕組み作り。その目的に対する成果は、まず音楽を楽しく学べるミニノート作成過程及び配布によりクラシック音楽の楽しみ方を知ってもらうことができた。これにより新しいクラシックファンを増やす足がかりになりました。このノートはリニューアルし継続したいと考えます。また、音楽を聴いてイメージで絵を描くことを行ったことで、参加いただいた人にとって忘れることができない曲になったと思っています。これにより、クラシック音楽が好きな人づくりの第一歩が踏み出せたと認識しています。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回の事業では一定の評価を得ることはできたが、画期的な成果にはつながらなかった。この企画を継続すると同時に新たな仕組みも加えていく必要がある。また、集客についても338人という人数であったがこの人数を今後の継続により500人、700人、900人と増やしていきたいと考えます。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

“クラシック音楽を好きな人を増やす”という目的を果たすためには、この事業は一つの手段であり、継続しなければならない。一過性の花火であってはならない。当文化会館が亀山市の文化の拠点としてこの考え方を実践していきたいと考えています。また、この実践において地域の人や団体、学校などの人との連携を活用することが大切です。

アシスタントレポート
菊地　俊孝

三重県亀山市は、三重県の北中部に位置し、かつては東海道の宿場町として栄えた土地である。ローソクの生産や液晶パネルの工場などいろいろな分野で耳にすることができる人口約5万人の市である。

亀山市文化会館の担当者、野間さんは音楽をもっと身近に楽しんでもらいたいとおんかつに応募した。その初年度となる今回は小学校を対象として市内4カ所の小学校でアクティビティを実施した。アクティビティでは子供たちがピアノの近くに走り寄って間近で演奏を聴く場面で、新居さんの繊細で表現力豊かな演奏に子供たちのワクワク、ドキドキした表情があり、子供たちにとっても貴重な体験になったのではないだろうか。

亀山市でのおんかつではその目的に向かいいくつかの「仕掛け」が設定されていた。１つ目の仕掛けはアクティビティ先の生徒や一般の方を対象に新居さんの演奏の印象を絵として描いてもらうというもの。これにより、演奏者と生徒がその曲の印象を共有し、より演奏者と聞き手が近くなるように工夫した。曲名は伏せていたため、純粋に曲の印象が絵になり、新居さんもスタッフも様々な絵があることに驚くと同時に感受性の豊かさを感じた。そして、もう一つの「仕掛け」はホールオリジナルの「クラシック音楽をモット楽しむミニノート」。ホールから来場者に対して、このミニノートをプレゼントした。ノートにはクラシックの基本知識をはじめ、演奏会を観覧した際の感想や印象、曲目などを記録することができるもので、これからの音楽鑑賞の記憶を書き貯めていくことができる。このノートを通じて音楽への興味を引き出したいという担当者の思いがつまっていた。さらにこのノートのほか、ホールコンサートの際、アクティビティ先や希望者に描いてもらった絵をコンサート会場の客席に設置することで、コンサートを一緒に作り上げてもらおうという試みもしている。アイデアマンの野間さんならではの発想で、会場は絵のおかげもあり、より華やかな空間に変化し、来場者も興味津津で鑑賞していた。

今回のこのおんかつを通して、一番に感じたのはホール職員の熱意だった。目標に向かって着実に前進していくホールの姿は近隣のホールにもきっと影響を与えているはずである。ホールの職員の皆さんが亀山市の市民の方々に音楽という素敵な体験を提供したいという強い願いと亀山市への深い愛着をもち、様々な工夫をこらしたホールイベントに市民が足を向け、音楽という素晴らしい体験をミニノートと一緒にこれからも楽しんで欲しいと思う。

実施団体：兵庫県多可町文化会館ベルディーホール
実施時期：平成26年１月24日（金）～平成26年１月26日（日）
出演アーティスト：デュオ・レゾネ

アクティビティ

タイトル：杉小５年生アクティビティ
期　　日：平成26年１月24日　10：45～11：30
会　　場：杉原谷小学校　音楽室
参 加 者：５年生　33人

アクティビティが始まる前に、先生が子供たちに静かに聴くようにと強く注意をされた。そのせいか、アクティビティ中は異様な静けさだった。もう少し気楽に演奏を聴かせたかった。ただ、ピアノを分解して中身を見せたときには、とても興味深く見入っていた。

タイトル：中北小アクティビティ
期　　日：平成26年１月24日　13：45～14：30
会　　場：中町北小学校　音楽室
参 加 者：５年生　19人

インフルエンザの影響で、３名の欠席があった。人数が少ないアクティビティだったが、子どもの反応はかなりよかった。敬老のうた「きっとありがとう」も大きな声で歌えた。担任の小林先生の計らいで、子供たちによる合奏でアクティビティを締めくくった。心あたたまるアクティビティだった。

タイトル：松小５年生アクティビティ
期　　日：平成26年1月25日　11：35～12：20
会　　場：松井小学校　音楽室
参 加 者：５年生　41人

おんかつのアクティビティに40人までという人数制限がある理由が理解できた。40人を過ぎると、椅子を並べて座ったときにとても窮屈なのと、アーティストの演奏している姿が見えづらい子が出てきてしまう。この学年には､精神的に落ち着きのない子がいたので、少人数でのアクティビティをさせてあげたかった。

タイトル：松小６年生アクティビティ
期　　日：平成26年１月25日　13：45～14：30
会　　場：松井小学校　音楽室
参 加 者：６年生　42人

男の子が多くてとても元気な学年だと聞いていたが、全体的にはシャイな子が多かった。クラリネットの素材である木を見せてもらい特性を説明してもらったあたりから緊張がほぐれてきたようだった。ピアノの分解説明では、やはり人数が多くていい位置で見られない子がいた。

コンサート

タイトル：デュオ・レゾネ　～家族で楽しむクラシックコンサート～
期　　日：平成26年１月26日（日）　14：00開演
会　　場：多可町文化会館　ベルディーホール（定員：595人）
入場者数：88人

想像した以上に、子どもたちが多く足をはこんでくれていたことに驚いた。今回は、親子・祖父母、孫券という、大人と子どものペア券も販売したので、その成果があったのではないかと感じた。本来は、アーティストのお二人に播州織シャツを着ていただこうと思っていたが、仕上がりのサイズが合わなくてご迷惑をおかけしてしまった。しかし、それに替わる素晴らしい演奏とMCをしていただいた。とても感謝しています。

ホール担当者の意見・評価
多可町文化会館ベルディーホール　岩本　広生

①　応募の動機・事業のねらい

地域交流プログラム（アクティビティ）を通じて職員の企画能力の向上を図り、地域に音楽の楽しさや素晴らしさを伝え、音楽ファンの増加と地域の活性化を図りたいと考え応募に至った。

②　企画のポイント

アクティビティは小学校を中心に行い、吹奏楽などの楽器に興味を持ち始める高学年を対象にしたいと考えた。地域の実情にあった内容の公演やアクティビティの実施により、子どもたちの創造力・表現力・他者とのコミュニケーション力を育て、人間形成に寄与したいと考え企画した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

年度当初から小学校の校長会にアクティビティの受け入れを打診していたが、半年を過ぎても自ら手を挙げてくれる学校が現れなかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

おんかつの資料を手に、受け入れてくれそうな学校へ直接伺い了解を得た。

⑤　事業を実施しての成果

この事業では、マネジメントと直接交渉するわけではないので、３者（地域創造、多可町、アーティスト）の意思疎通の重要性を感じた。その意味では、今後の自主事業を行ううえで大変よい経験になった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

コーディネーターさんともう少し密に連絡を取りたかったのですが、電話での連絡がつかないことが多かった。今回は、アシスタントさん、地域創造の担当者さんにバックアップをしていただいたのですが、コーディネーターさんからの要求が何かと多い事業なので、もう少し連絡が取れる体制をとってもらいたい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティの重要性を再認識した。アーティストもそのような草の根活動を望んでいることがわかった。

アシスタントレポート
田辺　沙保里

兵庫県多可町は、2005年に旧中町、旧加美町、旧八千代町の３町が合併して設立された町。山田錦、播州織り、高級和紙である杉原紙の産地として名高い他、「敬老の町」発祥の地として町の魅力をアピールしている。ベルディーホールでは、町の人々が足繁く通ってくれるような身近なホールにしたいという目標の一歩として、気軽にホールに来てもらうための仕組みづくりを模索している。平成25年度には町をあげて「敬老の歌『きっとありがとう』」の制作がすすめられており、秋の個別研修に伺った際には、完成したばかりの曲を聴かせていただいた。この曲は「敬老の日」発祥の町にちなんで、公募によって選ばれた詩と曲によってつくられた。現在、町の人々に浸透するよう普及活動がすすめられており、町内の学校やイベント等でも歌われているという。担当者の岩本さんは、今回のおんかつで是非この歌をとりいれたい、と歌が完成する以前の全体研修の頃から提案しており、アクティビティとコンサートの両方において実施されることになった。

デュオ・レゾネの二人は、今回の現場が登録アーティストとしての２年間にわたる最後のおんかつとなる。様々な現場でのノウハウの蓄積が発揮され、アクティビティ、コンサートともに彼らのスタイルが存分に発揮されていたように感じる。特に、二人の音へのこだわりには周囲を圧倒するものがあり、特にホールでの音づくりには相当の調整時間を要した。岩本さんにとってこのような経験は初めてのこととおっしゃっていたが、これは裏を返せばレゾネのプロ意識の高さと演奏自体への絶対的な自信の証であるとも言える。

今回のアクティビティは、各々特色のある活動を誇る町内３つの小学校で、５年生および６年生を対象に実施された。杉原谷小学校には紙漉きのための専用施設があり、６年生は自分の卒業証書の紙を漉いて作る。学校に到着した際、レゾネもこの様子を見学する機会に恵まれた。中町北小学校では、子どもたちが地域の大人や卒業生の指導により播州歌舞伎を20年以上伝承しているほか、鼓笛の活動もさかんである。アクティビティの最後には合奏のプレゼントも用意されていた。松井小学校はちょうど授業参観のため土曜日に授業があり、午前と午後のアクティビティの合間に、レゾネは昼食交流をとおして子どもたちと過ごすことができた。どの学校でも、終始、ほどよい緊張感の中で行われたアクティビティであったが、特に子どもたちの関心を集めたのは楽器の分解解説であった。クラリネットのパーツが順に組み合わされていくことで音が変化する様子や、楽器がどんな木でできているのか、という問いに子どもたちは興味津々であった。今回初めての試みとして、多可町に向かう途中の小野市で亀井さんが購入してきたというグラナディラの原木を実際に見せるというシーンもあった。普段あまり目にすることのない真っ黒な木に、ほーっという歓声があがった。また、鈴木さんがピアノの鍵盤を引き出して中を見せ、中が見える状態で子犬のワルツを演奏した場面では、子どもたちだけでなく先生方や見学の大人たちも目を丸くして驚いていた。演奏のみならず、レゾネの二人がそれぞれ音楽をはじめたきっかけや、好きなことがそのまま仕事になったという話は、子どもたちの心をとらえたようで、二人の独特な語りに引き込まれていた。アクティビティの最後にはクラリネットとピアノとともに『きっとありがとう』が子どもたちの合唱で共演された。

最終日のコンサートでは、「敬老」にちなんで、割引のある親子券・祖父母、孫券が用意された。ピエール・ブーレーズ作曲『ドメーヌ』で照明効果を利用した演出が為された他、ヨハネス・ブラームス作曲『クラリネットとピアノのためのソナタ』といった約20分かかる曲もプログラミングされていた。内容としては親しみやすさが全面に押し出されたコンサートではなかったが、初めて聴く人もレゾネの音楽を存分に味わうことができたのではないか。アンコールでは、会場の皆さんと、敬老の歌『きっとありがとう』の合唱がおこなわれ、アンケートにはそれに対する感謝の言葉も見られた。

今回の期間中、もともと兵庫県とつながりの深いクラリネットの亀井さんの呼びかけで東条市の方と多可町の方が交流する機会がつくられたり、ピアニストの鈴木さんがホールのピアノ管理の方法について提案したりと、地域とアーティストという独特の距離感からこそ生み出されるものもあるかもしれないという可能性が見出されたことに意義を感じた。

実施団体：公益財団法人 橋本市文化スポーツ振興公社
実施時期：平成26年１月23日（木）～平成26年１月25日（土）
出演アーティスト：北島　佳奈（ヴァイオリン）　加地美　秀子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンミニコンサート
期　　日：2014/1/23　10：45～11：30
会　　場：あやの台小学校　音楽室
参 加 者：５年生　24人

・校歌の共演　・愛のあいさつ／エルガー　・MC（自己紹介、ヴァイオリンの説明）　・ピチカート
共演（子どもたちは鈴、タンバリン、トライアングルを演奏）無伴奏ヴァイオリンソナタ ラルゴ／
バッハ　・ヴァイオリン体験　・チャルダッシュ／モンティー
校歌、ピチカートや体験などの参加するプログラムでは積極的に参加していたが、愛のあいさつやバッハのソロでは集中して演奏を聴いていた。

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンミニコンサート
期　　日：2014/1/23　13：45～14：30
会　　場：あやの台小学校　音楽室
参 加 者：６年生　33人

・校歌の共演　愛のあいさつ／エルガー　・MC（自己紹介、ヴァイオリンの説明）　無伴奏ヴァイオリンソナタ ラルゴ／バッハ　・詩の朗読（谷川俊太郎“生きる”）　・チャルダッシュ／モンティー
全体的に５年生に比べ落ち着いており、参加型のプログラムでは少し恥ずかしがっている様子だった。

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンミニコンサート
期　　日：2014/1/24　10：45～11：30
会　　場：境原小学校　音楽室
参 加 者：１～３年生　27人

・人形のおどり　・ＭＣ（自己紹介、ヴァイオリンの説明）　・ピチカート共演（子どもたちは鈴、タンバリン等を演奏）　・無伴奏ヴァイオリンソナタ ラルゴ／バッハ　・ルーマニアダンス（子どもたちは曲に合わせて足踏み、手拍子 等　身体を動かす）　・ＭＣ　・チャルダッシュ／モンティー
１～３年生までの子だったので少し落ち着きは無かったが、元気が良く興味を持って聴いていた。

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンミニコンサート
期　　日：2014/1/24　13：45～14：30
会　　場：境原小学校　音楽室
参 加 者：４～６年生　25人

・人形のおどり　・ＭＣ（自己紹介、ヴァイオリンの説明）　・ピチカートの共演（子どもたちは小物楽器を演奏）　・無伴奏ヴァイオリンソナタ ラルゴ／バッハ　・ヴァイオリンとピアノのためのソナタ　・ヴァイオリン体験　・チャルダッシュ／モンティー

４～６年生の大きな子のクラスでより落ち着いて聴いていた。

コンサート

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンコンサート～地域の未来に思いを馳せて～
期　　日：平成26年１月25日（土）　14：00開演
会　　場：橋本市産業文化会館　大ホール（定員：680人）
入場者数：222人

第１部　・愛のあいさつ／エルガー　・無伴奏ヴァイオリンソナタ ラルゴ／バッハ　・キラキラ星　・チャルダッシュ／モンティー　・ヴォカリーズ／ラフマニノフ　・ツィゴイネルワイゼン／サラサーテ　・ヴァイオリンソナタ第25番 第１楽章　第２楽章

第２部　・タイスの瞑想曲／マスネ　・ユーモレスク／ドヴォルザーク　・ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ ト長調

ユーモレスクとソナチネにてプロジェクターを使用し、“将来の夢”のイラストと“夢アンケート”、アクティビティ時の様子を投影

ホール担当者の意見・評価
橋本市産業文化会館　永井　里奈

①　応募の動機・事業のねらい

将来的な文化発信者や鑑賞者を育成していくために、小さな頃から生の音楽に親しむ機会を提供するため応募。

このおんかつ事業を通して音楽に興味を持った子どもが、将来演奏者になったり、鑑賞者になることで当ホールの活性化にも繋がると考える。

②　企画のポイント

今回は、将来的な地域文化振興のためということを第一に考え、吸収力の高い小学校高学年を主な対象とした。音楽を素直に聴くことが出来、また聴くだけではなく創造力を高められると考え、“地域の未来”と“将来の夢”をテーマにアクティビティを実施した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

ロビー展示のため、“将来の夢”をテーマにした絵を、事前に子どもたちに書いて貰う必要があったが用紙の手配の遅れや学校側との連絡調整不足のため絵の提出が間に合わなくなりそうになった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

絵を描くのに時間のかかる低学年の子どもたちの用紙を半分の大きさにし、描く量を少なくした。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティ中や終了後の子どもたちの輝いた表情から、とても強く印象に残る事業になったのではないかと思う。

続けていくことで地域全体の音楽に対する意識が向上していくと考え、今後も同様の事業を実施していきたい。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

アーティストとのやりとりの間にコーディネーターの方に入っていただくため、連絡には余裕を持って行わなければならないと感じた。

また、学校側とのやりとりでも電話で口頭で行うことが多かったが、実際学校へ伺い、資料を渡してお話するべきだったな、と感じる部分もあった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回、事前に北島さんが橋本市へ来て下さる機会があったため、橋本市内を案内するために地域のことを調べなおしてみると、長年住んできた町でも知らないことが沢山あり、もっと勉強しなければならないと感じた。

アシスタントレポート
西村　聡美

橋本市産業文化会館のおんかつ担当である永井さんは、このおんかつを通して子どもたちに地域のことをすきになってもらいたいと研修会のときからお話されていた。だからこそ、和歌山県在住の北島佳奈さんとコンサートを作っていきたいとの思いがあったそうだ。

さらに永井さんは、このコンサートをきっかけにして普段ホールに足を運ばない親子や若い人にも足を運んでもらいたいとのことだった。北島さんもこの話を受けて、子連れということでコンサートに足を運びづらく感じている知り合いの方が何人かいるので、そういう人たちに足を運んでもらえる場をつくりたいとおっしゃっていた。このため、コンサートは未就学児入場可・中学生以下無料とすることになった。

北島さんがおんかつでよく行っている「夢アンケート」というものがある。アクティビティ先の子どもたちに、アクティビティ終了後、将来の夢について書いてもらい、おんかつ最終日のコンサートでその夢をスライドで投影しながら演奏するというものである。地域の大人たちと、ともに暮らしている子どもたちが将来の夢を共有することで、今住んでいる場所がさらに好きになったり、こどもが大人たちをどうみているのかを知ったりするよいきっかけになったりするそうだ。

永井さんは現地研修の頃から橋本の子どもたちに「橋本市」をテーマにした絵を描いてもらい、コンサートの時に展示したいとおっしゃっていた。アーティスト打ち合わせなどで北島さんの夢アンケートのお話を受けたのち、北島さんが行う夢アンケートに加えて、アクティビティ先の子どもたちに将来の夢をテーマとした絵を事前に描いてもらい、ホールのロビーに展示することとなった。

アクティビティは２つの小学校でそれぞれ２回ずつ行うこととなった。１日目のあやの台小学校は今年度開校した学校で、子どもたちも都会的な印象の子が多かった。２日目の境原小学校は全校生徒の数が60名にも満たない小規模校なのだが、子どもたちは素朴で学年関係なく仲良くしているようだ。

ホールではこのアクティビティのためにヴァイオリンを購入していて、アクティビティを通して、子どもたちはこの楽器を実際に触って体験することができた。ヴァイオリンを間近でみること自体が初めての子も多くいたようで、実際に触ることができるのはとても貴重な機会だったように思う。

北島さんは橋本市の前に行ったおんかつの際、かわいらしい封筒に入れたチケットとコンサートのチラシをアクティビティの最後に直接手渡したことでコンサートの子どもたちの来場率があがったという経験から、今回、ご自身で封筒を準備してチラシを封入し、子どもたちに直接渡していた。先生が教室で渡すよりもやはり子どもたちが受ける印象は違うようで、子どもたちのコンサートの来場率もとてもよかったようだ。

コンサートでは、上記の夢アンケートの投影の他に、子どもたちの絵の投影も行った。文字でみる印象と夢を絵にしてもらうとでは、同じ内容がかいてあったとしても印象が大きく変わり、特に絵の場合には子どもたちの頭の中で広がっている世界がよく見えるような気がして、とても感動した。これらに北島さんの演奏が加わることで､子どもたちの絵がよりいっそう生き生きしてくるような印象を持った。

今回のコンサートには「地域の未来に想いを馳せて」という副題がついている。永井さんが企画したこのコンサートによる、北島さんの演奏・子どもたちの絵やことばを通して、橋本に住む人々が自分の今いる場所や家族・友人について想いを馳せてくれたのではないのだろうか。

橋本市おんかつは永井さんのご尽力はもちろん、館長の森脇さんのおかげでこれだけすてきなものになったのではないかと思う。森脇館長にはお忙しい中、現地研修の時から常にご一緒していただき、小学校とのアクティビティに関するやりとりなどの事業のことだけでなく､アーティスト､はたまたスタッフにまで様々なお気遣いをしていただいた。お二人の熱意ときめ細やかな気配りによって、これだけたくさんの方にホールまで足を運んでいただけたように思う。

このおんかつをきっかけとして、地域の若い世代の方にホールにたくさん足を運んでもらえるよう、そして北島さんとお二人の交流が続いていってもらえるようになったら私はとてもうれしい。

実施団体：紀の川市
実施時期：平成25年10月17日（木）～平成25年10月19日（土）
出演アーティスト：デュオ・レゾネ（クラリネット＆ピアノ）

アクティビティ

タイトル：親子おしゃべりミニコンサート
期　　日：平成25年10月17日　10：30～11：10
会　　場：粉河ふるさとセンター　大ホールの舞台
参 加 者：子育て中の親子15組　合計32名

舞台中央に畳を敷いて、椅子を後ろに並べ、参加者に好きな場所で聴いてもらえるようにした。

楽器紹介を織り交ぜながら演奏を聴いてもらった。お母さんたちは音楽にゆっくり浸ってくれているように感じた。クラリネットをまじかで聴いた子供たちは音に合わせて体を動かしたり踊ったり楽しそうな反応を見せてくれた。

タイトル：ご近所お誘いコンサート
期　　日：平成25年10月17日　19：00～19：45
会　　場：竜門児童館　大広間
参 加 者：地域住民　19名

地域の住民に声をかけて（農協の有線放送とチラシ）集まっていただいたが、当日地区内で通夜があり、参加者が少なくなってしまったのが残念だった。畳の間で、一段上の舞台にグランドピアノがありそこで演奏し、楽器紹介も行い、最後には、「ふるさと」を皆で合唱して暖かかなコンサートであった。参加者は60歳前後の方が多く、音の素晴らしさに感動したとの声を聞くことができてよかった。

タイトル：ティタイムミニコンサート
期　　日：平成25年10月18日　14：00～14：45
会　　場：福祉施設　風の里
参 加 者：施設入所者・デイサービス利用者　34名

施設利用者の皆さんは、静かに音楽を聴いてくれていた。楽器の説明にも興味深く見ていた。最後の「ふるさと」は曲に合わせて口ずさんでいた。お礼に花束を用意してくれていて、一番前に座っていた方は、クラシックを生で聴くことはもう無いだろうと思っていたので、本当によかったと喜んで話してくれたことは担当としてうれしいことであった。

タイトル：親子アットホームコンサート
期　　日：平成25年10月18日　19：00～19：45
会　　場：むつみホーム
参 加 者：入所中の母子　39名

施設に入所中の母と子供の全家族がコンサートに参加し、小さな子供も最後まで聴いていた。楽器説明では、クラリネットとピアノの説明をしてピアノの中がどんなになっているかを見せて子供たちは興味深げだった。子供は幼児から高校生までで、小学生が一番興味を示してくれたように感じた。

コンサート

タイトル：デュオ・レゾネコンサート
期　　日：平成25年10月19日（土）　13：30開演
会　　場：粉河ふるさとセンター　大ホール（定員：752人）
入場者数：142人

第一部４曲・第二部では２曲の演奏をジックリと鑑賞し、アンコール「ふるさと」を会場の皆様と合唱してフィナーレ。亀井さんと鈴木さんのトークもほんわかとしたムードで会場から笑いもでるなど、楽しいコンサートになった。来場者からは、音の綺麗さに感動した。クラシックはわからないと思っていたけど良かった、などの声を聞くことができ、少しでも音楽の楽しさを伝えることができたのではないかと思う。

ホール担当者の意見・評価
粉河ふるさとセンター　小谷　多加子

①　応募の動機・事業のねらい

自主事業の予算が縮小されていく中で、ホールの活性化をどうして行くか・芸術文化を市民に提供する機会として応募した。この事業を通じてクラシックに親しみ芸術に興味を持ってもらうことと、普段音楽に接することの無い人たちに音楽を届けることを目的とした。

②　企画のポイント

音楽を届けるため、普段あまり音楽に接する機会の無い人たちのいるところでアクティビティを計画した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

人を集めることが、思ったよりも大変であった。子育て中の親子は、親が勤めていて保育園に入所しているという方が多く、平日の昼間に聴きにこれる方が少なかった。地域の住民を対象にし集まってもらうのにも、当日お通夜という事態が起こるとご近所の参加者が少なかった。こういう催しに興味を示してくれるのは女性が多く、若い人はなかなか関心を示してくれなかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

親子教室の参加者にチラシを配ったり、地域の農協の放送でお知らせを入れたりした。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティで参加を呼びかけたり、出かけたことで、ふるさとセンターを知ってもらえた。また、クラシックコンサートを初めて聴いた方達からは、楽器の音の素晴らしさに感動したとの声を沢山聞くことができ、本物のよさを知ってもらえるきっかけになった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

ホールコンサートに集客ができなかった。特に小・中学生に参加してもらえるよう無料にしたが効果がなく学校との連携をとれるような方法を考えたい。芸術に対して興味をもってもらうことの難しさを実感した。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

地域住民の芸術に対する関心の低さを知った。ホールが自分たちの大切な財産と位置づけ文化の発信基地にできるのか考えさせられた。

アシスタントレポート
菊地　俊孝

紀の川市は和歌山県の北部に位置し、2005年、那賀郡打田町、粉河町、那賀町、桃山町、貴志川町の５町が合併し誕生した。市内には国の名勝にも指定されている枯山水庭園を有する粉河寺があり、いまも多くの巡拝者が訪れる歴史豊かな土地である。

紀の川市粉河ふるさとセンターは会議室などを備え、年間数本の自主事業を行う客席数700席のホールである。おんかつの担当者である小谷さんは、市民が日常的にホールへ来館していただけないという現状から、よりホールを身近に感じてもらい、クラシックにも興味をもってもらいたいとこの事業に参加された。来館者は地元で農家を営む方々が多く、交通の便のこともあり、多くの方々にホールに足を運んでいただくため、まずはその意思があれば自分でホールに足を運べる方々をターゲットにアクティビティを実施した。アクティビティ先は地域の人々が集まる地域施設、老人デイセンター、また、子育て中の親子を対象としたホールでのインリーチ、そしてホールに足を運ぶことの少ない児童福祉施設の入所者の方々を対象に、音楽から得られる「何か」を感じてもらいたいという担当者の思いのなか実施された。

今回のアクティビティは基本的に大人、また親子を対象としたアクティビティであり、アーティストのデュオレゾネのお二人の参加者に対するまっすぐな姿勢とやさしく伝わる音楽が、アクティビティ先での来場者に届いていた。なかでもホールに足を運びにくい児童福祉施設の方々は、施設のなかで家族のように過ごしている職員の方々の暖かいまなざしのもと、音楽を楽しんだ。

コンサート当日は、アクティビティに参加してくださった方々もホールに足を運んでくださり、地元ホールの魅力、クラシック音楽の魅力を伝えられるコンサートになり、今後の発展を期待させるおんかつとなった。そして、何よりホールの皆さんのチームワークの良さと小谷さんのリーダーシップが発揮され、あたたかなホールの雰囲気を感じさせるおんかつであった。今後は少しずつでも、この地元にあるホールの魅力を市民の方々に伝え続けていってほしいと思う。

実施団体：児島商工会議所・クラレテクノ共同事業体
実施時期：平成25年11月７日（木）～平成25年11月９日（土）
出演アーティスト：新居　由佳梨（ピアノ）　松本　蘭（ヴァイオリン）

アクティビティ

（スペースの関係上、４校とも進行は同じだったので、各校に①②③④で振り分ける）

タイトル：琴北っ子　140年目の出会い
期　　日：平成25年11月７日　10：30～11：30
会　　場：琴浦北小学校　音楽室
参 加 者：１～６年生 19人

瑜伽山麓にある全校生徒21人の少人数校　先般創立140周年事業を終えたばかり。

昨夕初めての音合わせをしたばかりなので、入念にリハーサル。

①先生のこれからの事業の内容、注意事項の説明後拍手でアーティストを迎え入れる。

※「環境からか、少しおとなしく引っ込み思案」と校長が心配していたが、慣れるにつれ、アーティストからの質問にも積極的に手が挙がる。聞き入る目線は真剣そのものだった。

タイトル：琴南っ子　30年目の出会い
期　　日：平成25年11月７日　13：50～14：35
会　　場：琴浦南小学校　音楽室
参 加 者：４年生　51＋４（なかよし）＝55人

瀬戸内海に面し、創立30周年事業を終えたばかりの、琴浦地区では新しい小学校。

①の後直ちに②、「愛の挨拶」を演奏、二人で挨拶、曲の紹介。質疑を交えて、松本さんヴァイオリンの楽器構造･演奏技法の解説、難曲を独奏。トピックは３才時の１/16ヴァイオリンの披露。

※演奏曲は全て、本格的なクラシックにもかかわらず、真近での演奏に生徒は自然に聞き入る。質疑を交えた説明・解説、プレゼン時よろしく、小道具使用の効果は大であろう。

タイトル：琴西っ子　耐震工事にもめげず　音楽を楽しむ
期　　日：平成25年11月８日　10：45～11：30
会　　場：琴浦西小学校　音楽室
参 加 者：５年生　67人

耐震工事中のため全てプレハブ仮設校舎、140年の伝統。

①②の後③新居さんピアノの楽器構造、演奏技法の解説、難曲を独奏。トピックはオルゴールを使って心臓部である響板の説明。

※毎年体育館にて、演劇鑑賞会等の実施校であるが、真近での体験は初めて。教務主任､音楽教師も積極的で盛り上がった。終了後、翌週地区音楽発表会における合唱の練習を披露。

タイトル：琴東っ子　140年目の出会い
期　　日：平成25年11月８日（金）　14：10～14：55
会　　場：琴浦東小学校　音楽室
参 加 者：４年生　55＋12（くすのき）＝67人

140年の伝統　くすのき（支援学級）生徒全学年参加。

アーティスト、スタッフ８名、８グループに配置して４年生と和気あいあい給食を食べ、交流を図る。

①②③の後④（サンサーンス）ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第１番[コンサートのメイン]解説を交え、一楽章を熱演。

※身近に給食を一緒に食した効果からか、今までの３校とは違った和やかな雰囲気でのアクティビティー。しかし、生徒の目線・耳は興味津々、心は感動。この気持ちを伝えたい様子。

コンサート

タイトル：新居由佳梨　松本　蘭　デュオコンサート
期　　日：平成25年11月９日（土）　14：00開演
会　　場:児島市民交流センター　ジーンズホール（定員:274人）
入場者数：157人

まさに、「おんかつ」、アクティビティー後のコンサートであった。初共演、大好評であった。

演奏者による、曲・作曲者の簡単な解説をするコンサートはあるが､楽器を使ってまでの入り込んだ解説は初めてである。以前の「ららクラシック」に近い形でのコンサートに興味はあったが（お客様からも、マナー含めて、要望もあった)、功罪心配で、できなかった。勿論、トレーニングを受け、プレゼン、実施の経験有ってのことであろう。「おんかつ」に即した選曲、熱演に拍手。

ホール担当者の意見・評価
児島市民交流センター　角南　平治

①　応募の動機・事業のねらい

１：開館１年に当たり、実績と計画の評価、今後の指針が得られないか。
２：企画～実施までの学習をしたい。
３：市民の文化（生活・産業・芸術）に対する興味・参加（有料）のきっかけ作り。
４：子どもたちに本物の芸術に触れるチャンスを提供。
５：第一線で働く男性にホールへの来場チャンスを提供。

②　企画のポイント

１：学校の理解を得、日程・内容の調整。(子どもたちは絶対に反応をするという確信の基)
２：初共演のアーティストではあるが、サムシングをいかに引き出すか。
３：広報

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

１:学校の不安（少人数･･･参加できなかった生徒の保護者からのクレーム対応)､学校の年間スケジュールがタイト。
２：コンサートのチケットの販売。
①年間有料自主事業を６～８本入れるためチケットの無理な販売はできない。
②有料の広報・宣伝ができない。
③他のコンサート､イベントとのバッティング。(同日同時間岡山市民会館:チェコ国立ブルノ･フィル、夕刻倉敷市民会館：パリ管、児島青年会議所児島公園：キャンドルナイト、児島地区子供会：土日イベント、建設労働組合当芝生広場：職人さんのフリマ、児島文化協会児島文化センター：文化祭(年間スケジュールには見当たらなかったが、調査不足！)

④　上記③をどのようにクリアしたか

１：財団の了解を得、３校は１クラスを１学年にし、なお１校は人数上４年を５年に。理解を得、２校は校長不在で実施。※倉敷ケーブルテレビに企画を挙げ、採用される（アクティビティー 30分番組、コンサート90分、再放送多回数)
２：従来のチラシの配布は倉敷市文化振興財団会員2000名（チラシの関係で直前になる)、チケット販売所、健康福祉プラザ、ライフパーク（倉敷市基幹公民館)、児島地区５公民館、図書館、児島地区12郵便局、近隣10喫茶・飲食・美容院、商工会議所、産業振興センター、ファッションセンター、市役所本庁･支所、各報道機関。今回＋商工会議所所報挟み込み1500枚、アクティビティー４校全生徒、４中学吹奏楽・管弦楽部員、ジーンズホールクラブ会員200名郵送、音楽教室、SC、各奉仕団体・・・に配布。

⑤　事業を実施しての成果

１：アクティビティーに参加した生徒の反応は予想以上だった。先生方にも大好評であった。
２：初共演ながら演奏は勿論のこと、アクティビティーの構成・進行はさすが、素晴らしかった。
３：コンサートの進行に一部不安はあったが、さすがコーディネーター・アーティストの企画・構成力・経験により素晴らしいものになった。(来場者から大好評、私は生徒を舞台に上げるため、初めてメインの素晴らしい終曲を客席から体験した)

４：アクティビティーに文化振興課の若手職員、コンサートに当センター担当の若手職員が参加。書類とインタビューで報告。
５：倉敷ケーブルテレビの放送のおかげで、今も「おんかつ」が続いている。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

１：多忙なアーティスト２名をお願いしたため、アーティスト・コーディネーターのスケジュール上、演奏曲目が決まらず、チラシのアップが１か月前になった。最終的に曲目は入れなかったが、遅くとも９月初旬にはアップすべきであった。(10月初旬アルス会員送付、会議所会員企業送付、山陽新聞児島地区挟み込み版掲載等)　※重大な状況判断ミス
２:後援依頼をマスコミ横一列にTV･新聞増やすべきだった。(後援依頼以外では毎日新聞情報コーナーのみ)
３：市民へのアッピール不足。民・学・産・官一体となった活動ができるか。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

１：児島の文化（生活・産業・芸術）行政が見えないことが、改めて確認された。
　人口７万数千人、繊維産業の集積された全国に類を見ない町に、児島文化センター（昭和45年開館、1200席、スタインウェイ有り･･･十分な活用がされていないのでは）はあるが、美術館、資料館（産業、民芸）がない。
２:当センターにホール（施設、設備）を併設した趣旨を行政、指定管理者、市民が共有しているのか、改めて不安になった。10数年前の市民の要望通り、文化センターを含め一体的に「文化」を検証しなければならない。

アシスタントレポート
柿塚　拓真

①公演実施まで

「是非、新居由佳梨＆松本蘭のデュオでやりたいんです。何とかお願いします！！」倉敷市児島でのおんかつは、ホール担当者のこの思いに集約されているといっても過言ではない。４月の全体研修会でホール担当者からリクエストがあるまでは誰も考えたことのなかった組み合わせだった。正直に申し上げるとアーティストもコーディネーターも「本当にその組み合わせでやるのですか？」と思っていたと思う。しかしホールの担当者のアイデアは「どちらが主、従というものではないデュオで本格的なクラシックの楽曲を我らのホールで提供したい」と真っ直ぐだった。ホールの様々な事業の企画をするなかで長年やりたかった本格的な室内楽をおんかつを活用してこの機会に地域の方へ提供したかったのだろう。企画のコンセプトや演目などで具体的なリクエストもあったが、アーティストの個性を重視することや初めてのデュオであることを踏まえアーティストの意思を大事にしたいというコーディネーター側の意向を、その熱い思いとは反対に意外と（？）素直に汲み取っていただいた。それも担当者がアーティストに音楽的に惚れ込んでいたからだろう。

②アクティビティ

アクティビティは倉敷市児島のなかでも琴浦地区にある東西南北の４つの小学校でそれぞれ行った。アーティストの２人は既におんかつ2年目であり、それぞれにアクティビティのやり方を確立されているし、ホール担当者のコンセプトが「聴かせる」ことにあり、アクティビティもその方向性を守ったため奇をてらったことはせず、鑑賞を中心に組み立てていた。その中でも演奏の途中にオルゴールを使ったピアノの響板の仕組みや、ヴァイオリンの奏法の解説などが鑑賞をする際の導入になっており子供たちの集中の助けになっていて素晴らしい。二人のアーティストが同時にアクティビティを進めるのでお互いに伝えたいことがあり時間やペースの配分に少し時間を要したが回数を重ねるうちに、よりまとまったアクティビティになっており、その様子が音楽的なアンサンブルの精度や信頼感と比例しているように感じ非常に興味深かった。

③コンサート

コンサートでは先述したように半年前には誰も想像していなかったデュオがそれまでのリハーサルと２日間のアクティビティを通じて花を開き、ヴァイオリン＆ピアノデュオのデビューコンサートに相応しいレベルのものが提供できたと思う。コーディネーターの調整能力の高さとともにアーティストお二人の能力の高さ、柔軟性が身を結んだコンサートだった。

④最後に

今回のホールの担当者は自主企画に対する情熱を現実のコンサートにできる方で、これまでの事業をほぼ一人で企画されており、その熱い思いとヴァイタリティにはいつも感心させられていた。今回のおんかつはコーディネーターやスタッフから様々な意見が出され、いつもと違い勝手が悪かったかもしれない。しかし、今回はその情熱がおんかつを通して、客観的なアドバイスを受けながら、新しいデュオの誕生、そして児島でのデビューという成功に繋がった。今後も自主企画をされる際にはおんかつのことを振り返り客観的な視点を活用していただくことで更なる成功に繋がるのではないだろうか。

実施団体：大崎上島町教育委員会
実施時期：平成25年９月19日（木）～平成25年９月21日（土）
出演アーティスト：奥田　なな子（チェロ）　鈴木　華重子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：
期　　日：平成25年９月19日　10：40～11：25
会　　場：東野小学校　音楽室
参 加 者：全校57人

・チェロが何でできているか・音の出し方等質問形式で説明。音楽の歴史・音楽家について説明をしながら演奏。

タイトル：ふれあいコンサート
期　　日：平成25年９月19日　14：05～14：50
会　　場：木江小学校　音楽室
参 加 者：全校41名

・チェロが何でできているか・音の出し方等質問形式で説明。音楽の歴史・音楽家について説明をしながら演奏。
・花は咲くを全員で合唱した。

タイトル：
期　　日：平成25年９月20日　10：45～11：30
会　　場：大崎小学校　音楽室
参 加 者：４年生21名　５年生26名

・チェロが何でできているか・音の出し方等質問形式で説明。音楽の歴史・音楽家について説明をしながら演奏。
・児童とジャンケンをして、打楽器を選んで一緒に演奏した。

タイトル：
期　　日：平成25年９月20日　14：00～14：45
会　　場：大崎上島中学校　音楽室
参 加 者：一年生38名

・チェロが何でできているか・音の出し方等質問形式で説明。音楽の歴史・音楽家について説明をしながら演奏。
・君をのせてを合唱した。

コンサート

タイトル：‘しま’から奏でるチェロ音楽会
期　　日：平成25年９月21日（土）　14：00開演
会　　場：大崎上島文化センター　ホール神峰（定員：366人）
入場者数：180人

・全住民を対象とし、14時から16時の約２時間チェロとピアノの音楽会を開催した。

ホール担当者の意見・評価
大崎上島町教育委員会　赤松　三津子

①　応募の動機・事業のねらい

少子高齢化が進んだ離島の小規模ホールで、交通の不便等から特に高齢者の参加が難しい現状で、アウトリーチを積極的に実施し、身近に音楽に触れてもらい、ホールコンサートへの参加のきっかけとしたい。

②　企画のポイント

イ　小中学生にクラシックを聴く機会と、チェロの音の素晴らしさ・音楽に対して興味関心を抱いてもらう。

ロ　小さな町全体でチェロの奏でる音色の素晴らしさを感じてもらい音楽活動の発展に継いでほしい。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

イ　宿泊施設の確保。

ロ　他の行事と重なりチケットの売れ行きが心配。

④　上記③をどのようにクリアしたか

イ　宿泊先を２か所にしてもらった。

ロ　ポスターを人の目につく場所に貼ったり、チラシを全戸配布・町広報に載せてもらった。

⑤　事業を実施しての成果

小中学生がアーチストと触れ合ったり、演奏に合わせ合唱したりとてもいい時間を過ごせたと思います。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

録音機器が、ホールに整備されていなかったこと。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

・多くの住民に、ホールに足を運んで頂くため、ピアノ（スタインウェイ）を無料で貸し出しする機会を設ける。

・今後、音楽だけでなく多くの分野で事業の開催を目指し、一人でも多くの住民にホールでの開催のすばらしさを理解していただけるよう務める。

アシスタントレポート
丹羽　梓

瀬戸内海に浮かぶ周囲約35kmの小さな島、大崎上島町。人口約8000人の小さな島に、奥田さんの美しいチェロの音が響き渡った。

大崎上島町にはピアノ教室しかなく、生のクラシック音楽を聴く機会がほとんどない。担当の赤松さんはそんな島の子どもたちにチェロの音を聴かせたいという思いがあり、アクティビティ先に島内全ての小中学校（小学校３校、中学校１校）を選んだ。

アクティビティは、ホールコンサートでのメインの曲となるラフマニノフのソナタを中心として組まれた。アクティビティ先のうち２校の小学校が全校児童対象であったことから、幅広い年齢層の子どもたちに音楽をどのように届けるかが課題であった。低学年の子どもたちには、曲名と作曲者が文字で並んでいる一般的なプログラムを配布しても内容を理解することが難しい。奥田さんは作曲家の似顔絵入りプログラムを手書きで作成し会場に掲示することで、子どもたちにとって馴染みのない作曲家たちや楽曲について分かりやすく伝えていた。アクティビティ終了後に配布した手書きプログラムを子どもたちが嬉しそうに持ち帰る姿が印象的だった。

今回は、大崎上島町の全ての小中学校でアクティビティを実施することができたことが大きな成果だったと思う。子どもたちに「セロ弾きのゴーシュ」を見せて事前学習をしてくださった学校、職員全員でアクティビティを見学してくださった学校など、どの学校もアクティビティに対する関心の高さがうかがえた。赤松さんの子どもたちに生の音楽を伝えたいという思いがアクティビティ先の先生方に伝わった結果だと思う。

ホールコンサート当日、地域のお祭りが予定されており集客が心配されたが、アクティビティ先の子どもたちや校長先生などを中心に多くの方が足を運んでくださり、ホール開館以来、最も多い集客数となった。コンサートはアクティビティで子どもたちと一緒に演奏した曲やその時のエピソードなどを織り交ぜながら進み、親しみやすく、かつ本格的なプログラムであった。１時間半程度の公演にも関わらず、子どもたちがとても集中して演奏を聴いていた。

今回のおんかつを通して「音楽のもつ力」を改めて感じた。

担当の赤松さんをはじめ、社会教育課の職員の皆さん全員にとって初めてのクラシックコンサートの開催であったが、アクティビティ初日の奥田さんの演奏を聴いて、皆さんの不安な表情が笑顔に変わった。日を追うごとに皆さんの表情が生き生きとし、奥田さんの演奏の魅力に引き込まれていくのが分かった。奥田さんのチェロに合わせて子どもたちが合唱をする様子を見て、涙する先生。コンサート当日の朝からホールの前で開演時間を待ってくれていた子どもたち。コンサート中、舞台袖から奥田さんの演奏を真剣に聞き入る職員さん。

音楽を聴いて、様々なドラマが生まれる。それは、人々が普段生活している空間に入り込むことで、より感動が大きくなる。学校や福祉施設などの地域のコミュニティー空間の中でアクティビティを行う「おんかつ」の醍醐味を感じることができた。

今回のおんかつをきっかけとして、今後もホール神峰が島の人々の感動の場、コミュニケーションの場として発展していくことを期待したい。

実施団体：今治市
実施時期：平成26年１月16日（木）～平成26年１月18日（土）
出演アーティスト：奥田　なな子（チェロ）　鈴木　華重子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：鴨部小学校ワークショップ
期　　日：平成26年１月16日（木）　11：20～12：05
会　　場：鴨部小学校　音楽室
参 加 者：５年生　16人

４校とも、チェロとピアノの演奏、チェロのソロ演奏に加え、楽器と手拍子での児童共演、合唱での児童共演という構成で行った。各演奏の間では、チェロの解説のほか、奥田さん自ら描いた絵を使いバッハやベートーヴェンなどの作曲家や音楽のおもしろさなどを伝えた（後述）。どの学校も子どもたちの演奏中の集中力と解説時の反応にはうれしいものがあった。同校は陸地部の学校（旧玉川町）。合唱共演は「世界がひとつになるまで」。給食交流も行った。

タイトル：上朝小学校ワークショップ
期　　日：平成26年１月16日（木）　14：30～15：15
会　　場：上朝小学校　音楽室
参 加 者：全校児童63人（全校児童43人、保護者10人、関係者10人）

同校は陸地部の学校（旧朝倉村）。今年度で廃校となるため全校児童で実施した。大人数であったが児童の反応もすごく良かった。

最後に「ビリーブ」を合唱共演した。廃校になる音楽室でのコンサートは、子どもたちにも特別な思い出として刻まれたことと思う。お礼の手紙を見ると、それぞれに好きな曲があり、様々なことを感じ取ってくれたようで、生演奏、アウトリートの素晴らしさを再認識した。

タイトル：日吉小学校ワークショップ
期　　日：平成26年１月17日（金）　10：20～11：05
会　　場：日吉小学校　音楽室
参 加 者：23人

同校はホールに隣接する陸地部の学校（旧今治市）。合唱共演は「となりのトトロ」。各学校とも、事前に共演曲を練習し、当日を楽しみにしてくれていた。　奥田さんがだまし絵を使った質問では、大人では気づかない見え方もあり一同、驚いた。子どもたちにも、同じ絵（曲）でも人によって見え方（感じ方）が違うということがイメージできたようだ。特別支援児童からも積極的に意見がでていた。チェロソナタでは、ベートーヴェンの人物像にも迫り、様々な意見がでた。

タイトル：上浦小学校ワークショップ
期　　日：平成26年１月17日（金）　14：40～15：25
会　　場：上浦小学校　音楽室
参 加 者：19名

同校は島嶼部にある学校（旧上浦町）で、ホールには有料の橋（しまなみ海道）を通る必要があり、距離的にも遠い。同校では、アーティストとの距離が一番近く、子どもたちは五感で演奏を感じ、食い入るように演奏を聴いていた。合唱曲は「ひこうき雲」で、アーティストが圧倒されるほどの声量で共演した。各学校とも長調と短調の説明では、奥田さんが描いたバッハやベートーヴェンのユニークな絵と鈴木さんのピアノの音に対して、すごくいい反応を見せていた。

コンサート

タイトル：しまなみチェロ音楽会　～奥田なな子　感動の音どけもの～
期　　日：平成26年１月18日（土）　14：00開演
会　　場：今治市中央公民館　大ホール（定員：582人）
入場者数：390人

一部は「マカベウスのユダ（ベートーヴェン）」、「トロイメライ（シューマン）」、「チェロソナタ（ベートーヴェン）」、２部は「無伴奏チェロ組曲（バッハ）」、「オブリヴィオン（ピアソラ）」、「親愛なる言葉（カサド）」、アンコールは「白鳥（サン＝サーンス）」。最後にアクティビティ先４校の児童58名と「カントリーロード」を合唱共演した。その際サプライズゲストとして今治市のゆるきゃら「バリィさん」に指揮をしてもらった。チェロの魅力を伝えるとともに感動的なコンサートが行えた。

ホール担当者の意見・評価
今治市教育委員会　文化振興課　髙井　利幸

①　応募の動機・事業のねらい

今治市のホールは貸館が多く、本格的なクラシックを聴く機会はほとんどない。今回、子どもたちが本物のクラシックの生演奏に触れる良い機会であると思い応募した。また当市は陸地部６つ、島嶼部６つの市町村が合併した多様で広域な市ということもあり、ホールから離れた地域の市民は来場する機会が少ない。加えて島嶼部は橋代も発生する。今回、そういった地域からの来場や、地域文化の活性化の可能性も見出したく応募した。

②　企画のポイント

テーマは「感動と交流」とした。私自身､奥田さんの演奏に感動した。演奏を聴いた人が感動すれば、音楽のファン、そしてホールのリピーターになってくれると考えた。交流については、コンサートで児童による合唱共演を考えた。その際、１校だけではなく、あえて各地域（陸地部や島しょ部）から選んだ４校の児童にホールに集まってもらい、同じ曲を共演することを考えた。曲はカントリーロードで、将来、故郷を離れたときにも頑張ってもらいたいという思いも込めた。またバリィさんに「まさに今治市の架け橋」として指揮をしてもらうことを考えた。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

・アクティビティ校の選定。コンサートに招待した４校の共演児童58名およびその保護者の調整。島嶼部からホールまで運行するマイクロバスの手配など。
・コンサートの広報宣伝及び集客。
・バリィさんの出演交渉及びホール導線確保。児童、バリィさん（サプライズゲストなので児童にばれないように）を含めたコンサート当日のリハーサル、本番の流れや演出など。

④　上記③をどのようにクリアしたか

奥田さん、田澤コーディネーター、丹羽アシスタント、地域創造の平工さん、ホールの音響さん、照明さんや先生方、学校関係者、支所、課内関係者に相談、情報提供することで、助言や質問をもらい、また手助けもしてもらいながらクリアすることができた。チケット販売では、日頃お世話になっている文化協会の団体さんにも直接、販売促進したところ、多くの方に協力していただけた。

⑤　事業を実施しての成果

・アクティビティ、コンサートともに、日頃、本格的なクラシックを聴く機会の少ない皆さんに「感動の音どけもの」ができ、また本当に喜んでもらえる事業ができた。

【会場アンケートでは、最高の音楽会、親子で感動した、チェロを初めて聴いたが感激した。児童共演も感動。バリィさんの演出も最高。温かいステージだった、など多くのうれしい感想をもらった。】

・私自身､多くの方とのご縁をいただけた。（おんかつ関係者､学校関係者､大崎上島町ホール関係者など）

⑥　事業を実施しての反省点・課題

・事業への動き出しや調整事項をもっと早く段取りしていけば、もっと落ち着いて事業を進めることができたのではと反省している。
・広報宣伝やチケット販売も、もっと早い時期に行うべきであった。今回特に年末年始も挟んでおり、販売自体できない期間も長かった。

・託児所を検討する必要がある。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

ホールが自ら市民に働きかけることの重要性を学んだ。これまで本格的なコンサートは行っていないが、市民には良いものを聴きたいという欲求があることがわかった。特に高齢者の中にはクラシックが好きで聴きに行きたくても、今治では聴けないし、遠方には行けない。という思いを抱えていることもわかった。子どもたちに本物の文化に触れてもらうことと合わせて、市民が望む、喜んでもらえる事業を行うホールにしたい。

アシスタントレポート
丹羽　梓

今治市おんかつのテーマは「感動・交流」。陸地部６つ、島嶼部６つの市町村が合併した今治市。担当の髙井さんの「それぞれの市町村だった地域を今治市として音楽で一つにしたい。」という熱い思いから今治市おんかつはスタートした。

合併した今治市は山間地域から島嶼部まで、同じ市内とは思えないほど環境が異なった地域が集まっている。また島々と陸地を結ぶ橋であるしまなみ街道が開通し、車で行き来できるようになったが、橋の通行料がかかるため島嶼部から気軽に陸地部に行けるというわけではない。そのため、陸地部と島嶼部の子どもたちの交流が進んでいないのが現状である。今回のおんかつでは、島嶼部２校、陸地部２校をアクティビティ先として選定し、ホール公演で子どもたちがアーティストと共演することで、アーティストと子どもたちの「交流」だけでなく、島嶼部と陸地部の子どもたち同士の「交流」を実現させるという企画となった。

アーティストはチェロの奥田なな子さん。小学１年生から６年生までの幅広い年齢層の子どもたちにチェロという楽器についてや、クラシック音楽の楽しさを感じてもらおうと、演奏曲にピチカートの曲を入れたり、絵を使って説明をしたりと飽きさせないプログラム構成や話し方で、子どもたちが奥田さんの世界に引き込まれ、真剣に耳を傾けている様子が印象的だった。今年度に廃校になる上朝小学校では、全校児童でアクティビティに参加し、最後は校庭まで出て来て私たちを見送ってくれた。子どもたちの心の中に、上朝小学校の思い出の一つとして奥田さんのアクティビティが残ったのではないかと思う。

ホール公演での課題は、子どもたちとの共演方法であった。髙井さんの熱意ある声かけのおかげで、自由参加にも関わらず島嶼部を含めた共演児童が62名も集まった。全員がそのまま舞台に並ぶと顔が重なってしまい、せっかく参加してくれた子どもたちの顔が見えなくなってしまう。髙井さんが何度も舞台スタッフの方と相談を重ねて下さり、奥田さんの演奏プログラムに支障がないよう、舞台下に平台を設置し半数の児童に舞台下に並んで歌ってもらうことで全員の顔が見えるように工夫した。

また奥田さんの提案で、共演の子どもたちに素敵なサプライズをすることになった。今治のゆるキャラ「バリィさん」を子どもたちの共演の際に一緒に共演させようというものだった。

『交流の少なかった島嶼部と陸地部の子どもたちに、音楽を通して交流を深めてもらいたい・・・。』普段はコンサートなどへの出演を断っているバリィさんが、今回のおんかつの目的を話すと、特別に出演してくれることになった。

コンサートのタイトルは、「しまなみチェロ音楽会　～奥田なな子　感動の音どけもの～」。バッハからピアソラまで様々な時代の曲を取り上げながら、初めての方にも親しみやすく、聞きやすいプログラムだった。１部の衣装はドレス、２部の衣装はパンツスタイルという衣装替えの演出も曲の雰囲気にぴったりと合っていてとても印象的だった。アンコールではバリィさんのサプライズ登場も大成功し、奥田さんと子どもたちとバリィさんの共演はまさに「感動の音どけもの」となった。

４月のおんかつ全体研修の時から、島嶼部と陸地部が交流できるようなおんかつをしたいと語っていた髙井さん。９月の大崎上島町でのおんかつにも足を運び、準備を進める髙井さんの熱意が形となったおんかつになった。

また、コンサートには大崎上島町社会教育課の皆さんも来てくださり、ホール担当者同士の「交流」も生まれた。

今回のおんかつでは、学校やコンサート会場となった今治市中央公民館を中心に、たくさんの「感動・交流」が生まれた。これからも多くの「感動・交流」が今治市中央公民館から生まれ、その裾野が今治市全体に広がっていくことを期待したい。

実施団体：小林市・小林市教育委員会
実施時期：平成25年10月17日（木）～平成25年10月19日（土）
出演アーティスト：北島　佳奈（ヴァイオリン）　伴奏：加地　美秀子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：音楽って不思議！ふれあいコンサート
期　　日：平成25年10月17日（木）　11：45～12：30
会　　場：幸ヶ丘小学校　音楽室
参 加 者：全児童　17人

北島さんのピチカートの曲にあわせて、子どもたちが鈴やタンバリンを鳴らしたり、かけ足の動きに演奏を加える演出などで、会場のテンションは一気に上がり、楽しいアクティビティとなった。ヴァイオリンに初めて触れる子どもたちのうれしそうな表情が印象的で、最後に「ふるさと」を共演し、さわやかな雰囲気のもと小林市の「おんかつ」がスタートした。

タイトル：音楽って不思議！ふれあいコンサート
期　　日：平成25年10月17日（木）　15：05～15：50
会　　場：栗須小学校　音楽室
参 加 者：６年生　22名

アクティビティ２校目は、構成が変わる。タイトルの「音楽って不思議！」を実際に体験してもらう。詩（そら）を４人の子どもに一人一人朗読してもらい、その詩にあわせて北島さんがそれぞれ違う曲で伴奏をつけた。曲によって詩の印象が変わるのが不思議そうな様子で、「何番目のときがよかった！」などの感想が聞けた。楽器体験では、ヴァイオリンの魂柱を興味深く覗き込む姿が微笑ましかった。

タイトル：音楽って不思議！ふれあいコンサート
期　　日：平成25年10月18日（金）　10：05～10：50
会　　場：西小林小学校　音楽室
参 加 者：４年生　26名

アクティビティ２日目の最初は、リクエスト曲「風になりたい」の共演から始まった。担当の先生がボンゴを叩いてリズムで参加するなど楽しい雰囲気で進んでいった。ここでの楽器体験では実際に弾いてもらったが、初体験にしてはきれいに音が出ていることに驚いた。最後は、「ふるさと」の共演で終了した。

タイトル：音楽って不思議！ふれあいコンサート
期　　日：平成25年10月18日（金）　14：35～15：20
会　　場：野尻小学校
参 加 者：５年生　35名

アクティビティの最後では、２校目と同じ詩の朗読による演出を行ったが、子どもたちもゆっくりと、心を込めて朗読したので北島さんの演奏ととてもマッチしていた。やはり音楽があると詩のイメージが違ってくることがここでも理解してもらえたようだ。最後は「ふるさと」の共演となったが、アクティビティのラストを飾るにふさわしいとてもさわやかな歌と演奏で締めくくった。

コンサート

タイトル：北島佳奈ヴァイオリンコンサート（～心ときめく音の世界へ～）
期　　日：平成25年10月19日（土）　18：30開演
会　　場：小林市文化会館　小ホール（定員：288人）
入場者数：110人

ホールコンサートは、アクティビティからの集大成というコンセプトを前面に出した演出が見事だった。前半は、物語をイメージしながら聴かせる手法で、音楽の魅力や楽しさをアピールした。後半は、アウトリーチ先の子どもたちの夢を音楽に乗せ紹介し、来場者に元気と感動を与えた。最後は、会場全員で「ふるさと」を合唱し、名残惜しい雰囲気の中コンサートは終了した。

ホール担当者の意見・評価
社会教育課小林市文化会館　京保　信一

①　応募の動機・事業のねらい

次世代を担う子どもたちに上質なクラシック音楽や、アーティストと身近に触れ合う機会を提供し、音楽への関心・興味を引き出したい。また、アウトリーチにおける企画・制作のノウハウを本事業を通して体験することで、今後のホール活性化に繋げたいと考えた。

②　企画のポイント

未来の聴衆者を育むため、小学校をアクティビティの対象とし、早い段階で音楽の魅力・楽しさを伝えたいと思った。ふだん何気なく聴いている歌や音楽が、本来とても不思議な魅力を持っていて、大切なものであるということが子どもたちやホールコンサート来場者に伝わるような企画・演出を中心に進めていった。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

小林市らしさを出すため、また会場での一体感を演出するため、誕生したばかりの「市歌」の共演を提案したが、あえておんかつで「市歌」を取り上げる意義が薄いとして却下せざるを得なかった。また、アウトリーチ先の各小学校の要望を実現するため、最後まで学校・コーディネーター・アーティスト等と連絡を取り合い調整したが、アーティスト独自のアクティビティ構想との兼ね合いなどから、残念ながらすべてに応えることはできなかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

「市歌」の代わりに、皆が知っている「ふるさと」を共演することとした。結果的には、詩の内容やメロディから共演にはぴったりの曲で、聴いていて胸が熱くなった。特にホールコンサートでは、アウトリーチ先の子どもたちが大きな声で歌っている姿が印象に残った。

太鼓との共演のところを鈴・タンバリンでのリズム参加など、各学校からの要望には、アーティストが工夫し、内容を一部変更しながらも、各学校にふさわしいプログラムを用意した。

⑤　事業を実施しての成果

企画のコンセプトであった「音楽の大切さや楽しさを伝えたい！」という思いがアーティストにもしっかりと伝わり、アクティビティ、ホールコンサートともほぼ思うようなおんかつを実施することができた。特にアクティビティでは、下見した上でそれぞれの学校や子どもたちにふさわしいプログラムを企画していく細かいノウハウを担当コーディネーター等を通して学ぶことができた。また、アクティビティからの流れがホールコンサートをより魅力的なものへと発展させ、来場者に新鮮な音の空間を提供することができた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

企画コンセプトに加えて、小林市らしさを出したかったが、いいアイデアが浮かんでこなかった。まちの歴史や、地域資源は豊富でも、それをどうアクティビティ等と組み合わせるかが難しかった。

ホールコンサートでの集客が予想より少なかった。アウトリーチ先を小学校にしたことで、保護者や先生方の来場を期待していたが、思うように伸びなかった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

小林市は一言で言えば「スポーツのまち」であり、ホールコンサートの入りから見て、まだまだクラシック普及率が低いことを実感した。しかし、だからこその「おんかつ」実施であり、今回の経験や反省を生かし来年、再来年と継続することによって事業を浸透させ、ファン層をじわじわと拡大し、クラシック普及への足がかりにしたい。

アシスタントレポート
柿塚　拓真

①　公演実施まで

当初の小林市文化会館からの企画書では具体的に実現したいヴィジョンや企画があると言うよりは、会館担当者がプレゼンテーションを通じて感じとったアーティストの音楽性や演出の巧みさ、人柄から感銘を受けて、それを地域住民とシェアしたい、特にアクティビティでは小学生を対象として学校を訪問し年齢の早い段階でそれらを伝えたいという大きな方向性を持っている印象を受けた。そのため公演までの準備、下見、打合せの最初の段階では現地会館、アクティビティ先の学校、アーティスト、３者のやりたいこと、できること等の意向を出来得るだけ聞き出して、その後それらの現実可能性、効果、構成のバランスを考慮して具体的な公演の内容を決定していった。例えば当初は市町村合併を記念して作曲された市歌をアクティビティで共演しコンサートでも来場者と合唱するという企画があったがアクティビティ、コンサートの方向性、各学校での市歌の取扱い、浸透具合を考慮し、最終的には「故郷」の共演に落ち着いた。その結果、内容の決定が公演間近にはなったものの、３者それぞれに無理のない、かつ満足のいくアクティビティ、コンサートの内容（詳細は後述）になったと思う。

②　アクティビティ

小学校４校を対象としたアクティビティではアーティストのアイデアを中心にして、それぞれの対象学年に合わせたプログラムを組み立てた。全校児童17名を対象とした幸ヶ丘小学校ではヴァイオリンが演奏するピッチカートの音を耳で聞き、アーティストの動きや気配を目や全身で感じてタイミングを合わせて、タンバリンや鈴などの打楽器で会いの手を打つというスリリングな、少し大げさに言うと「アンサンブルの醍醐味」を体感できる共演プログラムやバルトークの民族的なダンスのリズムに合わせて体全体を使って音楽を表現するプログラムなど、どの年齢でも飽きることなく楽しめる内容だった。栗栖小学校、野尻小学校ではそれぞれ６年生、５年生を対象にアーティストが奏でる４つの音楽をバックに、まど みちお作の詩「そら」をその場で指名した４人の児童に１人づつ朗読してもらった。これはアーティストがプレゼンテーションで発表し会館担当者がその音楽と詩の関わり方に感動し是非、実施したいとしていたプログラム。詩を朗読していた児童は緊張や照れもあり音楽が詩にどの程度影響を与えるかまで感じとれたかは不明だが、人前で堂々と発表しており子供にとっては自信に結び付くいい機会だったと思われる。西小林小学校（４年生）では11月の地域の音楽祭で演奏する「風になりたい」の合唱をヴァイオリンとピアノで共演したいという先生からの希望があった。アーティストが会場である音楽室に入るなり「風になりたい」の冒頭を演奏すると。児童から驚きと何か嬉しいような歓声があがる。その後、共演となったが、この日のために一生懸命練習したと思われる歌声で聴いていて爽やかな清々しい気持ちになった。児童にとって音楽祭に向けてのさらなる練習への励みになったのではないか。また、全校共通でおこなった「故郷」の共演についても触れたい。アーティストが「故郷」の歌詞、特に３番の「志を果たして、いつの日にか帰らん」その歌詞に込められた思いを話した後、共演をおこなった。音楽室の窓から臨む霧島連山の美しい姿と小林市の名物でもある清らかな水の様子が、児童の歌う「山はあおきふるさと、水は清きふるさと」とシンクロして感動が幾倍にも増したのは私だけではないだろう。

③　コンサート

コンサート前日のアクティビティ終了後から照明、音響、立ち位置、進行の最終確認を行う。照明設備の関係からどうしてもピアノの鍵盤上に影ができてしまう。この問題は現状件下では解決されなかったが、他の会館利用者からも同じ意見が寄せられる可能性もあり今後の会館の課題とされたい。プログ

ラムについては親しみやすい名曲に加えバッハの無伴奏作品やプロコフィエフのソナタなどチャレンジグな作品が並んでおりアーティストの意気込みが感じられるものだった。特にプロコフィエフのソナタではその演奏の高いクオリティは勿論のことシンデレラのストーリーを基にしたアーティストのオリジナルの語りを織り交ぜて、ほとんどの方が初めて聞くであろうにも関わらず、その作品の世界に聴衆を巻き込んでいたのが印象的だった。このことは終演後のアンケートでも複数の方がいい意味で触れており聴衆にもしっかり伝わっている。またアクティビティ後に児童に書いてもらった将来の夢「夢アンケート」をロビーで展示するだけでなく、アーティストの演奏に合わせアクティビティの写真と共にステージ上でスクリーンに投影を行った。音楽的な要素とは違うアプローチだが子供の夢、目標にもその地域ごとに違いがありステージと客席との距離を近づけ、またコンサートの聴衆へのアクティビティの報告としても効果的だった。

④　最後に

小林市内には12校の小学校があり今年度のおんかつ４校と合わせ、支援事業で２年間かけて全小学校でアクティビティを行う意向があると伺っている。「継続は力」とは言うが、ルーティンワークにならず、その継続の中にも変化を見出して企画内容や広報体制を見直すことを今後に向けてシステムに組み入れてみてはどうだろうか。今年度のおんかつを会館職員の皆さんで非常に丁寧に準備いただいた分、特にそう思うのだが、個人の経験や能力、情熱に頼りがちなアートマネージメントではあるが、当会館は市の社会教育課直営で人事異動もあるように思われので、業務マニュアルやチェックリストを整備して、計画的によりよい文化活動を継続していただくことを期待している。

実施団体：社会福祉法人　竜泉会
実施時期：平成25年10月31日（木）～平成25年11月２日（土）
出演アーティスト：デュオ・レゾネ　（亀井　良信）（鈴木　慎崇）

アクティビティ

タイトル：ようこそ　デュオ・レゾネ
期　　日：平成25年10月31日　10：45～11：30
会　　場：龍郷町立龍南中学校　音楽室
参 加 者：２年生40人

龍郷町のアクティビティは中学校で行われた。思春期を迎える中学生にどのように二人の音楽が伝わるのか。。始まりの「クラリナード」で心をつかまれ、その後もピアノやクラリネットの分解など趣向をこらした演出に子供たちは興味津々。演奏にも静かに耳を傾けじっと聞き入る姿勢は素晴らしかった。最後に「ビリーブ」を全員で合唱し会場は一体感に包まれた。終了後、吹奏楽部の生徒にクラリネットのワンポイント指導も行われた。

タイトル：ようこそ　デュオ・レゾネ
期　　日：平成25年10月31日　15：20～16：05
会　　場：龍郷町立龍北中学校　音楽室
参 加 者：全校生徒34人

全校生徒34人の小規模校。アットホームな雰囲気の中、アクティビティが繰り広げられた。演奏の合間に、演奏家が音楽を始めたきっかけなどについてもふれ、生徒たちは興味深げに耳を傾けていた。音楽室は、窓から青い海が一望できる絶景のロケーションにあり、演奏家たちの気持ちも盛り上げてくれた。最後には奄美に古くから伝わる島唄のアレンジ曲の演奏もあり、情緒たっぷりの音色に生徒らも聞きほれた様子。

タイトル：ようこそ　デュオ・レゾネ
期　　日：平成25年11月１日　10：40～11：25
会　　場：龍郷町立赤徳中学校　音楽室
参 加 者：全校生徒40人

プロの演奏家を迎えるということで、生徒たちも最初は緊張気味の様子。レゾネの二人のトークやダンス曲をテーマにした軽快な音楽で心がほぐれていった。プログラムの終盤のプーランクのソナタでは「色」を思い浮かべながら聞くことをレゾネに提案され、生徒たちはクラシックを難しくとらえず、いろいろな聞き方で楽しめることを実感したようだ。

タイトル：ようこそ　デュオ・レゾネ
期　　日：平成25年11月１日　14：00～14：45
会　　場：鹿児島県立大島養護学校　音楽室
参 加 者：中等部24人

養護学校では、先生たちが演奏会のチケットを手作りで作成し、入口でチケットをもぎってから生徒に音楽室に入ってもらうというホールでの演奏会さながらを演出。床に座って聞く子供達の目線に合わせて、亀井さんも膝をついてクラリネットの分解を始めると子

供たちは積極的に質問に答えていた。最後に奄美の民謡「稲すり節」を館長飛び入りの太鼓にあわせて演奏すると、踊り出す子供もいて会場は賑やかな雰囲気に包まれた。

コンサート

タイトル：クラシックの扉～「デュオ・レゾネ」クラリネットとピアノの二重奏
期　　日：平成25年11月２日（土）　19：00開演
会　　場：龍郷町体育文化センターりゅうゆう館　文化ホール（定員：603人）
入場者数：332人

クラシックへの第一歩につながる扉をりゅうゆう館で開いて欲しいとの思いから、タイトルを「クラシックの扉」とする。レゾネの二人の丁寧な曲紹介などもあり、親しみやすい雰囲気の中、演奏が行われた。２部では、奄美の島唄を特別アレンジした３曲を披露。大島紬に身を包んだ演奏家が登場すると会場は大いに沸いた。演奏はとても情緒あふれるもので、なじみのある島唄をちがう角度から楽しんでいただけたと確信。

ホール担当者の意見・評価
りゅうゆう館館長　豊山　和仙

①　応募の動機・事業のねらい

「本物の音楽」「いい音楽」をりゅうゆう館から届けたい、多くの人にクラシックを気軽に楽しめる機会を設けたいとの思いから、おんかつに応募しました。また、当館でクラシックコンサートを開催するのは初めてのことで、コンサートの企画制作のノウハウを学ばせていただきたいというのも応募動機の一つです。

②　企画のポイント

奄美には古くから島唄や八月踊りといった伝統芸能が伝わり、独特の文化社会が形成されています。クラシックに対する関心や興味が薄い中で、できるだけ多くの人にクラシックコンサートに足を運んでもらい、幅広いジャンルの音楽を楽しんでいただきたいというのが今回の企画のねらい。プログラムの中に島唄をアレンジした曲の演奏を取り入れることで、聴衆に肩の力を抜いて聞いていただけるようにと、レソネの2人に３曲の島唄に取り組んでもらいました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

りゅうゆう館はスタッフが館長を含めて２人しかおらず、宣伝活動や当日の運営等に人手不足が心配されました。また、何より町民のクラシックに対する関心が低く、チケットの売捌きに苦慮しました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

当館の運営委員で、地元で中心になって音楽活動を支えている方にアドバイザーとして一緒に動いてもらい、いろいろとアドバイスを戴きながら公演までこぎつけました。また、アクティビティ・公演ともおんかつのスタッフの方々に裏方として手助けを戴いたこと大変感謝いたしております。集客については、地域柄、口コミが大きな武器となり、知人友人一人一人にコンサートの主旨を理解してもらいながらチケット販売をするという手法をとりました。アクティビティの噂を聞きつけて公演に訪れる人も多く見られ、レゾネの演奏力と地域力に助けられました。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティで子供たちに多くの感動を届けられたことが何よりの成果です。対象が中学生ということで反応が心配されましたが、レゾネの二人の趣向をこらしたプログラムと演奏により、すぐに子供たちは心を奪われ、終始じっと聞き入ってくれました。「いい音楽を間近で聞けてよかった」「クラシックを楽しいと思いました」などと感想を寄せてくれました。また、ホールでのコンサートも本格的なクラシック曲あり島唄のアレンジありと盛りだくさんで、クラシック初心者の皆さんにファンが増えたのではと期待をしています。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

当館の２人のスタッフだけでは、今後、事業を展開していくのは困難であることを改めて実感しました。今後は地元の音楽家・音楽団体・有識者との連携をさらに密にして、様々な意見を取り入れる機会を積極的に設けていかなければならないと思います。さらに、企画制作、宣伝活動等にも協力をいただける体制づくりが必要です。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

「クラシックはね・・・ちょっと難しいからね」といっていた町民の皆さんが、実際にホールでレゾネの２人のコンサートを聴いて、感激して帰っていく姿を見て、私たちも何かお役に立てたのかなと思いました。地域の文化の発信拠点という役割をさらに充実させていきたいものです。地元に根付いた文化を大切にしながら、幅広いジャンルの音楽の招致にも取り組んでいきたいと考えています。そのためにも、まずは、我々スタッフの自己研鑽と意識改革を進めていきたいと思っています。

アシスタントレポート
菊地　俊孝

龍郷町は沖縄本島と九州のほぼ中間に位置し、かつては西郷隆盛が上陸したことでも知られている。龍郷町のある奄美大島は織物の大島紬が有名で、龍郷町は大島紬の伝統的な銘柄である、「龍郷柄」の発祥の地でもある。

今回の担当者である龍郷町りゅうゆう館の豊山館長は、地元、龍郷町で普段なかなか聴くことのできないクラシックを町民に聴かせたい、子供たちにクラシックを身近に楽しんでもらい感動を味わってもらいたいとこの事業に申し込まれた。アクティビティは市内中学校を中心に実施した。島内の豊かな自然に囲まれた中学校でのアクティビティはほぼすべての音楽室がオーシャンビューという驚くべき状況、これにはアーティストを始め、スタッフも感動しきり。島の子供たちにとっては当たり前の光景ではあるが、その景色は他には代えがたいものであった。ただし、どこの音楽室にあるピアノも潮風の影響を受け調律師泣かせの状況であったのも事実である。

子供たちは中学生ながらとても素朴だったのが印象的であった。ピアノやクラリネットの音色とデュオレゾネの語り口でどんどん演奏に引き込まれていた。なかでも曲の印象を色で表現する場面では色とりどりの印象を持ったようで感受性の高さを感じた一面であった。また、一部合唱する場面もあったのだが、全員が一生懸命唄う姿に感動を覚えた。

ホールコンサートは、「クラシックの扉」と題し、クラシックを楽しんでもらいたいというホールスタッフの気持ちも実り、大勢の方がホールに来館された。コンサートの中では島に伝わる島唄の演奏も行われ、デュオ・レゾネの二人は大島紬で登場する場面もあり、会場を沸かせた。島唄を編曲することによりできたクラシック島唄はとてもノスタルジックな雰囲気のある曲で、いつも聴きなれた島唄がこのようになるのかと来場者も聴き入っていた。

今回のおんかつでは、特に特筆すべき点として、豊山館長、会館スタッフの勝さんをはじめとした職員の方々のチームワークの良さと地域のキーパーソンである岡山氏を巻き込んだ事業展開がまさに今回の成功のカギだったと思われる。このように関係者が一丸となって事業ができることはホール運営の目指すところでもあるのではないだろうか。

今後も龍郷町りゅうゆう館が地域の方々のために一丸となって事業を成功させていくことを願っている。

実施団体：沖縄市
実施時期：平成25年10月24日（木）～平成25年10月26日（土）
出演アーティスト：泊　真美子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：美里小学校ミニコンサート
期　　日：平成25年10月24日（木）　10：30～11：15
会　　場：美里小学校　音楽室
参 加 者：６年２組　36名

アーティストの自己紹介を行い「華麗なる大円舞曲」を演奏したあと、深い愛情をテーマにした「献呈」「愛の夢」を２曲連続して演奏しました。そして、ピアノ内部を使用して音を奏でる内部奏法を子どもたちとともに実施しました。子どもたちは、普段見ることのないピアノの内部に触れることにより音が出ることに驚きながらも顔を一生懸命内部に近づけ興味津津な様子でした。子どもたちをピアノの周りに集めたまま、最後に「英雄ポロネーズ」の演奏しました。間近で見る、大迫力の演奏に圧倒されていました。

タイトル：宮里小学校ミニコンサート
期　　日：平成25年10月24日（木）　14：05～14：50
会　　場：宮里小学校　音楽室
参 加 者：５年２組　38名

アクティビティの基本的な構成は美里小学校と同様の内容でしたが、合唱コンクールを間近に控えていたこともあり、内部奏法の実施に代わり､合唱曲「怪獣のバラード」による共演を実施しました。子どもたちの合唱にアーティストも踊りながら参加し「体を使って思いっきり歌って」と呼び掛けると、はじめは恥ずかしがっていた子どもたちも次第に手をたたいたり、体を動かしたりと自分なりに体を使って歌を表現していました。

タイトル：中の町小学校ミニコンサート
期　　日：平成25年10月25日（金）　10：35～11：20
会　　場：中の町小学校　音楽室
参 加 者：６年２組　39名

アクティビティの構成は美里小学校と同様の内容でした。はじめは緊張している様子だった子どもたちもアーティストが関西弁で話し始めると一気に緊張が解け、アーティストとの距離が縮まり積極的に参加するようになりました。翌日、児童から届けられた感想文には、「素晴らしい演奏に感動した」などに加え、「関西弁を教えて下さい」という感想が多くあり、音楽はもちろんアーティスト自身の魅力も大いに伝わっていたと感じました。

タイトル：比屋根小学校ミニコンサート
期　　日：平成25年10月25日（金）　13：55～14：40
会　　場：比屋根小学校　音楽室
参 加 者：６年２組　39名

アクティビティの構成は美里小学校、中の町小学校と同様の内容でした。内部奏法を実施するため、事前にピアノの屋根を外してい

たことから、普段と様子の違うピアノを見て不思議に感じている子どもたちが印象的でした。内部奏法がはじまると一斉にピアノの周りに集まり、食い入る様にピアノ内部を見ていました。４校目のアクティビティとなり、アーティストが落ち着いていたことに加え、子どもたちもとても元気があったことから、終始笑いの絶えない良い雰囲気のなか終了しました。

コンサート

タイトル：泊真美子 Piano World ～ピアノ一台で放つ多彩な世界～
期　　日：平成25年10月26日（土）　15：00開演
会　　場：沖縄市民小劇場あしびなー　ホール（定員：290人）
入場者数：124人

２部構成の本格的なクラシック演奏会としました。合間のＭＣでは、アーティストの出身地である豊中市が沖縄市の兄弟都市であるという話もしていただき、豊中市と沖縄市のこれまでの深い繋がりについても周知できたと思います。公演終了後のサイン会では、アクティビティに参加した多くの子どもたちをはじめ長蛇の列となり、約1時間サイン会をしていただきました。公演終了後でとてもお疲れだった思いますが、最後まで笑顔で対応して下さり、子どもたちが大喜びしている姿を見ることができとても感動的でした。

ホール担当者の意見・評価
経済文化部文化観光課　當真　大司

①　応募の動機・事業のねらい

沖縄市は、15歳未満の人口の割合が高い市（平成17年国勢調査：20.5％）です。このような特性を持つ沖縄市では、こどもたちが夢にむかって元気にたくましく育つ環境をつくることを目的として、「こどものまち」を宣言しています。

今回の事業では、生の音楽に触れる機会の少ないこどもたちにとって、かけがえのない経験と感動を与え、音楽に興味をもってもらうきっかけにしたいと考えました

②　企画のポイント

上記の応募動機から小学校を対象としたアクティビティを実施しました。プロのアーティストによる演奏を身近に体験させてあげることにより、普段の授業では触れることができないクラシック音楽の魅力を存分に感じてもらえるよう心がけました。また、アクティビティに参加した子どもたちにホールでの演奏も聞いてもらい、ホールで聞く違いを感じ、ホールに興味を持ってもらうきっかけにしてもらいたいと思いました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

沖縄市はあまりクラシックに馴染みのない地域だったので、集客が一番苦労しました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

市内の公共施設をはじめ人がよく集まるところにチラシを設置したり、音楽教室などに直接足を運び周知を図りました。また、近隣のホールで行われる催しものの際にチラシの折り込み等を行いました。ただ、他の事業に追われ、告知のスタート時期が遅れてしまったこともあり十分な広報ができなかったことが残念です。

⑤　事業を実施しての成果

ただ単純にコンサートを開催しただけでは、来場することがなかったと思われる方々に多く来ていただき、ホールで聞くクラシックの魅力を伝えることができたことが一番の成果だと思います。アクティビティに参加した多くの子どもたちがもう一度アーティストの演奏を見たい、アーティストにもう一度会いたいという思いから来場してくれました。アーティストの想いがこもった演奏が心を動かした瞬間であり、「これぞおんかつ」ということを実感させてくれた感動的な場面でした。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

コンサート当日のアンケートからは、「素晴らしい演奏会でした」「ピアノを通して彼女の伝えたいメッセージが心に響きました」などとても感動したという感想が多く寄せられていましたが、「本当に良い演奏会なのでもっと多くの人に聞いてもらいたい。もったいない」との意見もあったことから、次回からは広報活動を強化する必要があると感じました。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業でアウトリーチの重要性を感じました。どのジャンルの事業にも言えることだと思いますが、いくら広報などをして周知を図っても、やはりそのジャンルに興味がない方にはなかなか来てもらえないということがあると思います。今回、アウトリーチをきっかけに来場してくれた子どもたちや保護者の方々は本当に満足しており、クラシックの魅力、そしてホールで鑑賞する良さを感じてもらえました。アウトリーチのような具体的な働きかけがとても有効であると今回の事業によって知ることができたので、これからもこのような事業を継続していく必要があると実感しました。

アシスタントレポート
髙井　はるか

沖縄市は本島の中央部に位置し、県内では那覇市に次いで２番目に人口が多い市である。昭和49年にコザ市と美里村が合併し沖縄市となったが、30年経つ今尚、旧コザ市域はコザの愛称で親しまれている。北部は多くが米軍施設・区域となっており、西部は戦後、基地の門前町として急速な発展を遂げてきた地域、また東部では近年市街地化が進み、人口が増加しているという。独自の文化を持つ沖縄県の中でも、国際色豊かであり、独特の雰囲気を持っている。

おんかつの実施にあたり、担当者の當真さんは様々な特性の中から、「こどものまち」という点に着目した。15歳未満の人口の割合が高い沖縄市では、子どもたちが夢に向かってたくましく育つ環境をつくることを目的として「こどものまち宣言」をしているそうだ。今回のおんかつを契機に、生の音楽に触れる機会の少ない子どもたちにプロのアーティストの音楽を届け、かけがえのない経験と感動を与えたい、クラシック音楽に興味をもってほしいということから、アクティビティはすべて小学校での実施とした。

市内４つの小学校で行なったアクティビティは、華やかなショパンの大円舞曲からはじまり、叙情的なリストの作品など、泊さんらしい感情豊かな曲目が組まれ、<ピアノであそぼう！>と題した内部奏法体験のプログラムも取り入れた。子どもたち数人に「指で弦を押さえる」、「弦をはじく」、「ペダルをふむ」などの役割を与え、泊さんの声かけに合わせて実際に演奏した。ピアノから放たれる打楽器のような、あるいは金属のような不思議な響きに子どもたちは目を輝かせていた。音と体験を通して、子どもたちにピアノの幅広い魅力を伝えた大変面白い取り組みであったように思われる。

また、ある小学校では翌日に合唱コンクールを控えているという子どもたちに課題曲を使ったアプローチを行なった。「体の奥からビートを感じて、音楽を楽しんでほしい」という泊さんの思いから、子どもたちと一緒にからだを動かし、踊りながら「怪獣のバラード」を歌った。子どもたちのきらきらした笑顔に答えるように泊さんも思わず笑顔になるという場面がみられ、等身大の人と人のふれ合い、暖かさがにじみ出たアクティビティとなった。

ホールコンサートではバレエ音楽にはじまり、ショパンやリストなどロマン派の作品、日本歌曲などが様々な曲が選ばれた。泊さんのうたごころや音色の色彩感が存分に表現された内容であった。会場である「沖縄市民小劇場あしびなー」は、290席という小さなつくりであるが、そのコンパクトさが一層、アットホームな良い雰囲気をつくりだしていた。当日配布パンフレットには、４校のアクティビティの様子が掲載され、各校からの感想文や写真などもロビーに展示された。アクティビティ先の子どもたちもたくさん来場し、２時間前からチケットを握りしめて開場を待っている男の子たち、最前列に陣取り、泊さんの登場を待つ子どもたち、サイン会に並ぶ子どもたちの長蛇の列などの光景がアクティビティとホールコンサートの繋がりを色濃く映し出していたように思われる。

今回、偶然にも沖縄市と泊さんの出身地である大阪府豊中市は、「兄弟都市」という縁で結ばれていた。姉妹都市とはよく言うが、兄弟都市なのは沖縄の方言「いちゃりばちょーでー（一度出会ったら皆兄弟の意）」に由来しているという。行く先々で、豊中市の話がでたり、（泊さんもこんなにも豊中の話をするのは初めてだったそう）偶然、沖縄市に滞在していた豊中市の方が訪問してくださったりと、泊さんにとっても故郷を感じる思い入れのあるおんかつになったのではないかと思う。今回のおんかつが、地域と地域の縁を更に深く結びつけることにも役立ったのなら、とても素敵なことだと思う。兄弟都市での連携おんかつ、そんな可能性もあるのかもしれない。

沖縄市民は、クラシック音楽に馴染みが薄く、安価でもなかなか出向くひとが少ないのが現状だという。その中でソリストとして泊さんを招き、子どもたちへアウトリーチを行ない、ピアノのソロコンサートを実施したことは、大きな成果であったと思う。コンサートについては集客の面でも、大変に苦

労されたと思うが、来てくださった方々はとても楽しんでくださり、また感動してくださったようである。必要なのはきっかけであると実感した。沖縄県はおんかつを実施している市町村も多いため、協力関係を築くことが出来れば大きなネットワークとなっていくことが期待される。時間はかかると思うが、ぜひ本事業のような取り組みを続けて市民の皆さんがクラシック音楽に触れる場を提供していってほしい。これからの沖縄市に、愛とエールをこめて。

第３部
平成25年度公共ホール音楽活性化事業コーディネーターレポート

チーフコーディネーターレポート
小澤　櫻作

『アクティビティの企画創りで悩んだら。。。』
紀の川市公演で見つけたヒント。～原点を大切に～

2013年10月。厳しかった残暑も過ぎ、秋の訪れをようやく感じはじめた和歌山県紀の川市（粉河ふるさとセンター)。派遣アーティストは、クラリネットの亀井良信さんとピアノの鈴木慎崇さんが結成しているデュオ・レゾネ。古典から現代曲まで幅広いレパートリーを持つ本格的なアンサンブルだ。そして､紀の川市でのおんかつ事業を担当したのはセンター長の小谷さん｡その小谷さんが企画したアクティビティの内容は、

① 未就学児の親子を対象としたコンサート（ホールの舞台上で開催）
② 農家地域の住民を対象とした公民館コンサート
③ 高齢者福祉施設でのミニコンサート
④ 母子生活支援施設でのミニコンサート

の４つで、毎回対象者が違うバラエティ豊かな内容。これは、小谷さんが以前に地域創造の別事業に参加した際に小学校へのアウトリーチコンサートを集中的に行ったため、今回は逆に小学校以外の可能性を考えてみたいと思ったことが切欠とのこと。期せずして、４つのアクティビティに学校へのアウトリーチコンサートが１つも含まれないという近年のおんかつ事業のなかでは非常に珍しい公演となりました。

学校へのアウトリーチコンサートについては、取り組んだことのない公共ホールを探す方が難しいのではないかと言われるほど、ある意味、爆発的とも言える「広がり」と「定着」が進んでいますし、おんかつ事業に参加する時にも是非とも取り組んでみたいと考えるアクティビティのひとつです。
しかし、地域における公共ホールの役割について考えながら、また、４本という限られた枠組みのなかでアクティビティを企画する時に『４つの全てが学校へのアウトリーチコンサートで良いのか？』と疑問を持つ方も多く、一方で『学校以外のアイデアが出てこない。』という方も多いとお聞きします。

それでは、おんかつ事業のアクティビティの企画創りで悩んでいる方のために、アクティビティをどのような方向性をもって企画をすれば良いのか？について、紀の川市公演の事例をヒントに考えてみたいと思います。

まずは、学校へのアウトリーチコンサートについて考えてみたいと思います。
学校へのアウトリーチコンサートはおんかつ事業のなかで最も多く行われているアクティビティで、芸術が持つ力を通じて、子ども達の創造力やコミュニケーション力などを育んでいくことを目標にプログラムを組み立てています。そうしたことは、公共ホールにとっても大切な役割であって、それらを実現するために学校や教育委員会との連携を深め、学校へのアウトリーチコンサートを充実させていくことは重要なことですよね。
ここで気を付けたいのは、おんかつ事業での学校アウトリーチの特徴としては、「音楽」を届けるだけではなく、音楽家という「ひと」を届けている。ということで、残念ながらそれを忘れてしまう方も

多いようです。
「子どもと音楽家」「“ひと”と“ひと”」の出会いを届けるためには、少人数・クラス単位の確保が重要となります。

では、学校へのアウトリーチコンサート以外の企画を考えるのにはどうしたら良いでしょう？紀の川市公演（小谷さんとデュオ・レゾネ（亀井さん、鈴木さん）をモデルにして考えてみましょう。

【紀の川市公演のアクティビティとその様子 】

○　未就学児の親子を対象としたコンサート
・ホールの舞台上に畳を敷いて客席をつくって実施しました。
・子育てサークルの運営者の方にご協力いただきました。
・プログラムのなかでは、「(未就学の）子どもだけでなく大人（お母さん）にも楽しんでもらいたい。」という演奏家の思いがポイントだと思いました。

○　農家地域の住民を対象とした公民館コンサート
・下見の時にその地域のキーマンとなる方のところにご挨拶に行き、ゆっくりお話をしました。桃が美味しかったです。
・キーマンの方に「面白い」「協力してやろうじゃないか！」と思ってもらわないと何も始まりません。
・本番は、アットホームで心温まるコンサートとなりました。

○　高齢者福祉施設でのミニコンサート
・ここでも下見時に、施設のスタッフの方とゆっくりお話をしました。
・ピアノの配置など設営面での課題はありましたが、内容についてはご理解をいただき、比較的スムースに進みました。

○　母子生活支援施設でのミニコンサート
・こうした施設でのコンサートについては、演奏家もコーディネーターも経験が少なくとても不安でしたが、施設長や小谷さんなどからのアドバイス、サポートをいただき、何とか本番を向かえることができました。

【 ポイントだと感じたこと（紀の川市公演が上手くいったポイント）】

○　地域の“人”“産業”“施設”を知っていた。
・小谷さんは生涯学習のセクションに長く在籍されていたそうで「ここのホールにはあの地区の人があまり来ていない」とか「あの地区はこの時期が忙しい」など、地域の“人”や“産業”を良く知っていて、加えて「あそこの施設には音楽が届いていない」など、地域の“施設”についてもよく知っておられました。

○　「伝えたいこと」が明確。

・小谷さんはホールの専門家ではありませんので、コンサートの企画書を書いたり、アーティストにねらいや目的を言葉で伝えることについては、あまり得意ではなさそうでした。しかし、下見から本番と共に事業を運営していくなかで、小谷さんのなかにある“地域への思い”“この事業のねらい”というのは、確実にアーティストに伝わっていたように思います。

○　アーティストは、人の熱い思いに突き動かされる。

・デュオ・レゾネのお二人はとても誠実なアーティスト。小谷さんの熱意や観客の思いに突き動かされ、スタッフが心配になるくらいに、毎回、全力投球でした。そして、そうした真剣に取り組むアーティストの姿を見て、小谷さんも観客も元気になる。とても良い好循環だと思いました。

近年の公共ホールでは、アウトリーチ活動が広がり、定着しはじめています。しかし、「地域」をテーマとした活動については、公共ホールの重要な役割のひとつと言われながらも、実際の活動となると一部の先進的な公共ホールでは行われているようですが、残念ながら学校へのアウトリーチコンサートのように全国の公共ホールに広がり、定着したとは思えません。

地域でのアクティビティを企画するためには、企画力（アイデア）や地域を知る、キーマン探しなど、学校へのアウトリーチコンサートより、はるかに多い作業が求められることから、敬遠されることが多いと言われています。しかし、「企画力（アイデア）、地域を知る、キーマン探し」はまさに良い公共ホールを創るために必要不可欠な重要なキーワードです。

アイデアが出てこない。誰を尋ねて良いのかも分からない。など、不安に思うことは多いとは思いますが、熱意を持って地域へ一歩を踏み出せば、アイデアも、地域の人も、アーティストも、自然について来ると思います。勇気ある第一歩として、おんかつ事業を活用されてみてはいかがでしょうか？

コーディネーターレポート
丹羽　徹

地域資源の効果的な活かし方

今年度コーディネーターとして担当させていただいた二つの地域、それぞれ特色ある企画を立案されていたが、ある意味対照的と感じる部分がありつつも、最終的には当初の思惑以上の結果となった二つの「おんかつ」について触れてみたいと思います。両地域の共通点は、それぞれ異なる地域資源をいかに有効活用するかといったもの。「おんかつ」では各地域の資源やコンセプトを活かして、アウトリーチとコンサートを有機的に連携させる事がひとつの課題である事は言うまでもありません。

まずは鹿児島県龍郷町。企画のポイントは地域に根付く伝統芸能「島唄」をいかに今回の企画にからめてゆくか。コーディネーターとして常に意識している事は、その企画に必然性があるかである。偶然にも以前、奄美市の「おんかつ」の際に同様の企画案が出され、何故「島唄」なのか？をしつこく尋ねた事が思い出された。伝統芸能や民謡等とのコラボレーションの実現は非常に難しさを要する事は前年度レポートでも触れたが、要は、担当者がコラボレーションを現実的にイメージ出来ているか、そのイメージを双方の演奏者に対して明確に説明できるか、実現に向けた協力者がいるかの三つである。下見の際に実際の島唄を聴くと共に、企画の必然性、島歌共演者の情報、楽曲案等を検討し、出した方向性は、共演ではなくクラシック版にアレンジした島唄をプログラミングするもの。アーティストからは企画趣旨や島唄には一定の理解は得られたものの、島唄の良さである独特の響きが、クラシックの響きとあまりにも違う事、無理な編曲をしたクラシック版の島唄が果たして地域の人々に受け入れられるかである。島唄は奄美の方言による歌詞を三味線を伴奏にして、こぶしをきかせて独特の歌唱法で表現するもので、日常生活の中で小さい頃から耳慣れているとともにその響きは哀愁漂うものである。原曲の良さを壊してまで無理なプログラミングを行う必要性を問われれば答えは決まっている。龍郷町での本公演初日、アーティスト交流会は地元の民謡酒場で少女達による活きた島唄をアーティストに鑑賞してもらう事から始まる。そこで使われていた島唄の太鼓がこの後の鍵となる。アウトリーチ初日に訪問した学校で同様の太鼓が音楽室にあるのをアーティストが発見し、その太鼓を担当者の館長が勢い良く叩き、話はトントン拍子に進み、コンサートでは館長がゲスト奏者となってアーティストと共に、クラシック版島唄は見事に融合して多くの観客に受け入れられた。地域に活きている資源はその空間に身を置き、直に触れ、体現する事に勝るものは無いと改めて認識した瞬間でもあった。

続いて岐阜県大垣市。企画のポイントは、地元で盛んに活動している合唱サークルをどのように企画と結びつけるか。派遣アーティストはピアニスト。当初は複数の合唱団とピアニストとの共演企画であり、100名近い複数の合唱団のピアノ伴奏を行うようなコンサートスタイルは、リサイタル形式を望むピアニストが納得するであろうか。そもそも何故「複数」の合唱団でなければならないのか等、担当者、コーディネーター、アーティスト（マネジメント）の三者で喧々諤々の議論が重ねられた。私の思うところ、よく合唱や吹奏楽が盛んだと多くの地域で耳にするが、本当に盛んなのだろうかと疑問に思う時がよくある。日本では合唱団と吹奏楽に親しむ人口が世界的にも非常に多いからだ。本来、サークル活動とは自分達が楽しむ為に活動している事は言うまでもない。以前このタイプはプロの芸術家の演奏活動にあまり足を運ばないと言う調査結果を聴いた事がある。このタイプはむしろ表現する楽しさしか知らず、鑑賞すること本来の楽しさを知らないのではないかとも思っている。ならば尚更、音楽の持つ本質的な感動体験をしてもらうチャンスとして、身近にアーティストの息づかいか感じられるアウトリーチにこそその可能性が秘められているのではないかと。しかし、その後は共演楽曲の選定等でも意見が別れた事もあり、一抹の不安も抱えつつも大垣公演に望んだ。初日のアウトリーチを経て二日目は共演曲の練習、三日目はリハーサル、そしてコンサートと進むうちに感じられた事は、同じ音楽を愛する者

同士の空気感の変化であった。この「同士」のような関係性が相手に興味を持ち、身近な存在として受け入れ、やがては良き理解者・支援者になるのだと。この変化は良い意味で私の不安を裏切ったものだった。

上記二つの資源、でもこれは何処の地域にでもあるものではないのだろうか。今回感じた事は、この資源を効果的に活かしたのは全て「人」にあったからなのではと再認識した「おんかつ」だった。

コーディネーターレポート
花田　和加子

伝えるということ

2013年度の公共ホール音楽活性化事業で私が担当させていただいた３ホール―大空町（北海道）、中野（東京都）、多可町（兵庫）―に共通した最大の課題は、最終日のホールコンサートをどう宣伝するか―どうしたら、コンサートの面白さ・楽しさを地元の方々に伝えられるか―でした。

コンサートの内容はアーティストと共に練りに練ったもので、当日ホールに足を運んでいただけさえすれば、必ずや楽しんでもらえるものを作り上げることができました。しかしながら、それをどうしたら地元の人々に伝えられるか、どうしたら「これは面白そう！」と思ってチケットを購入し、当日ホールに来てくれるか？その方法を見つけ、実践することが最も難しい問題でした。

地域創造の登録アーティストたちは、優れた音楽性と技術を兼ね備えた素晴らしい演奏家たちです。しかし、皆キャリアをスタートさせたばかりですので、メディアへの露出はほとんど無いに等しい状態です。テレビ等に出演しているアーティストであれば、「あ、あの人がここのホールに来るんだ」ということで、（コンサートの内容はさておき）その“著名なアーティスト”に会うためにホールに来てくれるお客様がたくさんいらっしゃいます。では、それが無名のアーティストの場合、どうやってコンサートを宣伝するか。

大空町でキーワードとなったのは、“話題にすること”でした。素晴らしい演奏家が大空町にきてくれるということを町の人々の話題にのぼらせることで、コンサートの情報を広めていくという方法でした。新聞と一緒に配られる瓦版に、コンサート開催日に向けて定期的にアーティストのインタビュー記事を取り上げていただくという案も出ましたが（これは、諸事情により実現できませんでしたが）、最終的に選ばれた方法では、アーティストが通常アクティビティ先の子供たちを対象に行ってきた「夢アンケート（子供たちに将来の夢を書いてもらい、ホールコンサートの時に発表して来場者と夢を共有するというもの）」を大人にまで対象を広げ、町役場や図書館といった町の人が集まる場所にコーナーを設けてアンケートに参加してもらったり、ホールのボランティア・スタッフさんにアンケート用紙を持ち帰ってもらい、近所の方々に事情を説明して書いていただいたりしました。

この「夢アンケート」の実施には、もう一つ理由がありました。それは、ホールと町民の皆さんとの関係の再構築というものです。大空町では「花と音楽の街」のテーマのもと、音楽祭や夏期講習などが盛んに行われていた時期がありましたが、いつしかこれらはその時期に道外から来た人たち（音楽祭や講習会の参加者たち）のためのものであり、町民には関係ないものとなってしまい、ホールでの催しものに関心を持ってもらえないようになっていました。それを、「夢アンケート」への協力を呼びかけると同時に、ホールで行われるコンサートも町民の皆さんのために開催されるものであることを印象付けたいというホール担当者のねらいもありました。

結果としては、残念ながら期待した通りの成果を得られたとはいえませんでした。一番の原因は時間が足りず、皆さんの間にアンケートを浸透させることができなかったことです。とはいえ、それでもコンサート当日には予想を上回る数の集客があり、アンケート結果の発表も好評をもって受け入れていただけたことは幸いでした。

一方の多可町は、ホールが普段提供している催し物のなかにはあまりない、町民の皆さんが触れる機会の少ない“本格的なクラシックコンサート”を届けたいというのがねらいでした。そのため、コンサートの曲目も妥協のない王道の作品や現代作品を取り入れた挑戦的なものにし、チラシも大人の雰囲気のものにしました。はるばる近隣のホールのクラシックコンサートに挟み込みを依頼するなど、町の“クラシック好き”“コンサート好き”な方々がいらっしゃりそうなところにターゲットを絞って宣伝活動を

しました。しかしながら、子供向けのコンサートやファミリーコンサート、もしくは“クラシック入門編”的な趣旨のコンサートと違い、本格的なクラシックコンサートは、“本格的”であるが故の広報の難しさを痛感する結果になりました。最後まで「敷居が高い」という皆さんの先入観を払拭することができなかったからです。案として、地元の播州織を演奏家に着用してもらうことで親近感を持ってもらうことも考えましたが、広報を巡って意見がまとまらず、結果としてうまく活かすことができませんでした。

東京中野区のなかのゼロホールは、大空町や多可町とは全く違った環境にあるために、全く違った宣伝のアプローチを考える必要がありました。なにしろ東京オペラシティ、東京都芸術劇場、NHKホール、紀尾井ホール、杉並公会堂などなど、クラシック専門のホールが近隣に目白押しの中で、どう地元の人々にアピールしていくか、そして比較的よくチケットが売れる子供向けのコンサートとは違い、一つレベルアップした内容のコンサートの面白さをどう伝えるか。ここで実験したのは、ホールの担当者の“顔”が見える宣伝でした。つまり、“××さんお薦めのコンサート”といった形でホールの担当者の名前や顔を表に出すことで、ホール担当者とお客様の“人と人のつながり”をつくることで、「あの人のお薦めなら聴きにいってみよう」と思ってもらえる状況を作りだすということでした。これは１回や２回のコンサートで築けるものではなく年月のかかるものですが、大都会だからこそ個人と個人のつながりがより必要なのではないかと考えた結果です。都内では実際に「××さんの企画したコンサートだから」ということで何百人というホール友の会の会員数につながっていったケースがあります。今回のような試みが実際のチケット数につながっていくのは何年も先の話でしょうが、最初の一石がなければ「つながり」は生まれません。その意味で、意義のある実験だったと思っています。

今後の課題として、やはりチラシやポスターといった“紙媒体”の宣伝だけでなく、今の時代にあったほかのさまざまなツールを利用することが必要と感じました。ホールのホームページが市や町のホームページの一部であったりすると、掲載できる内容や容量に制限がかかることが多いですが、せっかくホームページがある以上、インタビューや演奏シーンなどの動画を掲載するなど、チラシでは伝えきれない情報を、サイトを活用することによって伝えられるようになると思います。あるアーティストは、コンサートの２－３ヶ月前から毎週定期的にホールのホームページにメッセージやプログラムで取り上げる作品についてのコメントを載せていました。これは“話題作り”の一つの方法でもありますし、読んだお客さんはコンサートまでにプログラムの予習ができるという一石二鳥の効果がありました。

また、ホールのサイトに制限がある場合、ホール担当者が個人的にtwitterを活用しているケースもあります。とあるホールからの依頼で海外からのアーティストを出迎えに空港に行った際に、「到着ゲートから出てきた瞬間のアーティストの写真を撮って送って下さい」と頼まれたこともありました。その写真はものの数分後には、「××さん到着です！」というコメントと共にtwitterに挙げられ、瞬時に何百というフォロワーに広まりました。その後も、リハーサル時の風景や休憩時にくつろいでいる写真などを日々挙げていき（もちろん、アーティストの許可を得てのことですが）、アーティストのいろいろな側面を披露しつつコンサートに向けて気分を盛り上げていくのに役立てていました。

さらには、チラシやポスターのデザイン自体にもさらなる工夫の余地があると思います。どうもクラシックコンサートのチラシは一つのパターンに陥りやすい印象を受けますが、何をアピールするのか、したいのかによってコンサートの雰囲気は大きく違ってきますし、登場するアーティストのキャラクターによってもアピールするポイントが違ってくると思います。印刷業者やデザイナーにお任せにしてしまうのではなく、こちらから少しでも具体的な指示が出せるよう、日頃からいろいろなチラシ（クラシックコンサートに限らず、演劇や美術展も含め）を見比べてみることは意味のあることだと思いますし、そうすることによって様々なアイデアが浮かんでくるのではないでしょうか？

コーディネーターレポート
山本　若子

継続は力なり

第２次ベビーブーム生まれの私。就活、婚活は知っているけれど、今では転活、妊活、はたまた離活、終活…巷にはいろんな活が溢れているようである。

さて音活。字面は似ているしこれらに類するものなのかと思いきや、そうではない。音活の正式名称を改めて見てみると「公共ホール音楽活性化事業」とある。音活の活は、活動の活ではなく活性化の活であることに気付ける。私はここに、音活を築いてこられた先輩方の事業に対する考えを感じずにはいられない。

音活経験者誰もが「良い事業だ」と思われていることだろう。なぜなら、一流のアーティストが数十人でいっぱいになる教室くらいの空間で、息づかいがダイレクトに伝わり手を伸ばせば触れられるような距離で全霊の演奏を行った時に、子どもたちがアーティストが発するエネルギーに触発され未来への活力をみなぎらせていく現場に立ち会い、この上ない喜びと充足感を経験できるからである。また、厳しい時代を生き抜いてこられた人生の先輩方に、高齢者施設等でひとときの楽しい時間を提供できたり、未就学児の無垢で自由な行動に忘れてしまっていたものを呼び起こされたりと、現場だからこそ味わえる刺激や感動が目白押しの事業なのである。そして、これらの感情を味わわせてくれた人々がコンサート会場にかけつけてくれた時の喜びは、担当者冥利につきるはずであるし、コンサートが単に音楽を鑑賞する場を提供するだけではなく、人と人との結びつきを生み出せる可能性を含んでいることを実感させてくれるからである。

このように濃密な事業だからこそ、終了後しばらくは音活ロス症候群に陥ることもしばしば。長期的に取り組もうとしている担当者は次年度から始まる音活支援に申し込んだり、新たなアクティビティ先の模索をしたりとロス症をエネルギーに変えて動き出されることもあるが、単発の事業として位置づけている担当者には事業の終了によるプレッシャーからの解放とともに、良き思い出として引き出しに片付けられることもある。

ここで音活に込められているものに思いをめぐらしていただきたい。冒頭にもあるとおり、音活の活は活性化の活なのである。単発で終わることは活動止まりで、残念ながら音活の本来の目標である活性化に達するには及ばず、と私は思う。就職にしろ結婚にしろ、ゴールとしている結果に到達できれば終了であるが、活性化は活動を絶えること無く続けていくことで実現されるものであり、困ったことにというべきか幸せなことと言うべきか…、終了の地点がない。もし終了を設定するとすればそれは培ったものとお別れするということであろう。

音活が始まって16年。時勢は変化しているにも関わらず今もなお多くの公共ホールにこの事業が求められ継続されている理由として、実績を伴う歳月が新たな需要を創出していること、事業モデルとして確立されていることが挙げられると思う。そして、実施後に気付けることとして、普遍的に必要なものが内包されていることを特筆しておきたい。その普遍的なものとは、人と人との結びつきであり、現場を経験したからこそ持てる新たな価値観である。

想像して欲しい。アーティストに触発された子どもたちが未来に向けて努力する姿を。人からもらったエネルギーが自身のエネルギーになっていくことを。つまり、音活は音楽を普及するだけの事業ではなく、音楽を用いた人づくりの事業なのである。

始める前から継続について考えることは難しいかも知れない。しかし始めれば継続の必要性が見えてくるはずである。

コーディネーターレポート
赤木　舞

インタラクティブな「おんかつ」を目指して

公共ホール音楽活性化事業（通称「おんかつ」）は既に15年の実績があり、アーティストと公共ホールとのつながり、ノウハウの蓄積もされてきている。事業がスタートした当初より「アウトリーチ」という言葉が全国で周知されるようになり、アウトリーチ活動は点から面へと発展してきた。そのような状況のなか、近年の「おんかつ」においてはインタラクティブ（interactive：双方向型、対話型）という概念が重要だと感じる。「おんかつ」のアクティビティがより多くのインタラクティブな要素を含むようになっている点も挙げられるが、ここでは活動内容についてではなく、「おんかつ」にかかわる人々の関係について論及したい。双方向な関係が求められるのは、アーティストと聴衆、アーティストと「おんかつ」担当者、担当者とコーディネーターや地域創造のスタッフ、担当者とアクティビティ先の関係者、そしてホールの職員同士など、「おんかつ」にかかわる人々すべて、といえるだろう。

パソコン、インターネット通信、携帯電話、スマートフォン等をはじめとした技術の発展にともない、情報伝達の手段が格段に発展した。これらの機器と通信環境があれば、距離や情報量にかかわらずスムーズにやり取りができる状況におかれ、より密に情報共有ができ、物事を迅速にすすめることができると考えられる。しかしながら、自分から一方的にメールを送っただけでコミュニケーションが取れたつもりになっていたり、受信したメールを読んだだけで（返信をすることなく）自己完結してしまっていることはないだろうか。アクティビティの内容およびそのための準備事項、ホール公演のコンセプト等を検討する際に、担当者とコーディネーター、アーティストとのやり取りが肝要になる場面があるが、連絡手段が便利になった一方で、業務スピードと量に追われ、大切な場面でのコミュニケーションが失われているのではないかと危惧される。

平成25年度に担当した宮崎県小林市と和歌山県橋本市は、どちらも「インタラクティブ」がキーワードとなる事業であった。両地域とも、アーティストはヴァイオリニストの北島佳奈さん、アクティビティ先4カ所は全て小学校で、枠組みが類似した事業であったが、アクティビティでのアプローチ方法やホール公演の内容は、それぞれの「おんかつ」への想いと地域の特長があらわれたものとなった。

小林市の担当者の方は、４月に実施した研修会で、北島さんのプレゼンテーションから双方向的な可能性を強く感じ、迷うことなく彼女を第一希望として挙げた。その後、アクティビティ先との交渉、事前研修等を経て10月に本番をむかえたが、我々スタッフ側とのやり取りが大変スムーズで、建設的に事業が進められた。また、関係者が一丸となって取り組んだという感覚があった。なぜそう感じたのかを振り返ってみると、担当者のおんかつに対するイメージと目的が明確であったこともあるが、随所にインタラクティブなやり取りがされていたことが大きなポイントであった。重要な確認事項がある際、早急な決定が必要とされる際、コンセプトについて考える際などには、担当者はメールではなく必ず電話をかけてこられた。メールでは伝わりづらい想いや考えは、直接対話形式で共有し、問題解決するのが一番であると考えられたのであろう。また、コーディネーターから連絡を入れた際には、担当者以外の職員もある程度対応ができ、日頃からホール事務局内で情報共有がされていた。急を要さない連絡・報告事項は、当然のことながらメールでやり取りしたが、意見交換を要する事項については電話で話し合うことが多かった。小林市の事例では、メールによる連絡・報告のやり取りと、電話によるリアルタイムなやり取りが非常にうまく使い分けられていた。その結果、担当者・アーティスト・スタッフが皆同じ方向をめざして「おんかつ」を創ることができたのではないかと考えられる。

橋本市の場合は、北島さんが同じ和歌山県出身であることから、地域とアーティストの距離が自然と

近く感じられる「おんかつ」だった。実際のところは、橋本市のホール職員はごく少数であるため、通常のホール業務と「おんかつ」を同時にすすめていく大変さは想像を越えるものであった。職員数の状況からも、細かい事務作業にまで手が回らないという場面もあったようだ。しかしながら、ホール職員のチームワークは強力であったため、現場での動きはむしろ迅速であると感じた。さらに、事前に北島さんが橋本市を訪れ担当者と直接話ができたことが、事業をスムーズに進められた大きな要因になったと考えられる。橋本市の場合、ホール側の考え（アクティビティ先の子どもたちに絵を描いてもらいたい）と、アーティスト側の考え（子どもたちに夢アンケートをやりたい）を出し合い接点を見いだした結果、子どもたちに夢をテーマとした絵を描いてもらい、それをホール公演でスクリーンに映しながら演奏することが実現した。一方的に自分のアイデアを提案するのではなく、相手の意見を取り入れつつアイデアを構築する――つまりインタラクティブなやり取りによって、最善かつオリジナリティのある結果がうまれたのである。

今回の２つの事例を通して、事業を創りあげていくには「人と人の直接的なつながり」と、お互いの「インタラクティブな関係」が大切であると痛感した。これは「おんかつ」のみならず、あらゆる芸術文化の事業において不可欠なものであると考えられる。通信技術が発達する一方で、今後はインタラクティブなコミュニケーション能力がますます求められるのではないだろうか。小林市と橋本市は共に、平成26年度の「おんかつ支援」に向けて大きな２歩目を踏み出している。これからの活動に期待したい。

コーディネーターレポート
田澤　拓朗

平成25年度公共ホール音楽活性化事業（以下「おんかつ」）では沖縄市公演、福井市公演、今治市公演の３地域を担当。いずれの地域も小学生又は小学校教員を対象としたアクティビティを企画しており、教育現場に向けたものが多数を占めた。

福井市においては小学生を対象としたアクティビティの他、小学校の音楽担当教員を対象としたアクティビティをホールの舞台上で実施。今後事業を継続する際の窓口となる先生方に、まずは体験してもらいたいという思いから企画された。実際にアクティビティを体験した先生方からは「単なるミニコンサートではないことに驚いた」「アーティストの人柄に触れたことで音楽の感じ方がより深くなった」などの感想を聴くことができ、言葉では伝わりにくいアクティビティの本質を感じていただけたのではないかと思う。

学校でのアクティビティを進める上でまず、演奏の鑑賞だけが目的ではないこと、音楽室等で少人数を対象に行われること、アーティストと子ども達とのコミュニケーションがベースになって進められることなど、基本的な部分を互いの共通認識として持つことが大切である。加えて、ホールとアーティストがどんな目的やビジョンを持って、何を届けようとしているのかというミッションの部分を先生方に理解いただくことで、「アクティビティ」に対する共通認識を作ることができる。

多くの場合が初めて体験するプログラムであり、どのような活動が行われるのか、イメージするのには時間がかかる。福井市で行われた音楽担当教員を対象としたアクティビティは、言葉での説明ではなく、実体験として先生方の記憶に残るものであり、今後継続していく中でその効果を実感する場面が訪れるのではないか。

今回担当した地域のように、子どもに重点を置いたアクティビティを、今後も継続していきたいと考えるホールは多い。しかしそれが単なる繰り返しにならないよう必要なことは「振り返り」である。

ホールコンサートのアンケートを集計、分析することは広く行われているが、アクティビティに関してはどうだろう。アンケートという形をとらない場合でも、子どもたちからのお礼の手紙や先生方との会話の中に次につながるヒントがある。アクティビティを終えた後改めて学校に伺うと、初めてお会いした時には硬かった先生の表情が和らぎ、子どもたちだけではなく先生にも効果が表れていることに気付く。このような関係性が構築できた後に改めてお話しをすることで、先生からは素直な感想や意見が伺え、どのような効果があったのか、改善点はどこにあるのかなどの検証につながる。私たちが気づかない視点で、子どもたちの表情などから変化を感じ取っているのは、やはり日常子どもと接している先生である。一方的な視点ではなく、異なる視点からの情報を検証、蓄積し、その後の事業に活用することでより厚みが増したプログラムになる。繰り返しではなく積み重ねていくことを意識したい。

教育現場に限らず地域でアクティビティを積み重ねることで、ホールと地域とのつながりが深まり、ミッションを共有した協力者が生まれる。おんかつは地域とつながる上でのスタート地点であり、今後継続していく中でその協力者を巻き込みながら、やがて大きなチームへと成長する。

教育、福祉、まちづくりなど、ホールと地域との関わりが多様化している今、積極的に分野を越えたつながりを深め、地域の中のホールとしてどのような役割を果たせるのか、現状や課題を把握し中長期的な展望を持って取り組むことが必要である。

おんかつがきっかけで生まれたこのチームが、これから地域を少しずつ動かしていく。

第４部
平成24-25年度公共ホール音楽活性化事業
政令指定都市モデル事業

平成24-25年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　実施概要

１　趣旨

財団法人地域創造は、市町村等で実施してきた公共ホール音楽活性化事業で蓄積したノウハウを活かした事業を政令指定都市に普及することを目的として、政令指定都市等との共催により、公共ホール等を拠点としたクラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する研修会等及び公演事業をモデル的に実施する。

２　実施内容

（１）実施団体

公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

（２）事業内容

実施団体は地域創造と共同して次の事業を実施する。

①事業プランの策定

実施団体は、地域創造が派遣するアドバイザーと共同して事業プランを策定する。

②研修会等の開催

実施団体は、当該市内及び周辺地域の公共ホール職員、文化行政担当者、教育関係者及び演奏家等を対象とした、地域交流プログラム並びに文化･芸術による地域づくりに関する研修会等を開催する。

③公演事業の実施

・地域交流プログラム（アクティビティ）

演奏家による学校や福祉施設等でのミニコンサートやワークショップなど地域との交流を図る事業を実施する。

・公演（コンサート）

演奏家による有料のクラシック音楽公演を開催する（原則１回）。また、その入場料収入は実施団体に帰属するものとする。

３　経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

ただし、下記以外の現地移動費やその他の諸経費及び実施団体が前項に定める内容を超えて事業を行った場合に発生した超過分については、実施団体の負担とする。

（１）登録アーティスト派遣経費

出演料、交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地移動費を除く）、出演者に係る損害保険料、マネジメント料を地域創造が負担する。

（２）事業負担金

実施団体が支出した事業実施に係る経費のうち、別紙対象経費について50万円を限度として負担する。

４　事業実施に対する支援

（１）アドバイザーの派遣

地域創造は、事業プランの策定・実施にあたり、地域の芸術活動に詳しい専門家をアドバイザーとして派遣する。

アドバイザーの派遣は、事業プラン策定（２回程度）と研修会等実施時に行うことができる。

（２）コーディネーターの派遣

地域創造は、アドバイザーと協議の上、必要と認められる場合に企画制作の経験が豊富なコーディネーターを派遣する。

（3）講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修会等実施時に派遣する。

5　主催・共催等

主　　催：公益財団法人新潟市芸術文化振興財団
共　　催：財団法人地域創造
制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

6　アドバイザー及びコーディネーター等

・アドバイザー・コーディネーター（兼任）
児玉　真　（(財）地域創造プロデューサー、
いわき芸術文化交流館アリオス　チーフ・プログラム・オフィサー）

・コーディネーター
能祖　將夫（桜美林大学准教授、北九州芸術劇場プロデューサー）
田村　緑（ピアニスト・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）
・サブコーディネーター
髙荷　春菜（東京学芸大学大学院　教育学研究科）
小井塚　ななえ（東京藝術大学大学院　音楽研究科）
西村　聡美（武蔵野音楽大学別科　声楽専攻）

7　グループ分け

	グループA	グループB	グループC
アーティスト	「薫風之音」 鯨岡　徹・藤崎　浩子 (尺八・箏)	中林　恭子 (フルート)	加藤　礼子 (ヴァイオリン)
コーディネーター	能祖　將夫	児玉　真	田村　緑
サブコーディネーター	小井塚　ななえ	西村　聡美	髙荷　春菜
実施団体担当	伊藤　香織	寺田　尚弘	木佐貫　貞夫

8　事業の流れ

年度	時期		内容（●：事業プログラム　◇実施団体の作業）
平成24年度	９月	３日～４日	●全体研修会
	１月		◇登録アーティスト募集
	２月	21日	●一次オーディション
	３月	26日	●二次オーディション
平成25年度	５月	15日～16日	●アーティスト研修会－１
	６月	４日～６日	●アーティスト研修会－２
		13日～14日	●アウトリーチ実施－１（全グループ）
	７月	２日	●アーティスト研修会－３
		11日	●アウトリーチ実施－２（グループC）
	10月		◇アウトリーチ先小学校の公募
	11月	１日	●アウトリーチ実施－２（グループA）
		15日	●アウトリーチ実施－２（グループB）
			◇アウトリーチ実施－３
	３月	16日	●ガラコンサート
		17日	●事業報告会

平成24年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　全体研修会

日　　程：平成24年９月３日（月）～４日（火）
会　　場：りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館
参 加 者：27名（アーティスト14名、公共ホール職員・教育関係者10名、学生３名、りゅーとぴあ職員数名）
プログラム：

９月３日（月）

時間	タイトル	講師	内容	会場
13:00-13:10	開講・オリエンテーション			
13:15-14:45	ゼミ① アウトリーチから広がる地域の未来	吉本光宏	アウトリーチの定義、基本的な概念、目的を理解する	スタジオＡ
15:00-16:30	ゼミ② 「おんかつ」がめざすもの	児玉　真	「おんかつ」の理念、考え方、目的を理解する	スタジオＡ
16:45-17:45	ゼミ③ 体験、模擬アウトリーチ	田村　緑	ワークショップ型のアウトリーチを、実際に体験する	劇場
19:00-21:00	《番外ゼミ》			

９月４日（火）

時間	タイトル	講師	内容	会場
10:00-11:00	ゼミ④ アウトリーチの事例Ⅰ 《おんかつ編》	能祖將夫	「おんかつ」で実施されてきたアウトリーチの多様な手法を学ぶ	スタジオＡ
11:15-12:15	ゼミ⑤ アウトリーチの事例Ⅱ 《りゅーとぴあ編》	中尾友彰	りゅーとぴあで実施している、東響楽団員による小学校５年生のためのアウトリーチを知る	スタジオＡ
13:45-14:30	ゼミ⑥ おんかつアウトリーチを見る	田村　緑 神谷未穂	小学生対象のアウトリーチを見学、子どもたちとのやり取りや反応を見る	劇場
15:00-16:00	ゼミ⑦ アウトリーチのアナリーゼ	児玉　真 田村　緑 神谷未穂	アーティストに、アウトリーチプログラムの作り方、企画意図などを聞く	スタジオＡ
16:10-17:00	ゼミ⑧ まとめ	児玉　真	２日間の研修を総括	スタジオＡ
17:00-17:10	閉講			

講師：
・児玉　真　　（(財）地域創造プロデューサー）
・吉本　光宏　（株式会社ニッセイ基礎研究所主席研究員・芸術文化プロジェクト室長）
・能祖　將夫　（桜美林大学准教授、北九州芸術劇場プロデューサー）
・田村　緑　　（ピアニスト・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）
・神谷　未穂　（ヴァイオリニスト・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）
・中尾　友彰　（りゅーとぴあ事業課企画制作音楽担当）

研修会の様子：

全体研修会　アンケート結果

参加者

1．ホール・教育関係者	10	37%
2．アーティスト	14	52%
3．大学生	3	11%
合計	27	その他、りゅーとぴあ職員数名

アンケート回収数　28

1．研修会のゼミの中で良かったもの上位３つ　◎＝3　○＝2　△＝1

ゼミ①（講師：吉本光宏）　25

総体的にアウトリーチの目的を確認することができた
高齢者の事例が興味深かった、アウトリーチの歴史や概論も
行政、上司を説得する材料をいただいた、わかりやすかった
芸術や文化の成果について、具体的な数字や科学的根拠で照明されている事例や資料は大変興味深いため
数字、グラフを使った説明が分かりやすかった、話の内容も全体的に濃かった
世界の潮流を垣間見た気がする
広く活動するにあたり、協力者を得る場合のお題目の作り方、考え方の良い参考になった
アウトリーチをやる意味、意義が数字、統計などによって分かりやすく説明されていて、これからやるにあたっての原動力になった
演奏からはなれたことを理解することが大切だと思った
アウトリーチとは何か、から、芸術の可能性まで幅広く話が聞けて大変参考になった
「アウトリーチ」と社会の関係、「アウトリーチの役割」が見えてきた
アウトリーチ、音楽の可能性を多く知ることができ、視野が広がった

ゼミ②（講師：児玉　真）　5

「アウトリーチ」「おんかつ」についての知識を得ることができた
活動の軸をあらためて確認できた
「アウトリーチとは何か」を全く知らなかったので、具体的な話を聞けて良かった

ゼミ③（講師：田村　緑）　41

実際に体験したことはなかったので、良い経験になったし楽しかった
よく考えられた内容に本当に目からウロコが落ちた
もっと企画をきちんと考えなければいけないと改めて思った
田村さんのいろいろな工夫が参考になった
実際に小5になって体験でき、いろいろ感じることができた
他のアーティストの現場をなかなか見ることができないので、楽しかった
子どもたちに興味深いツールがたくさんあった
演奏者に近いところで、実際に体験し身をもって良さ（新しさ）を理解できたから
楽しいだけでなく、質の高さに驚いた
客観的に見ることができた
アウトリーチの実際を、アーティストの解説も交えて見せていただき大変良かった
ピアノを使ったアウトリーチのイメージをつかむことができた
実際のアウトリーチを体験でき、どんな構成、曲目、工夫がされているか知れた
アウトリーチを受ける側の視点でとても新鮮な体験ができ、どのようにしたら興味をひくことができるか、という点で参考になった
実際にアウトリーチを体験することで、子どもの目線、アーティストの狙いに気付くことが

できて貴重な体験となった
田村さんの思いを受け止め、内容を体験することができた、話を聞くだけでなく、自分で感じることができるのが良かった

ゼミ④（講師：能祖將夫）　29

おんかつに興味があったので、実際の話を聞くことができてよかった
アウトリーチに大切なのは、何を伝えたいかという思いということを教えてくれた
アウトリーチの事例が、初めて見たものだった
アウトリーチに関わるアーティストについて深く考えることができた
音楽といろいろなことがコラボレーションできるものだと知った
子どもたちがそれぞれの役割を感じて演奏に参加する手法が興味深かった
「おんかつ」の意味を深く知ることができた、人柄が伝わる、生き方が伝わるという言葉が心に響いた
いろいろなアイデアが刺激になった
いろいろな手法、工夫を知ることができた
「体験させる」というと楽器体験を数人にさせる、選ばれた子のみ参加するという考えしかなかったが、全員に役割を持たせ、参加させる例を今回知り、とても興味を持った、同時に奏者以外の人の協力の必要性も感じた
子どもたちの反応がすっかり夢中のようで実に興味深かったし、アーティスト側のとるべき姿勢や考え方がどのようであるべきか（一部だとしても）知ることができた
“良質な音と人柄を伝えてくる”がとても印象的だった

ゼミ⑤（講師：中尾友彰）　27

他会館のアウトリーチを知ることで、自分たちのアウトリーチに生かせるものを得られた
りゅーとぴあのアウトリーチの実態を失敗談を含めてわかりやすく聞けた
りゅーとぴあが行っているアウトリーチの実際を具体的に明快に聞くことができた
おもしろい、だけではなく、きちんと分析して構成を考える必要を知ることができた
具体的な制作スケジュールや、1つの事業にちりばめている工夫が参考になった
りゅーとぴあの企画が素晴らしいと思った、目的がはっきりしている
仕掛け方、次への展開、すべてが整理されていて、そのままパッケージで販売できるシステム。すばらしい。おんかつより具体的で先にいっている。
いろいろな事例や、新潟でのとりくみがわかって良かった
取り組みについて初めて知った
りゅーとぴあで行っているアウトリーチを知り、今に至る過程から良さや工夫を学べた
席をまばらにするなど、珍しい試みや、アウトリーチを通してコンサートの来場者数UP（クラシック音楽に興味を持ってもらう）試みには驚いた

ゼミ⑥（講師：神谷未穂・田村　緑）　21

実例を見て参考になった
演奏家の素晴らしいアイデアと演奏の質の高さに感銘を受けた
生徒の反応を実際に見ることができ、良かった
二人でコンサートをすすめていくヒントがたくさんあった
普段観る機会がないため
演奏に感動し、アウトリーチの作り方に感心した
あっという間な楽しい時間、プロもここまでフランクになるのか、と驚いた
近くに行く大切さが、子どもたちの反応を見てわかった
神谷さん、田村さんが実際に子どもの前で行う姿を見ることができ良かった、子どもたちの反応を含め、自分も子どもの立場で聞けたのがすごく良かった

ゼミ⑦（講師：児玉　真・神谷未穂・田村　緑）　18

音楽家の実際のプログラムの組立て方や、そのプログラムの意味・意志を知ることができた
アウトリーチのアナリーゼは、やったことがなかったから新鮮だった
実際に演奏や反応をみたプログラムだったので具体的だった
細かく解りやすく分析することで、さらに発見や学びがあった
プログラムを選んだねらいを知ると同時に、実際に自分のプログラムの作り方を学ぶというのがとても分かりやすく参考になった
コンサートの組立て方、理由づけが明確になった
現実の話を聞けて良かった
プログラムの作り方の大切さ、順番が成す意味を学べた
アウトリーチを理論、実践の両面から話を聞け、アーティストの考え、プロデューサーの考えを知ることができ良かった
現場でしか分からないアウトリーチにおける問題・課題をアーティスト側の視点から知ることができ参考になった
お二人の演奏家の思いを知ることができた、質問コーナーもあり時間たっぷりで良かった

ゼミ⑧（講師：児玉　真）　3
番外ゼミ　4

人脈をつくれた
各種情報交換ができた
講師の先生方、演奏者の方と直接お話しできて良かった

２．来年度以降もこのような研修会を開催した場合どうされますか

１．ぜひ参加したい　15
２．内容によっては参加したい　12
３．今回で十分　0
４．参加は見送る　1

３．りゅーとぴあがアウトリーチ事業を開催する場合についてご記入ください

・アーティストの方

１．積極的に関わりたい　13
２．依頼があれば関わりたい　1
３．あまり乗り気ではない　0
４．その他　0

・会館職員の方

１．共同で行えるようであれば積極的に関わりたい　5
２．共同で行えるようであれば何からのかたちで関わりたい　4
３．すでに独自で行っているので直接的には関わりは必要ない　0
４．その他　1

独自で行っており、地元アーティストの関係があるので連携が難しいところはあるが、ノウハウを教えてもらえたらうれしい

４．「財団法人地域創造」についてお尋ねします

１．開催している事業にも参加したことがある　6
２．名前も知っていたし、何をする財団かも知っていた　8
３．名前は聞いたことがあった　6
４．今回の研修会で初めて知った　5

平成24年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　登録アーティストオーディション

１．オーディション日程

・第一次選考
日程：平成25年２月21日（木）14：45 ～ 18：00
会場：りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館　スタジオＡ
審査員：児玉　真（(財)地域創造プロデューサー）
審査方法：音源、書類審査

・第二次選考
日程：平成25年３月26日（火）13：40 ～ 18：30
会場：りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館　スタジオＡ
審査員：児玉　真（(財)地域創造プロデューサー）
田村　緑（ピアニスト・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）
坂内　佳子（(公財)新潟県文化振興財団 事業課長）
審査方法：訪問コンサートの実演を想定した、15分程度の（１～３曲）のトークを交えた演奏と５分程度の質疑応答
合格予定者数：４組以内

２．応募対象

・対象：新潟市及び近郊に在住で音楽活動を行なっているアーティスト
・部門：①声楽　②ピアノ　③弦楽器　④管楽器　⑤打楽器　⑥その他の楽器　⑦アンサンブル（小編成のグループ）　※アコースティックなものに限る
・年齢：平成25年４月１日現在、20歳以上の方
・条件：アーティスト研修会、訪問コンサート、ガラ･コンサートをはじめとする当事業のスケジュールにすべて参加できること

３．応募、選考状況

・応募者数：25組（声楽２、ピアノ６、弦楽器４、管楽器６、打楽器０、その他２、アンサンブル５）
・第一次選考合格者数：９組（声楽0、ピアノ2、弦楽器1、管楽器3、打楽器0、その他1、アンサンブル2）
・第二次選考合格者数：３組（弦楽器１、管楽器１、アンサンブル１）

平成25年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　アーティスト研修会第１部

日程：平成25年５月15日（水）～16日（木）
会場：りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館、鏡淵小学校
参加者：５月15日　25名（登録アーティスト６名､公共ホール職員11名､アーティスト８名（内オーディション参加者３名)、りゅーとぴあ職員数名)
　　５月16日　登録アーティスト６名、りゅーとぴあ職員数名
プログラム：

５月15日（水）

時間	タイトル	講師	内容	会場
9:30-9:40	開講・オリエンテーション			スタジオＡ
9:40-11:00	ゼミ①　※公開 アウトリーチとは	児玉　真	アウトリーチの定義、基本的な概念、目的を理解する	
11:35-12:20	ゼミ②　※公開 アウトリーチ見学①	中川　賢一	小学校でのアウトリーチを見学、子どもたちとのやり取りや反応を見る（オーソドックス）	鏡淵小学校（３年生）
13:50-14:35	ゼミ③　※公開 アウトリーチ見学②	中川　賢一	小学校でのアウトリーチを見学、子どもたちとのやり取りや反応を見る(変化球)	鏡淵小学校（４年生）
15:00-15:35	ゼミ④　※公開 アフタートーク	児玉　真 中川　賢一	アーティストに、アウトリーチプログラムの作り方、企画意図などを聞く	スタジオＡ
15:35-15:45	閉講			
16:00-18:00	ゼミ⑤ ミーティング	各コーディネーター、サブ	担当コーディネーターとのミーティング	
19:00-21:00	《番外ゼミ》			

５月16日（木）

時間	タイトル	講師	内容	会場
10:00-11:00	ゼミ⑥ 他地域アーティストの体験発表	小川　和紘	登録アーティストとしてやってきたことや、現場での体験談を聞く	スタジオＡ
11:00-15:00	ゼミ⑦ ミーティング	各コーディネーター、サブ	担当コーディネーターとのミーティング	スタジオＡ

講師：
児玉　真　　（(財) 地域創造プロデューサー）
中川　賢一　（ピアニスト・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）
小川　和紘　（サクソフォン奏者・平成23-24年度宮崎県立芸術劇場登録アーティスト）

研修会の様子：

アーティスト研修会　第１部　アンケート結果

参加者

１．公共ホール職員	11	
２．アーティスト	14	
合計	25	その他　りゅーとぴあ職員、地域創造関係者数名

アンケート回収数　24

１．各ゼミの感想をご記入ください。
　なお一番良かった（参考・勉強になった）ものに［◎］を付けてください。

ゼミ①　アウトリーチとは　（講師：児玉真）　ホール職員：２　アーティスト：４　合計：６

感想（ホール職員）

・もっと理論的な難しい講義なのかと想像していましたが、実体験に基づく現場に即した話でとても勉強になりました。
・アーティスト側のアウトリーチへの関わり方と、主催者側の関わり方をどう結びつけるのかが大切だと改めて感じました。
・アウトリーチについて、分かりやすいたとえを使って説明いただき勉強になった。自分はまだアウトリーチを企画したことはないが、今後もいろいろな経験をしていきながら頑張っていきたい。
・もっと具体的なアウトリーチ事例話だと思ったのですが、勉強になりました。
・アウトリーチの考え方を知ることで、アウトリーチだけでなく裏方としての関わり方が変化しそうな兆し。
・アウトリーチの必要性、行う意義を教えていただけて良かったです。
・アウトリーチの目的、考え方など、再確認することができました。
・アウトリーチとは、いくら考えてもやはり一言では定義できないが、それだけ目的や手法など多岐に渡るということかもしれない。

感想（アーティスト）

・現在の状況、一般的に音楽やコンサートについて、どのような印象を持たれているか、問題点など興味深かったです。
・何回聞いても良いです。
・公共ホールに求められているものが分かりました。
・アウトリーチの意義を教えていただけて発見があった。
・身が引き締まる感じでした。
・ターゲットを考える前にまず自分について掘り下げてみるということが勉強になりました。漠然と思っていたことが整理されすっきりしました。
・社会との関わりという点が特に印象に残った。表面的な考えだけでなく背景。
・アウトリーチについて整理（考え方、何が必要か）して考えることができました。
・アウトリーチの本来の目的、意味がしっかり分かった。
・音楽普及についてもっと深くお聞きしたかったです。

ゼミ②　アウトリーチ見学①　（講師：中川賢一）　ホール職員：７　アーティスト：７　合計：14

感想（ホール職員）

・45分という短い時間でしたが、全てが有効な内容で感動しました。また、子ども達が本当に楽しみ、自由に聴ける環境を作り上げていて素晴らしかったです。今までのアウトリーチの印象が変わりました。
・自身が行っているアウトリーチと大きな違いがあり、今まで曖昧だった「アウトリーチ」というものが、以前より明確にイメージできるようになりました。

・お客さんとしてアウトリーチを見学できて新鮮でした。
・子ども達の心をつかむしゃべり方、構成は大人が聞いていても引き込まれた。
・小学３年生の素直な反応が面白かった。初めてアウトリーチを体感し、自分も楽しかった。
・実際のアウトリーチの進め方を体験できて大変参考になりました。中川さんの子どもを引きつける話し方、充実した内容にあっという間の45分でした。
・プログラムが大変工夫されていて良かったです。少人数で実施する大切さが分かりました。

感想（アーティスト）

・アーティストの意気込みがいかに生徒に伝わっていくか体験できてとても有意義でした。ピアニストにとっても初体験のピアノの仕組み（ピンポン玉、鍵盤を引き出してハンマーを触る）が驚きと感動をもらえて楽しい時間でした。
・素晴らしいアウトリーチでした。
・児童の素直な表情が見られた。
・興味深い内容でとても楽しめました。
・元気な子ども達を上手くテンポ良く誘導しておられて、全体としてパワフルで引きつけられる45分間でした。
・実際に見学することで、子ども達がどのような反応をするのか見ることができてよかった。
・子ども達の反応をしっかり見つつ、好奇心をあおりどんどんスピード良い展開で引き込まれるステージは沢山学習させていただけた。
・大変参考になりました。(ピアニストだけでなく周りのスタッフ、調律の方がいないと不可なのでまねはできませんが)
・ピアノについての盛りだくさんの内容。目から鱗でした。

ゼミ③　アウトリーチ見学②　（講師：中川賢一）　ホール職員：７　アーティスト：６　合計：13

感想（ホール職員）

・１回目と同じく先生方も上手く巻き込んでいて良かったです。ピアノを弾かない、など違ったアプローチにも驚きました。
・内容が違うと生徒さんの反応も違うし、プロデュース力の重要性を感じました。
・小学３年生と１学年違うだけで反応が変わることに驚いた。現代曲の３曲は大人でも楽しめると思う。
・中川さんの見事な構成力にも驚きました。子どもに体験させる（ピアノに触れる）時間を設けてあったのが良かった。最後の演奏、子ども達がきちんと聞いていたのが印象的でした。
・現代曲を題材にしたところが良かったです。
・子ども達の顔を見ているのが楽しかった。中川さんの子どもへの接し方が素敵だった。大人も十分に楽しめる内容に感じた。
・コンサート風のプログラムの作りを構成した上でコンサートホールではできない活動を取り入れる。楽器を構成している部分に触れ、実際の音を聞くのは大人になっても機会がないことだと思う。弦に触れてみたかった。譜面のおたまじゃくしの小さいのが大嫌いなのだが、「遊び」の譜は演奏家一人一人が違う表現をするんだと思え、びっくりさせられた。
・アウトリーチの可能性を感じました。
・学年による生徒の反応の違いなども見られた。「聞く」だけではない動きのある流れ。音楽＋アート

感想（アーティスト）

・刺激の多いアウトリーチで２回目でも全く飽きませんでした。
・刺激的な内容も盛り込まれ面白かった。
・一般的な音楽の考え方を変えるようなアウトリーチだった。子どもの頃から、こういった考え方に触れられるのは幸せなことだと思った。

・少し落ち着きをもてるようになった年齢の子ども達、それに合わせて対応を変えたり、ゼミ②よりも音楽のおもしろみをより伝えるピースが増えているように感じました。
・１学年挙がっただけでまた集中、反応も代わり面白くしっかり入ってきた。素晴らしかった。無音曲？の反応もすごかった。
・子ども達の心理魅力を引き出すところはとても良かった。絵の想作も◎

ゼミ④　アフタートーク　（講師：中川賢一・児玉真）　ホール職員：３　アーティスト：６　合計：９

感想（ホール職員）

・アーティスト側がどのようにプログラムを考えているのか聞くことができて、大変良かったです。会館として今後の参考になりました。
・質問にも丁寧に答えてもらい大変勉強になった。
・アーティスト側の話が聞けて良かったです。
・アウトリーチ後にプログラムの種明かしを聞けたようで興味深かった。
・ゼミ③との二段仕立てになっていたのが良かった。
現場に出向いているアーティストに直に声を聞けて興味深かった。
・実際に実施アーティストの方の声が聞けて（実施後に）大変参考になりました。
アーティストの思い、感じていることが分かって良かったです。
・子ども達を自由にさせるということ、大切だと思いました。

感想（アーティスト）

・中川さんの考え方がよく分かりました。
・実際に見学できた内容についてのお話は面白かったです。
・インパクトのあるコーナーが目立っていましたが、キエフの大門に至るプロセスだと分かって驚きました。
・参考になりました。
・中川先生のお気持ち、音楽に対する姿勢が良く伝わって勉強になった。
・プログラムの組み立てについて、深く考えられていることを知り、とても勉強になりました。
・プログラムを作る上での考え方などが分かってとても参考になった。
・演奏者の考えを聞けて良かった。
・具体的なお話とても勉強になりました。ありがとうございました。

２．来年度以降もこのような研修会を開催した場合どうされますか。

	ホール職員	アーティスト	合計
1.ぜひ参加したい	9	5	14
2.内容によっては参加したい	4	0	9
3.今回で十分	0	0	0
4.参加は見送る	0	0	0

３．来年度も開催の場合、どのような内容（ゼミ）をご希望ですか。

	ホール職員	アーティスト	合計
1.アウトリーチの概念・考え方の講義	3	2	5
2.アウトリーチの見学	5	10	15
3.アウトリーチの事例発表（実施会場・ホール等）	7	5	12
4.アウトリーチの事例発表（実施アーティスト）	4	5	9
5.アウトリーチの具体的手法の講義	7	9	16
6.その他	0	0	0

４．会館職員の方へうかがいます。

・りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティストによるアウトリーチについて

1.共同で行えるようであれば積極的に関わりたい　2
2.共同で行えるようであれば何らかのかたちで関わりたい　7
3.すでに独自で行っているので直接的には関わりは必要ない　1
4.その他　1

５．「財団法人地域創造」についてお尋ねします。

	ホール職員	アーティスト	合計
1.名前も知っていたし何をする財団かも知っていた。開催している事業にも参加したことがある。	4	1	5
2.名前も知っていたし何をする財団かも知っていた。	4	6	10
3.名前は聞いたことがあった。	5	3	8
4.今回の研修会で初めて知った。	0	1	1

６．ご自身についてご記入ください。

1.アーティスト　11
2.公共ホール職員　12
3.未回答　1

７．研修会に対するご意見ご感想をご記入ください。

ホール職員

・大変勉強になりました。ありがとうございました。
・今回のアウトリーチで参考になることばかりでした。ありがとうございました。
・いい機会をいただき本当にありがとうございました。
・個人的に大人向けのアウトリーチがあったら体験したい（お客さんとして）と思います。
・大変良かった。
・聴かせるだけじゃないアウトリーチ。勉強になりました。
・回を重ねていくと前回までの研修を聞いていないために、未消化な講義にならないような常に初心者もいるという講義をお願いします。

アーティスト

・実際の内容等、充実していておもしろかったです。大変勉強になりました。
・今回も大変勉強になりました。
・アウトリーチのプログラムを考えるにあたって、たくさんの事例をみるのは重要なことだと思うので、２つのアウトリーチを見学できたのは良かった。
・コンサートを主催する側（児童センター・小学校等）の理解がほしい。コーディネートについても研修会で教えてほしいです。
・前回参加の友人より聞き、ステップアップ、考えを深めたく参加させていただけ、とても為になり、また活用していきたいと思っております。
・プログラム事例をいくつか教えていただきたかったです。

平成25年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　アーティスト研修会第２部

日程：平成25年６月４日（火）～６日（木）
会場：りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館
参加者：登録アーティスト６名、コーディネーター、サブコーディネーター、りゅーとぴあ職員数名
プログラム：

６月４日（火）

時間	タイトル	講師	内容	会場
14:00-17:00	プログラムミーティング	各コーディネーター、サブ	研修会１で出された課題を確認。目標の設定の明確化。	練習室1,3,4

６月５日（水）

時間	タイトル	講師	内容	会場
10:00-12:00	コーディネーターとのミーティング	各コーディネーター、サブ	グループ毎に課題と目標を確認する	スタジオＡ 練習室1,3,4
13:00-17:00	プログラムづくり リハーサル	各コーディネーター、サブ	グループ毎にプログラム内容を検討する	スタジオＡ 練習室1,3,4
17:00-20:00	自主練習可能			練習室1,3,4

６月６日（木）

時間	タイトル	講師	内容	会場
10:00-12:00	プログラムづくり リハーサル	各コーディネーター、サブ	グループ毎にプログラム内容を検討する	スタジオＡ 練習室1,3,4
13:00-17:00	ランスルー ①グループＢ（13:00～） ②グループＣ（14:20～） ③グループＡ（15:40～）	各コーディネーター、サブ	ランスルー（お互い見あう→意見交換×3組	スタジオＡ
17:15-18:00	アーティストミーティング	各コーディネーター、サブ	アーティストだけで意見や課題を共有し、交流を深めお互いに学びあう。	スタジオＡ
18:00-19:00	コーディネーターとのミーティング	各コーディネーター、サブ	プログラム修正	練習室1,3,4
20:00-22:00	意見交換会			

研修会の様子：

平成25年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　アーティスト研修会第３部

日程：平成25年７月２日（火）
会場：りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館、浜浦小学校
参加者：登録アーティスト６名、アドバイザー、りゅーとぴあ職員数名
プログラム：
７月２日（火）

時間	タイトル	講師	内容	会場
10:00-12:00	打ち合わせ、練習		アウトリーチの打ち合わせ、練習等	スタジオＡ
13:00-14:00	リハーサル	加藤　直明 大室　晃子	小学校でのリハーサル	浜浦小学校
14:05-14:50	アウトリーチ見学	加藤　直明 大室　晃子	小学校でのアウトリーチを見学、子どもたちとのやり取りや反応を見る。 （５年生75名）	浜浦小学校
16:00-18:00	意見交換会	加藤　直明 大室　晃子	アーティストに、アウトリーチプログラムの作り方、企画意図などを聞く。 アーティスト同士で意見交換をする。	スタジオＡ
19:00-21:00	情報交換会			

講師：
加藤　直明　（トロンボーン奏者・「公共ホール音楽活性化支援事業」登録アーティスト）
大室　晃子　（ピアニスト）

研修会の様子：

グループＡ

アーティスト：「薫風之音」　鯨岡　徹・藤崎　浩子（尺八・箏）
コーディネーター：能祖　將夫
サブコーディネーター：小井塚　ななえ
実施団体担当：伊藤　香織

■アウトリーチ実施-１

期　日：平成25年６月13日（木）　14：00～14：45
会　場：新潟市立白山小学校
参加者：５年生35人

薫風之音の初アウトリーチ。担任の先生も巻き込んだ冒頭の小芝居の反応も上々で、最後まで子どもたちの興味関心をひきつけることができた。「砂山」で佐渡島役の大太鼓がとてもいい反応をしてくれて、次の「月ノ雫」への雰囲気づくりに一役買った。

■アウトリーチ実施-２

期　日：平成25年11月１日（金）　11：30～12：15
会　場：新潟市立黒埼南小学校
参加者：５・６年生57人

前回よりも人数が大幅に増え、「砂山」の展開に工夫を加えて臨んだ。隊形を変えることに予定よりも時間がかかったが、楽器配布や流れのなかで絶妙に調整し、ほぼ時間内に収めることができた。

期日：平成25年11月１日（金）　14：15～15：00
会　場：新潟市立栄小学校
参加者：５年生23人

小人数でかつ、反応もすばらしいクラスで、演奏者もノリノリでプログラムを進めることができた。一言一言の語りかけに「へ～」「そうなんだ！」と次々と声が上がり、最後の「月ノ雫」では拍手が鳴りやまなかった。

■アウトリーチ実施-３

※コーディネーター、サブコーディネーターは付かない

期　日：平成25年12月４日（水）
会　場：新潟市立牡丹山小学校
①　９：35～10：25　参加者：４年生39人
②　11：40～12：25　参加者：４年生37人
③　14：15～15：00　参加者：４年生41人

同プログラムを１日３回実施することになったが、演奏者としては移動がない分、負担が少なかったようだ。学級ごとにカラーも違い、それに合わせて語りかけ方や間の取り方に工夫が見られた。

■アウトリーチプログラム（例）

※演劇で導入。先生も参加。

1．鹿の遠音（尺八）

2．六段の調（箏）

挨拶、楽器紹介

3．もののけ姫 or　君をのせて（尺八・箏）

※子ども達を楽器の周りに集める。

4．砂山（子ども達が打楽器で参加）

※使用楽器：砂箱、鈴、マラカス、バードコール、トライアングル、ウィンドチャイム、紙、スプリングドラム、カスタネット、大太鼓

二人の演奏を伴奏に歌う→楽器を配る→楽器の説明→全員での合奏

5．月ノ雫（尺八・箏）

サブコーディネーターレポート（グループA）
小井塚　ななえ

今回、薫風之音の鯨岡さんと藤崎さんペアは、和楽器を再発見する機会を創出し、楽器の面白さを伝えることを目標として設定した。研修から実践までの過程で、邦楽器という固定観念と向き合い、尺八と箏のアーティストとして新しい一歩を踏み出そうと試行錯誤し形にしたことは、子どもと和楽器をどのように出合わせるかを考える上で非常に参考になる実践であったように思う。

薫風之音のプログラムには大きく３つの特徴がある。まず１点目は、プログラム全体が江戸から昭和、現在そして未来に至る大きな時間軸に沿って構成されていた点である。箏や尺八は、児童にとって昔の楽器というイメージが強いという問題意識から、プログラムを時代に沿って構成し、時を経て現在も発展し続けている楽器であることを知ってもらう目的で最後に薫風之音のオリジナル曲の鑑賞を据えた。導入部分は、担任を巻き込んで江戸時代を思わせる芝居から始め、児童を一気に非日常的な空間へ誘う工夫をした。そこから楽器紹介や音階の話、また作曲家の話題を盛り込みながら時代を進め、耳馴染みのある曲を演奏し、最後にオリジナル曲を鑑賞させており、児童にとっても順序立てて理解しやすく、最後までスピードが落ちない筋の通ったプログラムであった。

２つ目の特徴は、言葉をうまく用いたプログラムであった点である。導入部の芝居では台詞によって江戸時代の空間を演出した。さらに後半では、新潟の風景が詩い込まれた《砂山》を用いて児童との合奏を行い、詩から受けたインスピレーションを音にする体験を提供した。アウトリーチのような近い距離では、音楽を聴くだけでなく、アーティストの言葉掛けひとつで反応が変わったり、音への興味が深まったりと言葉による働きかけも重要な要素である。そうした意味で、このプログラムでは共通に理解できる言葉を介して、音楽的なコミュニケーションを深めることができた点で、今後の和楽器を用いたワークショップの可能性を示唆する実践となったと言える。

最後は、児童一人一人が主役になれる参加型のプログラムであった点である。《砂山》では、新潟の風景と歌詞を手がかりとして自由に想像し、実際に楽器で表現してもらうというねらいを設定し、一人一人に楽器を手渡した。具体的には、音楽室に常備してある約10種類の楽器に役割を与え、（例えば、砂箱＝波の音、鈴＝夕日が沈む）読み上げる歌詞と音楽に合わせて感じた音を出すというものであった。鯨岡さんの「この音楽室を寄居浜にします」という一言から始まり、歌詞が朗読されて実際に音がなる中で、児童がぐっとひとつひとつの音に集中していく姿が見られ、静寂にさえ何かを捉えようとする張りつめた空気が創られたことが非常に印象的であった。この過程を経ることで最後のオリジナル曲《月ノ雫》の鑑賞は何の声かけが無くとも音楽を聴く構えができており、児童を巻き込んでいくこの一連のプログラムの強さを感じた。

しかし、これだけの要素を自然に盛り込むまでには課題も多く、薫風之音のお二人の探究心無くしては形にならなかったと感じる。企画段階では特に、今感じている問題意識や子どもに伝えたい内容、そして想いをゆっくりと言葉にし、グループ内で共有することに多くの時間をかけた。そしてそれらをどう整理していくか、どのような方法で伝えるのかという段階では、アーティストのアイディアの中に無かった演劇という要素を取り入れ、別の角度から少しずつ柔らかくしていくことで、尺八と箏の可能性に気づき直していったように思う。この刺激は重要な転機であり、これを機に薫風之音としての方向性や発想がより広がって豊かになった。さらに、実践現場に出ることで生の反応を得て薫風之音もそしてプログラム自体も変容していったように感じる。準備していた通りに進めるだけだった初回のアウトリーチから、しだいにその場で生まれた反応を取り込みながら緩やかに変化していくことを楽しむように変わっていったことが最も印象的であった。

今回のモデル事業は長期にわたるプロジェクトであったが、企画・実践・フィードバックというサイクルを何度も経験することができたことにより、単にアウトリーチを理解するだけでなくアーティストが独自のアウトリーチを創るという実践知を蓄積できたという点で重要な事例となった。こうした事例をもとに、地域のアーティストを取り込む形での研修や実践の仕組みを整え提案していくことは重要であると改めて感じた。

グループＢ

アーティスト：中林　恭子（フルート）　伴奏共演者：栄長　敬子／石井　朋子（ピアノ）
コーディネーター：児玉　真
サブコーディネーター：西村　聡美
実施団体担当：寺田　尚弘

■アウトリーチ実施-１

期　日：平成25年６月14日（金）　11：25～12：10
会　場：新潟市立笹口小学校
参加者：３年生47人

中林恭子による初めてのアウトリーチ。ちなみに同校は中林の出身校。冷房完備の新築音楽室という絶好の環境で実施できたこともラッキー。トークが台本どおりに進められなかったことが反省点。

■アウトリーチ実施-２

期　日：平成25年11月15日（金）　11：20～12：05
会　場：新潟市立大鷲小学校
参加者：４・５年生53人

公募により開催することになった、２学年を対象としたアウトリーチ。事情によりピアニストが変更になったり、先回から５ヶ月ぶりということもあり、ギクシャクした部分もあったが、演奏は安定してきていた。

期　日：平成25年11月15日（金）　15：00～15：50
会　場：新潟市立潟東西小学校
参加者：４・５年生19人

農村部の小規模校でのアウトリーチ。２学年で19人、それも５年生は全員女子、４年生は女子１名ということで、反応が心配だったが、皆真剣に聴いてくれていた。

■アウトリーチ実施-３

※コーディネーター、サブコーディネーターは付かない

期　日：平成25年11月22日（金）　11：10～11：55
会　場：新潟市立金津小学校
参加者：４年生50人

コーディネーターなしで行う初めてのアウトリーチ。回を重ねることでだいぶ安定した演奏ができるようになってきた。あとはトークがスムースに運べるとなお良いかと。

■アウトリーチプログラム（例）

１．メヌエット／ビゼー
２．フルートソナタハ長調「アレグロ」／モーツァルト
　※フルート・トラベルソの演奏、楽器紹介
３．ポロネーズ・パディヌリ／バッハ
　※先生による詩の朗読
４．メロディ／ノブロ
　※写真等を使ってヴェニスの謝肉祭の様子を紹介
５．ヴェニスの謝肉祭／ジュナン

サブコーディネーターレポート（グループB）
西村　聡美

中林さんは、ビゼー作曲のアルルの女「メヌエット」が小学校の給食の時間に校内で流れていたことが、フルートを始める大きなきっかけの一つだったそうだ。アウトリーチを通して、子どもたちにこの曲を聴いた時のような安心感や、心に何かか染みていくような感覚を感じてほしい、“音楽で心が動く”というような体験をしてもらいたいとのことだった。

そこで、今回のアウトリーチでは子どもたちに「音楽によって想像し、感じること」に重点を置いたプログラミングを行うこととなった。

中林さんが演奏する上でとても大切だと考えているその「音楽によって想像し、感じること」を具体化していく曲として、ノブロの「メロディ」が挙がった。プログラムでは、この曲の演奏を始める前に子どもたちへ「感情」について問いかけをしながら、子どもたち自身の世界の中でこの曲を聴いてもらえるような仕掛けを行った。加えて、工藤直子さんの詩を朗読することで子どもたちに想像への入り口を作り、そこから音楽と向き合うことで、いつも音楽を聴いている時とはまた違った感情や発見ができるようになってほしいと考えたのである。

アウトリーチのプログラムは、まずビゼーのアルルの女より「メヌエット」ではじまり、次にモーツァルトのソナタとバッハのポロネーズ・パディヌリを演奏。これらの演奏の間にフルートの成り立ちと仕組みを紹介。その後に詩の朗読とノブロ「メロディ」、最後にジュナンの「ヴェニスの謝肉祭」となる。

６月の研修の際に行われた初めてのランスルーから小学校での本番を重ねていく毎に、中林さんが子どもたちへ語りかける言葉や、子どもたちとの目の合わせ方が次第によりよいものへ変化していったような印象を持った。11月に行われた第2回アウトリーチの反省会の中で、中林さんご自身が仰っていた「子どもたちに語りかける言葉が自分自身にも影響する」ということも、これらに大きく関わっているのではないかと思う。中林さんが子どもたちに伝えようとしていることが自分にも返ってくることで、音楽に対する想いや考えを改めて再認識することに繋がったのではないだろうか。

加えて、反省会の中では、子どもたちに語りかけることの難しさについて話も挙がった。あらかじめ台本を作っていても、その時々の子どもたちのようすで流れや語りかけへの反応が違ってくるということだったが、コーディネーターの児玉さんは、あまり型にこだわりすぎないように心がければ大丈夫だとおっしゃっていた。相手によってやりたいことが変わってくるのは当然のことなので、一方的にならず、柔軟に対応していくことが大切であるというお話だった。

同時に、プログラムはその人のキャタクターにあったものを作るべきであり、人によっては大技のような仕掛けを作ることもできるが、中林さんの場合はとにかく丁寧に組み立てていくとよいとのアドバイスもいただいた。

中林さんがアウトリーチに取り組む様子を１年間拝見して、アウトリーチに対する熱い想いと、音楽に向き合うことのよろこびを常に感じることができた。今後も、どの子どもたちに対しても、中林さんが伝えたい想いをそのままに、且つ柔軟な姿勢でアウトリーチを行っていっていただきたいと思った。子どもたちに伝えたいことを理解してもらうには、言葉選びひとつをとっても、今後たくさんのアウトリーチを経験されていく中で中林さんご自身の最良の方法を得ていくことになると思うが、中林さんしかできない、子どもたちを温かく包み込むようなやさしいアウトリーチをこれからも続けていってもらえればと思う。

グループＣ

アーティスト：加藤　礼子（ヴァイオリン）　伴奏共演者：中村　哲子（ピアノ）
コーディネーター：田村　緑
サブコーディネーター：髙荷　春菜
実施団体担当：木佐貫　貞夫

■アウトリーチ実施-１

期　日：平成25年６月14日（金）14：55～15：40
会　場：新潟市立笹口小学校
参加者：４年生36人

加藤礼子のアウトリーチ。よく練られたプログラムではあったが、メニューが多すぎて大幅に時間オーバーしてしまった。しかし演奏、トークとも初めてとは思えない安定感があり、好感が持てた。

■アウトリーチ実施-２

期　日：平成25年７月11日（金）10：40～11：25
会　場：新潟市立小須戸小学校
参加者：５年生48人

加藤礼子の出身校でのアウトリーチ。過去にも来校したことがあるとのことだが、全く違和感はなかった。先回に比べ確実にレベルアップした演奏とトークが、成長力の高さを証明していた。

期　日：平成25年７月11日（金）14：35～15：20
会　場：新潟市立小合東小学校
参加者：４・５・６年生38人

小規模校を会場にした複数学年によるアウトリーチ。学校側の受け入れ体制もしっかりしており、準備したメニューをスムーズに進めることができた。

■アウトリーチ実施-３

※コーディネーター、サブコーディネーターは付かない

期　日：平成25年11月19日（火）11：20～12：05
会　場：新潟市立山潟小学校
参加者：４年生63人

コーディネーター無しで行う始めてのアウトリーチ。街中の中規模校のため演奏中のざわつきはあったものの、児童を惹きつける演奏、盛り上げるトークとアーティストの目を見張る成長が印象的だった。

期　日：平成25年11月19日（火）　14：45～15：30
会　場：新潟市立新関小学校
参加者：４・５・６年生44人

複数学年によるアウトリーチ。同日２回目ということで進行もこなれてきた。特に子供たちを動かす部分では、的確な指示で移動させることができた。演奏も安定、時間もバッチリ。

■アウトリーチプログラム（例）

1．マドリガル／シモネッティ
2．ヴァイオリンの秘密
　※半分に切ったヴァイオリンを紹介
3．ルーマニア民族舞曲　Ⅴ・Ⅵ／バルトーク
4．愛の喜び／クライスラー
　※グループに分けて振付をしてもらう
5．ヴァイオリンソナタ第26番KV304　／モーツァルト
　※部分ごとに曲を聴いてどんな感じがしたか質問する
6．チャルダッシュ／モンティ
　※一緒に手拍子や動作をする

サブコーディネーターレポート（グループC）
髙荷　春菜

今回は、ヴァイオリンの加藤礼子さん、ピアノの中村哲子さん、コーディネーターの田村緑さん、りゅーとぴあの木佐貫貞夫さんと共に、Cグループの一員として携わらせていただいた。３組のアーティストの中で最も若手の加藤さんは、快活で何事も前向きな姿勢が印象的で、その人柄に惹きつけられ、グループ全体も好奇心に満ちた雰囲気となった。加えて、コーディネーターはアイデアマンの田村さんということで、Cグループのミーティングはいつも、様々な可能性を探してアイデアからアイデアが派生し、時に話が飛躍することもあったが、そのお陰もあってか、実にカラフルなプログラムとなった。その軌跡を報告したい。

加藤さんは本事業のオーディションの際、前年度９月に開催した研修会によって「ハッとさせられたのです」ということをおっしゃっていた。それは、アウトリーチのプログラムが、意図があって組み立てられていることへの驚きと、自分が学校に行くことで、子どもたちにどんな影響を及ぼせるのかを真剣に考えなければならない、という気付きだった。Cグループのプログラムづくりは、その気付きを大切に、意図を持って組み立てること、加藤さんだから伝えられること、それを子どもたちにいかに伝えるか、この3点を軸に掘り下げていく作業だった。

まずは、プログラムのメインとなる曲選びを行ったが、ここでも、加藤さんだから弾く曲、加藤さんだから言えるメッセージのある曲、そうした視点で曲を絞っていった。その中で見えてきたのは、加藤さんが「自分で本当に弾きたいと思った曲」というモーツァルトのヴァイオリンソナタ第28番。モーツァルトが母親を亡くした直後に書いた数少ない短調の曲で、この曲を通して加藤さんは、今普通に生活している毎日が、とても儚いものかもしれないという見方を音楽が教えてくれること、また、音楽が強く生きていくことの勇気をもくれること、そうした音楽の力を伝えたいということだった。子どもたちに、モーツァルトの当時の気持ちを感じてもらおうと、母を失った悲しみが表れているモーツァルトの手紙を引用するといった手法も考案したが、学校側より母親の死をテーマに扱うことは避けてほしいとの要望を受けて断念。急遽、曲想から感じる気持ちを引き出したり、加藤さんがこの曲に支えられた経験などをお話しすることに代えた。アーティスト本人の経験を伝えるという手法に代えたことで、「加藤さんが弾く意味」が一層強められたと思うが、今回の経験は、学校でこのようなテーマを扱うことの難しさを痛感した出来事だった。

プログラム全体を通して田村さんは、演奏家から子どもたちへのアプローチだけでなく、子どもたちの方から演奏家や音楽に、能動的に何かをとりに行くという姿勢を促す「仕掛け」を追求された。さらに、その仕掛けが一辺倒にならないよう、多様なアプローチ方法を模索した。例えば「能動的に曲を聴く」という姿勢を促すために、子どもたちに自分の担当のメロディーを決めて、自分のメロディーが来たときに、曲に合わせて身体を動かすという仕掛けや、床に寝そべって“一人”の空間になって、曲に入り込んで聴いてもらう仕掛け、曲想によって移り変わる感情の変化を、一人ひとりが追いながら聴けるような仕掛けなど、様々な音楽の聴き方・感じ方を、子どもたちに提案したのだった。子どもたちが使っている感覚が視覚に偏っていないか、伝え方が言葉だけに偏っていないかなどと、妥協せずに模索していったことが印象的だった。

実際に子どもたちの前に立つと、加藤さんは、持ち前の明るさと親しみやすさで、子どもたちの中へすっと入っていき、ピアノの中村さんも、加藤さんと共に、彼女の伝えたい気持ちを演奏で表現してくださった。お二人の演奏には説得力があると感じたが、それには、中村さんがプログラムの作成過程をずっと共にしてくださり、加藤さんが伝えたい思いを、共有してくださっていたことが大きいと感じている。

子どもたちの反応は、学校や学年によって少しずつ手ごたえが異なったが、人数や椅子の配置、先生の関わり方など、ちょっとしたことがその場の雰囲気に影響してくるということを痛感した。子どもたちの心にどのように残ったのかは分からないが、授業後に書いてくれた子どもたちの手紙の中に、「曲の“気持ち”が、今日初めてわかりました」とあり、加藤さんは、その子にとっての音楽との人生を、大きく変えた人物になったのではないかと感じた。また、床に寝そべって聴いたことについて、「自分でも、いろんな曲を寝そべって聴いてみたいと思いました」との感想があった。このことは、この授業の中で得た一つの学びから、他の曲だったらどうなるだろう、との好奇心が子どもの中に芽生えたということで、子どもの方から能動的に音楽にアプローチする、その回路が子どもの中に残ったのだと考え

られ、仕掛けた側として非常に嬉しく感じた。他にも寝そべって聴いたことについて記述している子どもが数多くおり、耳や目だけでなく、身体全体の様々な感覚を通して感じるという音楽の楽しみ方が、子どもたちにとっておもしろいものだったのだと思われる。普段の授業ではあまり使われない感覚や思考回路を通して「芸術を体験する」ことは、このような能動的な学びを促す可能性があるのではないだろうか、そのようなことを考えさせられた。

今回のＣグループのプログラムは、最終形態に至るまでに、非常に遠回りをしたところもあったと感じているが、その分一つ一つの要素が深く、とてもよく考え抜かれたプログラムに仕上がった。加藤さんにとっても、意図を持って組み立てること、加藤礼子という一人のアーティストとして、子どもたちに何を伝えられるのか、それらのことをじっくり考えることができたのではないかと思う。実はＣグループには、学校からの要望や、時間の制限によって実践に至らなかったアイデアや、アイデア倒れで終わってしまった案が数多くある。それらのネタと、今回の経験から、また新たなプログラムが新潟で生まれることを楽しみにしたいと思う。

平成25年度　公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業　総括公演

公 演 名：ジョイント・コンサート
　　～りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティストによる～
日　　時：平成26年３月16日（日）14：00開演
会　　場：新潟市秋葉区文化会館
入場者数：245名
出 演 者：１．薫風之音（箏：藤崎　浩子、尺八：鯨岡　徹）
　　２．中林　恭子（フルート）／石井　朋子（ピアノ）
　　３．小川　和紘（サクソフォン）／高場　涼子（ピアノ）
　　４．加藤　礼子（ヴァイオリン）／中村　哲子（ピアノ）
公演の様子：

事業担当者レポート
りゅーとぴあ事業課　企画制作音楽担当　寺田　尚弘

「公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業」のお話しを、地域創造の小澤櫻作さんからいただいた時、りゅーとぴあで何ができるのか？と戸惑ってしまった。数年前に「おんかつ」のお手伝いをさせてもらった経験から、「おんかつ」の素晴らしさは理解しているつもりではいたが、新潟市で、りゅーとぴあで「おんかつ」を行ったとして、どの程度の成果が見込めるのかということになると、答えが出せないというのが正直なところだった。

新潟市は平成の大合併により、市域が広がり人口も1.5倍に増えた。平成19年には政令指定都市に昇格したことにより、市内の７つある全ての区に区民ホールができ、それぞれ独自の事業を行うようになった。新潟市のメインホールであるりゅーとぴあとしても、これまで行ってきた各種公演事業と育成事業だけでは、多様化している市民ニーズに対応することが難しくなってきていることも事実で、特にりゅーとぴあに足を運ぶ機会のない市民へのアプローチが大きな課題となっていた。今回のお話をいただいたことで、これらの市民への事業展開を改めて考える機会となった。

その後、地域創造プロデューサーの児玉真さんや地域創造のスタッフの方々とミーティングを重ねた結果、まずは市場調査も兼ねて、市内県内公共ホール関係者、地域で活動しているアーティスト、教育関係者等、アウトリーチについて興味を持っている方々に、その考え方やノウハウについての理解を深めてもらうための研修会を実施することに落ち着いた。

研修会は平成24年９月に約40名の参加者により開催。内容は地域創造さんが行っている「おんかつ」の手法の紹介を中心に、アウトリーチの定義、「おんかつ」で行っているアウトリーチの事例発表、そして「おんかつ」アーティストによる「模擬アウトリーチ」など、座学と実践を交えた、現在国内で行われている最先端のアウトリーチ手法を学ぶというもの。研修会の参加者からは大きな反響があり、次年度以降も同様の研修会やアウトリーチの実施を希望する意見が大多数を占めたことを受け、平成25年度も地域創造さんからの支援を受け、継続して事業を実施する事になった。手法としては、「おんかつ」をモデルにしたアウトリーチを、地域アーティストによって行う「地域版おんかつ」、名称は「りゅーとぴあアウトリーチ事業」とした。

平成25年２～３月に登録アーティストのオーディションを行い、新潟市及び近郊で活動している20代から70代まで、25組のアーティストの中から、２回の審査を経て、箏＆尺八ユニット「薫風之音」、フルーティストの中林恭子、ヴァイオリニストの加藤礼子の３組が選ばれた。彼らには「おんかつ」同様、アーティスト研修会を行い、改めてアウトリーチについての理解を深めてもらうこととした。内容は「おんかつアーティスト」が行うアウトリーチの見学、他地域で活動しているアーティストを招いての実践談、専門のコーディネーターの助言を受けながらのプログラム作り、アウトリーチ・ランスルーなど、どのメニューも大変充実した内容で、これらの経験を実践すべく、市内の小学校でアウトリーチを行った。６月から12月の期間に、各チーム４～６回のアウトリーチを実施。個々のアウトリーチについては、各コーディネーターのレポートをご覧いただければと思う。また、今年度のアウトリーチ事業の総集編として、昨秋に開館した秋葉区文化会館を会場に、登録アーティストによる「ジョイント・コンサート」を実施。特別ゲストに、５月のアーティスト研修会に講師として来ていただいた、宮崎県立芸術劇場音楽アウトリーチ事業登録アーティストの小川和紘さんを招き、４組による多彩な内容のコンサートとなった。

りゅーとぴあアウトリーチ事業は平成26年度以降も継続開催することになるが、実施にあたっての課題もいくつかある。特に問題なのは、市内に130校ある小学校のうち、児童数100名越えの約40校と、学年３クラス以上の約50校での実施方法の検討と、学校以外、例えば病院や福祉施設等での実施に伴う別プログラムの立案があげられる。今後はコーディネーターの役割を会館スタッフが担うことになるため、職員のスキルアップも重要な要素になると思われる。これらを視野に入れながら事業展開を行う必要性を感じている。

今回、地域創造さんと一緒に「公共ホール音楽活性化政令指定都市モデル事業」を開催出来たことで、日本のアウトリーチ手法の最先端を学ぶことができた。２年間にわたり関わってくださった、児玉真さんを始めとするコーディネーター、サブコーディネーターの皆様、そして地域創造スタッフの方々に深く感謝するとともに、引き続きご指導をお願いしたいと思っている。

コーディネーターレポート（グループC）
田村　緑

実践演奏家の誕生

今回、担当させて頂いたアーティストは、りゅーとぴあ登録アーティストの中で、一番お若い20代の女性ヴァイオリニスト、加藤礼子さんでした。彼女は東京で大学生活を送り、卒業後地元に戻り数年経過したところ。自宅でヴァイオリン教室を行いながら演奏するチャンスが舞い込んでくると演奏活動を行う。そんな中、人前で演奏し続ける演奏家（以下、実践演奏家と言い換えます）として成長し、個を確立させていく道のりは決して容易いことではありません。継続的な「演奏する場」に加え、「そのために費やされる事前準備の質」の確保が必要になってきます。

現状では、アウトリーチを学べる環境が整っている音楽大学は未だに少なく、卒業した音大生が、アウトリーチ実践演奏家として社会の即戦力となる、という段階には至っていません。仮に、彼女の歳で実践演奏家として活躍している演奏家が、既にアウトリーチの分野でも十分に経験を積んでいる、というケースは極めて稀と言えるでしょう。

そう考えると、今回、加藤さんが、地元・新潟でアウトリーチに初めて携わったという状況を、例えば地域創造の登録アーティストやオーケストラの団員が新たにアウトリーチに携わる、という状況と比べてみると、「演奏者として今まで深く携わったことのない分野に新たに関わる」という意味では、なんら変わりのない状況だったと言えます。

今回の研修では、アウトリーチ実践に際し「音楽の感動を聴き手と共有する」ことを一番に求めました。言い換えれば、今の加藤さんに出来る究極の音楽表現を求めた、ということです。

卒業して数年しか経っていないかもしれない、演奏の場もそんなに踏んでいないかもしれない、レパートリーも沢山ないかもしれない。それらの理由が、感動を共有できない言い訳にならないのがアウトリーチの現場です。なぜなら、その現場が、居合わせた聴衆の方々にとって、最初で最後の生のクラシック音楽体験の機会かもしれないからです。どんな演奏者でも、その現場では、唯一無二の音楽の使者として演奏を任されている使命と責任があるのです。

研修を通じて彼女に問うた事は、「音楽の感動とは何か」「実践演奏家とは何か」「貴方は誰か」ということでした。

加藤礼子とは何者か。加藤礼子というヴァイオリニストは何に感動し、何を表現し、何を伝えたいのか。。。。研修とは、それを自身に問い、言葉化し、共に語り、プログラムと演奏に反映させていく、試行錯誤の時間でした。そして、彼女自身が、唯一無二の個性を持ったヴァイオリニストだと自覚するまで、掘り下げていく作業を共にしました。
その上で、今度は、演奏を通して個性を表現する勇気を持つ。その表現を助ける手段としてアウトリーチの手法を学ぶ。それは実践演奏家として成長していく過程そのものでした。

６月：アウトリーチのランスルー、７月：アウトリーチ実践、３月：ガラ・コンサートと経験を重ね、加藤礼子さんは著しい成長を遂げながら、個性を確立していきました。

このように、アウトリーチに真剣に取り組む演奏家には、自分自身の内面に対峙し吟味することによって、結果的に、外的表現を飛躍的に成長させる経験が待っています。アウトリーチの現場で実践を積むことが、この成長を更に加速させるのです。
「唯一無二のアーティストに成る」
「拍手の向こう側にいる人と繋がる」
それは、アウトリーチのみならず、どんな演奏の場においても、自身の究極の表現を目指す実践演奏家に成り得る、ということです。

今後も、加藤さんを始め、全３組の登録アーティストの方々が、りゅーとぴあとの継続的な関係に助けられ、実践演奏家として確立されていくことを願っています。

コーディネーターレポート（グループA）
能祖　將夫

地域創造の「公共ホール音楽活性化事業」で10年間コーディネーターを務めさせて頂いた私だが、今回は初めてのことが二つあった。一つは地域のアーティストであること、もう一つは邦楽であること。果たして私に何が出来るのか出来ないのか、不安もあったが、どんなジャンルのどんなアーティストが相手であれ原点は一つ、それは「人間」に立ち返ること、という思いで臨んだ。

私が一番大切にしていることは、そのアーティストが子供たちに何を届けたいと思っているか、である。もしかしたらアーティスト自身も気づいていない、あるいはうまく言語化できていない思いを引き出すこと、そして何故その思いに至ったのかという背景を探ること、すべてはそこから始まる。それが掴めれば、次はその思いを形にすること。即ち具体的なアイディアと構成の組み立て。

薫風之音の場合はその思いが最初から意識化されていた。箏と尺八の音を古いもの、「伝統音楽」としてではなく、私たちの「民俗音楽」であり今を生きる音楽として感じてほしい、ということ。古い邦楽の世界に若葉の香るような薫風の音を吹かせたいというグループ名にもその思いは反映している。その思いを抱きながら、邦楽界の様々なプレッシャーもきっとある中で、今まで手探りでやってきた、という感触であった。

お二人の「宝」と思えたのは、その思いに芯が通っている（あるいは心が通っている）こととチャレンジ精神と素直さ。その宝を人間性と言い換えてもいいのだが、要はまずは試してみようという積極性である。

次の作業として、やってみたいことをアトランダムに出してもらった。自分たちのオリジナル曲、箏と尺八の代表的な曲、楽器紹介、参加体験スタイルのもの、異ジャンルとのコラボ、研修会で私が紹介した和歌山音活フォーラムの事例が大変興味深かったらしく、そのようなことも。

プログラムは入り口が大切である。まずは子供たちの心を開くこと。落語でいうところの枕。ここでぐっと子供たちの心を掴んでおきたい。邦楽のイメージから離れたいのであれば、逆にそのイメージを使ってみてはどうかと提案した。尺八と言えば虚無僧。虚無僧スタイルで登場するのはありやなしや。彼らは洋服で演奏するというスタイルを貫いているにも拘わらず、まずは試してみようということになった。江戸時代の代表曲を奏でながら、時代劇のように虚無僧で登場、子供たちの間を練り歩く、と、悲鳴と共に町娘（藤崎浩子さん）が登場、それを追って刀を振りかざした武士（先生）が･･･。寸劇スタイルでの江戸時代の代表作の紹介である。結果、子供たちは驚き笑い転げながらも、曲になるとじっと聞き入っていた。そこから自己紹介、楽器紹介、子供たちを箏の周りに集めて曲当てクイズ（ラピュタを演奏、現代曲も弾けることを紹介）と進んで行くとどうなるか。彼らからもアイディアがどんどん出て来る中、二人の間での考え方、感じ方の違いも見え隠れし、そこを埋めるための時間も必要になった。

参加体験プログラムについて触れておく。和歌山での弦楽四重奏のアウトリーチで、ボロディンの「ノクターン」を使って子供たちが参加するプログラムを作った。子供たちがトライアングルやカスタネット等の楽器を用いて、ナレーターの導きによって演奏家と共にロシアの森を作っていくものである。その時、トライアングルは星の光になり、カスタネットは歌う小石、紙は風音、と音で役割を演じる。これを応用して、浜辺の風景を作ってみることになった。北原白秋の詞で有名な「砂山」（りゅーとぴあの近くの寄居浜が舞台）を子供たちは全員知っている。二人の奏でる「砂山」の中、鯨岡徹さんの導きで、子供たちが音で演じていく。トライアングルは星の光、カスタネットは歌う貝殻、ウインドチャイムは流れ星、バードホイッスルは雀、砂箱は波音、マラカスは砂浜を歩く人の足音、和太鼓はなんと佐渡島。音のひとつひとつに気持が込められ、一体感の中で砂山の世界が演奏された（演じられた、といってもいい）。そこからプログラム最後の彼らのオリジナル曲へと繋げていくと、流れもよく、子供たちもしんみりと聞き入っていた。気がつけば、古典曲から現代曲、オリジナル曲までを一つの流れとして体験したことになる。

考えてみれば「新潟」も「地元アーティスト」も「邦楽」も、もしかしたら「東京」、「東京在住アーティスト」、「クラシック音楽」という中心に対しての周縁かもしれない。だが周縁には周縁にしか出来ないことがあり、力があり、面白みがある。それを一言で言えば、キーワードは「地元愛」だろうか。良いも悪いも様々なことを引っくるめて、地元であることを引き受け愛すること。それを十分に感じられるプログラム作りとなった。

今後益々、薫風之音を始めとする意識も能力も高い地元アーティストが、地域の劇場と連携しながら、身の回りの子供たちと音楽の力、芸術の力を通じて結びつくことを期待したい。

アドバイザー／コーディネーターレポート（グループB）
児玉　真

【アドバイザー総評】

2012年～13年度の政令市モデル事業は、新潟市芸術文化会館（りゅーとぴあ）と共同で行った。年度が始まってからの取り組みで、やや時間に迫られる格好ではあったが、りゅーとぴあは先駆的な取り組みのワンコインコンサートを始めすでに多様な音楽事業に取り組み、先進的な手法を持っている会館である。アウトリーチについても東京交響楽団と組み、東京交響楽団定期演奏会の客づくりの意味から５年生を会館に呼ぶ事業や、学校に楽団メンバーが訪問する活動を行ってきた。
それ故、地域創造の提唱しているアウトリーチ手法をそのまま持ち込んでも良いのかどうかという悩みはあった。今新潟に必要なことは何かということをりゅーとぴあとともに考え、探りながらプランを作っていった。

その中で、りゅーとぴあとしては地元アーチストとの関係ができていないのでその回路をつくりたい、その活動を通じてより内容へのアプローチをできるという気持ちがあるように見えた。ただ、その音楽的質の高さで評価を受けている会館として、地元演奏家の活用は質感について明確な展望を持てるかという課題をもっていたのではないかと思われる。地域の反応を見ながら進めたいという意向もそのことと関連があったのではないか。

まず、地元演奏家のアウトリーチ活用事業については、地元のアーチストや関係者がどの程度熱意を持ち共感してくれるか、を確かめつつ進めるために研修会を行うことにして、本格的な取り組みに発展させるなら２年計画の事業にした方が現実的であろう、ということで事業はスタートした。とはいえ、アウトリーチのプログラム作りの手法がより体感型になってきているおんかつ事業の延長線でおこなうことがりゅーとぴあの他の事業群のなかでどこまで整合性を持った活動として認知をえることのむずかしさも感じていた。

９月におこなった２日間にわたるアウトリーチ研修会では、まず吉本光宏さんがコミュニティ事業の意義としての普及という視点以外の発想の重要性を感じさせる話から始めた。田村緑さんの模擬アウトリーチは「音楽に関わることは楽しい」という工夫に満ちていて、受講者に強い印象を残したし、能祖将夫さんの和歌山フォーラムのプログラムづくりの話を聞き、実際に小学生にアウトリーチをする神谷未穂、田村緑さんのアウトリーチでは（猛暑で子どもを動かすのが大変だと、急遽子どもに会館まで来てもらった。こういうところは学校との関係がきちんとできているりゅーとぴあの強みである）、子どもの反応を見ることで地域創造のアウトリーチ活動の考え方などが集まった人達に理解されたのではないか。このときのあつまった会館職員やアーチストなど、参加者の熱意は非常に高く、地域の大事な財産としてのりゅーとぴあという場所や事業への参加への期待感とともに、向上の機会になると感じていることがとても強く伝わってきた。

そのときの反応の強さがあって、新潟市として地元演奏家によるアウトリーチ事業を立ち上げる決断をすることになり、2013年３月にオーディションを実施し３組の演奏家を選抜した。３月には宮崎県立劇場が行った新しい登録演奏家の３日間の研修会に担当者が訪れて研修を見るとともに、地元演奏家のアウトリーチを見学する機会もできて、一定の水準のアウトリーチ活動ができると判断したのかもしれない。

２年目の2013年度は、登録した３組の演奏家の研修ではそれぞれにコーディネーターが付いて本人の音楽的な考え方や志向を尊重しつつ指導をするとともに、演奏家同士お互いに見学したり話し合ったりする機会も作りながら、学校に派遣するまでにしていった。また演奏家とスタッフの安心のためにも、宮崎の演奏家の経験談を聞く機会をつくるなど、アウトリーチフォーラムの手法を採用しつつも、より細やかな配慮をして行えたと思う。

この手法の事業は、アウトリーチの経験を積んでもらうことで、演奏家の伝えるという気持（ミッション感覚）が強まることで演奏に対する姿勢が変わってくること、それを行う同志としての仲間意識ができてくることが大事だと思うけれども、３月に行ったガラコンサートの様子を見る限り、それはかなり期待出来そうだ。２年間の登録と言うことで2014年度も活動を続けるようなので、より結束が固まることを期待したい。

【中林恭子さんのアウトリーチのこと】

今回、アドバイザーとともに中林恭子さん(フルート)のコーディネートも同時に引き受けたので、中林さんのアウトリーチについても少し書いておきたい。

中林さんは今回応募した演奏家の中で最年長であったが演奏の姿勢がとてもきちんとしている印象。ただ、アウトリーチという新しい手法を獲得するために彼女自身の中で何かが変われるかどうかが最大のポイントだと思っていた。ただ、変わりたい、というとても強い気持ちを直感的に持っていることには頭が下がる思いである。今回の研修ではその強い気持ちを何度も感じることがあったが、一方具体的な曲目や話しかたについては必要以上に慎重なところもあり、彼女のこころの深い部分にどこまで触れられたかについては必ずしも自信が無い。しかし、方向を納得すると緻密に準備をしようというところは、スケジュール（身体的にも精神的にも）がかなりきついケースが何回かあったけれども(本人は不十分だと思っていると思うけれども)きちんと対応していた。

具体的には、まず、子どもたちに話しかける基本的なスタンスと言葉として発することに慣れることを優先課題と考え、今回はそこをまずはっきりとさせていくことから始めた。

多くの場合、言いたいことを明確にしていく作業と言葉になることは比較的連動できるのだけれど、そこに少し時間がかかった気がする。とはいえ、自分の思いをきちんと伝えるというところはきちんとできてきていると思う。本人の変わりたい、という気持ちの中には、もっとダイナミックな事に取り組みたいという気持ちがあるようなので、次のステップとしては、2013年の結果を活かして、同じ事を子どもが自分で気づくにはどうしたら良いか、という手法を考えていくと良いだろうと思う。いろいろな可能性があるだろうし、できると思う。